
壊れた正義の味方はなにを見るのか？

八雲 葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

壊れた正義の味方はなにを見るのか？

【Nコード】

N4373R

【作者名】

八雲 葵

【あらすじ】

「・・・ここは？」

世界にただ一人として味方のいない少年は死後、幻想とっていた世界に足を踏み入れる

そして、家族を・・・そして、ぬくもりを知る

人として当然の日常・・・それを得た彼はなにを思い、なにをするの

か？

唯一つ、言えることは物語として語り継がれたものは彼の存在によって大きく変わることだけ

見届けよう・・・すべての始まりを

主人公最強 ハーレム ご都合主義などを含み、それと同時にこの作品は作者の妄想で構成されています

そういったものが嫌いな方はブラウザバックをお願いします

転生（改訂版）

??? side

「——ここは…」

男は目を覚ますとなにか列のようなものに並んでいた。

「むっ、僕はなにをしていたんだ？」

しばらく、思考を巡らすがなぜか、霧がかったように思い出せない。

「——まあ、なるようになるだろう」

と、腹を括り列に並んでいくのだった。彼は気づいていない。自分の回りの人間の額には逆三角形の布がつけられていたことに

そして、それは自分にもついていることに

（五時間後）

「ここか？」

男はどこか執務室のようなところに案内されていた。

扉の上にはなにやら文字がかかっているが

（——読めん）

悠二には読めなかった。

（ノックするべきだろうか？）

——しばし悩んだ男は

ガチャリ

扉を開けた

「あ、来たね」

ボタン

（——いまのは幻覚か？）

自分のみた物が信じられない男。しかし、それではいつまでたっても終わらない

ガチャリ

半ば、幻であれと思いつつ、扉を開けるが

「どうしたの？」

幻ではなかった。部屋で待っていたのは黒い髪ของきれいな十歳ぐらいの少女、つまり美少女だった。

「はじめまして。僕は君たちが読んでいるところの神様だよ」

「は？」

あまりに突飛しゃな言動に啞然とする少年。

「だから！！か・み・さ・ま！！」

幼女は無い胸をそらし、どや顔で宣言する

（なに？このイタい子は）

思わず、胸中でそんなことを思ってしまう。

「そんなことより、ここどこだ？」

「えっ！？」

今度は、神（自称）が男の言葉に驚く。

「そんなことも知らないでここに来たの？」

「ああ。なんか、気づいたら列に並んでてな」

呆れたようすの神（自称）。

「あなた・・・死んだのよ」

「え？」

「だから、あなたは死んだの」

突然の申告に、呆然とする男。

「嘘・・・だろ？」

「残念だけど、事実よ。」

ウイン

神（自称）が示すと、そこには見覚えのある服装の男が腹から血を流して倒れていた

・・・彼だ

「ああ・・・そういえば・・・あの時」

だんだん、記憶が鮮明になってきた男。

（襲われたてたこを助けたら、ナイフで刺されちゃったんだっけ。
やれやれ・・・）

恥ずかしそうに頭をかく。

「あなたも無茶するわね。あなたの体の状態、わからないわけじゃないでしょ？」

「ああ」

（いろいろやりすぎて、もうボロボロだったからな）

内心、苦笑する男。

「それで、僕はどこに行くんだ？」

「どこだと思う？」

「――地獄」

即答。それも仕方ないことだろう、彼は一般的に言えばテロリストに属されるべき人間なのだから。しかし、それはあくまで一般論でしかない。

「却下ね。あなたを地獄に送ったら、きっと地獄はあふれかえっちゃうわよ」

ウイン

と、男の前に途方のない桁の数字の書かれたモニターがしゅつげんする。

「これは・・・？」

「これはね。あなたがいままで救った人間の数よ」

「っ！？だが、僕は救うために・・・」

罪悪感につぶれてしまうような表情の男。

「たしかにね、あなたは彼らを救うために何万人と殺しているわ。でもね、それを差し引いても、君は人をたしかに救ったのよ」

やさしい、それでいて諭すような口調。

「だから、あなたは地獄へはいかない」

「――」

「いかせられない。神のプライドほくたちにかけて」

そう宣言する神は神らしい威厳に満ち溢れていた。

「――ひとつ聞く」

「なに？」

「僕は・・・間違っていたのか？」

「――」

いまにも、泣き出しそうな表情でとう男。

「あなたがしたことは、ある意味では間違っているし、ある意味では正しい」

「――？」

わかっていないようすの男にため息を吐くと

「あなたのやったことは、人間の到底、やれることじゃないのよ。普通の人間は、あそこまで自分を殺せない。あそこまで、機械にはなれない。でも、貴方はそれをやってのけた。それが過ち」

そう、それは神の所業。無常に、天秤の担い手は本来なら、神が座すべき立場。しかし、男はそれを人のみでありながら、実現し続けた。

それは、人として間違っている行為。

「でも、だからこそ神は君を救いたい。わたしたち私達がしなくてはならないことを、させてしまったから。止めようと思えば、とめられたのに」

心底後悔しているようにこぶしを握る神。

ポフッ

「え？」

「気にするな。どうあれ、僕の選んだ道だ」

そんな神の頭に手をおいて、微笑む男。

「もしかしたら、貴方は普通に生活できたかもしれないのよ？」

「そんなIFのことは考えないようにしているんでね。それに、アレがあつたからいまの僕がいる。やり直しなんかできない、いやしちやいけない」

その表情はさつきまでの弱さはなく、ただ決意がにじんでいた。

「……そうね、失言だったわ。それで、あなたの行き先だけでも一回人生を送る気はない？」

「どういうことだ？」

「選択肢はいくつかあるわ。私の口車に乗り、転生する道。そして、英霊へとなる道」

フウン

神がそういうと、なにもなかった空間に二つの道が出来上がる。

「どちらか選べと？」

「ええ、私としては転生を選んでほしいけどね」

かすかに微笑む神。

「――わかった」

踵を返し、男は踏み出す。

「じゃあな、神様」

――転生への道を

??? side end

神 side

「・・・いったわね」

神は男が歩いた道をただ、見つめていた。

「ふう、これで彼が抑止の守護者に組み込まれることはなくなったわけね」

安堵したように溜息を吐き出す。

（まあ、彼が英霊になる道を選んでも、強制的に転生させる気だったけど）

どちらにしろ、彼に選択肢はなかったということだ。

（さてっと、いろいろ準備しなくちゃいけないわね）

ウイン

なにか、モニターを投影するとそこに打ち込んでいく。

（まあ、彼の場合はもともとスペックは高いからね・・・フッフ）

その姿はどこか楽しそうだった。

邂逅（改訂版）

「・・・ここは？」

男は気がつくのと、みたこともない場所にたっていた。

「うち、嫌に目線が小さいな」

そこで、体に異変の気付く。

「・・・これでは、六歳ぐらいか」

体が縮んでいたのだ、しかも大幅に。転生する前、彼の身長が180ほどだったのに、いまは130cmほどしかない。

「・・・まあ、文句を言っても仕方ないな」

ピトッ

「む・・・」

なにかが、彼の額に張り付く。

「これは・・・桜？」

それは、桜の花びらだった。そして、同時に肌を刺すような寒さが彼を襲う。

「寒いな・・・」

すこしでも寒さを凌ぐために手をポケットにいれる。すると

くしゃ

「・・・これは、メモか？」

なにか、メモのような紙切れが入っていた。それを丁寧に広げていくと

『これを見てるってことは無事に転生できたみたいね』

と、達筆な文字でかかれていた。

「・・・女神めいじんか」

自分に幸せになれとほざいた神を思い出す。やはり彼女の仕業らしい。

『まず、君の近くにトランクがあるはずだけど見つかる？』

「・・・トランク？」

キョロキョロと周りを見たら・・・

「あつた」

そう遠くないところにキャスターのついたトランクがあつた。

パカッ

「これは・・・」

中を開けてみると入っていたのはいくつかの宝石と外套、彼の仕事道具が入っていた。

『中には、君の使っていた道具を入れておいたよ。あとは、体にいろいろ追加したから解析してみることをお勧めするよ』

「・・・なにしやがった。トレースオン同調開始」

カチン

慣れた感覚で魔術回路を起動させ、体を確認する。

—— 肉体異常なし

—— 内臓系異常なし

（体は特に異常はないな。次は魔術回路だな）

—— 魔術回路1000本（内五百本に封印）

—— 王の財宝 リンク正常

—— 固有結界展開可能

（ブッ！？なんだよ、このふざけた魔術回路の数は！！それに王の財宝だと！？）

かつて、それを使っていた英霊と対峙したことのある彼は冷や汗を流す。

——リンカーコア 異常なし
——魔術刻印 異常なし

（リンカーコア・・・？どこかで聞いた気がするな）

しかし、思い出せる気がしない。

——写輪眼 使用可能

（ちょ！？写輪眼！？）

アニメを趣味としていた彼は吹く。

「思い切り、やりやがったな」

——注意

「まだあんのかよ」

——容姿の変化を確認。

——金髪 碧眼へと変化。

「マジかよ・・・」

綺麗なor2の形を作る。

しばらくすると、頭を切り替えたのか、立ち上がると。

「——しかし、寒いな。投影開始・・・あれ？」
トレースオン

移動しようと、体を強化したつもりが強化はされず、彼の体には暖かそうなコートが羽織られていた。

「投影・・・やったのは僕か」

半ば信じられない様子だが外套を解析して気付く。

「どうなってんだ？僕の固有結界にこんな力はないぞ？」

しかし、投影できたのは事実だ。これは揺るがない。

「どういうことだ・・・？」

再度、体に解析をかけ気付く。

——魔術刻印に変異を確認

——固定術式追加

——特定不能

「——刻印を弄りやがったなあ」

刻印とは彼の背中の肩に刻まれているもので、彼専用の魔導書のよくなものだ。詳しく知りたければ申し訳ないがググってくれ。

閑話休題

少年ははあ、とため息をはくとあらためて周りを見回す。

見えるのは一面の桜。

「しかし、春にしては寒いな」

桜が咲いていることからの判断だが、いまは間違いだ。
しかし、いまの彼にそれを確かめる術はない。

「——子供!？」

そんなのんきなことを考えていると、不意に後ろから声がする。

「・・・?」

振り向いてみると、そこには彼と同じ金髪をツーサイドアップにした少女がいた。

(なんか、^{デジャヴ} 慨視感・・・)

また、どこかでみた感覚に襲われるのだった。

主人公 s i d e e n d

??? s i d e

「んっ・・・」

少女は孤独だった。

己が理想のために、一人奔走する。

しかし、彼女はいつまでも孤独だった。いや、孤独だと思い込んでいる。

彼女の旧友達は大切な人と結ばれ温かい家庭を作っていた。

それは、やがて彼女の心を殺した。しかし、あるとき考えた自分はいつまで一人でいなくてはいけないんだろうか・・・？と

そう考えると彼女の目の前は真っ黒になっていくのを感じた。

だれだって、一人は嫌だ。それに罪はない

でも、彼女は違った。

過ち・・・それを知りながらあるものをこの場所に埋め込んだ。それは彼女の理想の雛形。願望器のプロトタイプ。そして、願った。
“もしかしたら在ったかも知れないもう1つの可能性を見せてください”・・・と

願望器はそれを叶え、一人の少年を産み出した。

「はじめまして、うーんと・・・」

彼女はうちに眠る不安を殺し、彼の名前を考える。

（いい名前をあげなくちゃ・・・）

「桜内、義之」

「????」

少年はわかっていないように首をかしげる。

「君の名前だよ」

「・・・うん」

彼女が言つと、義之はたしかに笑った。

「っ!？」

不意に、彼女は魔力を感じた。

「ごめんね、ちょっと待っててね」

「うん」

義之を待たせるように言つと少女は駆ける。

「たしか、この辺・・・っ!？」

そして、少女は見つけた。

「子供!？」

そう、そこにいたのはコートを来た少年だったのだから。

髪は彼女と同じ金髪、瞳は蒼。来ているコートからは微かな魔力を感じる。

なぜ、いるのと言つても疑問だが、彼女は違うことを思った

（なんで、そんな寂しそうな瞳をしているんだろう・・・）

彼のまるで深海のような青い瞳を見て少女はそう思った。

「・・・誰？」

彼は聞いた。

それが芳乃さくらと彼のはじめての出会いだった

変革（改訂版）

主人公 s i d e

「誰？」

歩き出そうとした彼を遮るように表れた彼女をみる。
金色の髪をツーサイドアップにした可愛らしい女の子だ。

「僕は芳乃さくら。君は？」

「――」

答えない。答えられないのではない、彼にだって名前はある。一瞬、
偽名を名乗ろうかとも瞬巡するが

（いや、名乗ろう。僕の名前はこれなんだから）

「悠二。水無月悠二」

「悠二くん？」

確認するさくら。悠二がうなずくと、すこし顔が綻ぶ。

「――可愛い」

「っ!？」／／／

それをみて、ボソツとした悠二の呟きに顔を赤くするさくら。

「ゴホン、それで君はなんでここにいるの？」

咳払いをして、話題を変える。

そして、悠二は僅かに顔をしかめた。

（まずいな、こんな時間に彷徨く六歳児なんてロクでもない）

「——夜桜の見物」

「うん、嘘だね」

ダメ元でいっては見たが、一切通用しなかったようだ。

「じゃあ、なんで魔力を帯びたコートを着てるの？」

「知らない」

「——」

悠二の言葉をすこし変な顔をするが、すぐに戻ると、言った。

「——じゃあ、なんで君から魔力を感じるの？」

「っ—」

今度は悠二が絶句した。そして、気付いた。

（僕、魔力殺しつけてないや・・・）

自分がなにも対策をしていなかったことに気付く。以前ならいざ知

らず、いまは半分封印しているとはいえ、五百からなる魔術回路による莫大な魔力を持っているのだ。

魔術殺しをつけなければ下手をすれば素人にすら関知されてしまう。

（某あかいあくまのうつかりではないがな）

知人の恋人を思いだし、苦笑する。

「——理由はない、ただ歩いていただけ」
「ご両親は？」

「居ない、生憎家族には嫌われてる」

六歳とは思えない大人びた表情を浮かべる悠二。ちなみに嘘はいつていない。

彼はかつては自分にある異能のせいで生まれて間もない頃に捨てられていた。

「そう・・・」

悲しげに表情を揺らすさくら。

「強いて言うなら、霊脈がこっちに集中していたから興味本意？」

「・・・っ」

つぎの悠二の言葉にさくらは息を飲む。

「——君の目的はなに？」

つぎの瞬間には敵意すら滲ませ、さくらは悠二を睨む。普通なら、気付くだろうが皮肉なことに彼女にそんな余裕はなかった。

「さあ？とりあえず、この先にあるもの」

「っ！ー！ルナ！」

『了解、セツトアップ』

ウィン

彼女のネックレスが電子音声で答え、わずかなタイムラグの後魔方阵に包まれ、服装が変わる。

ジャキン

「ごめんね、僕はどうしても桜を守らなくちゃいけないんだ」

手にした剣を構え、悠二に向ける。

（やはり、何かがあるのか）

カマをかけた悠二は確信する。このさきには彼女が身命をかけてでも守りたいものがあるのだと

「——悪いが、それを聞いては黙っているわけにはいかない。王^{ガイ}の財宝^{トオブハピロン}」

パチン

「えっ!?!」

真名を唱える。すると、悠二の背後の空間が歪み、数多の武具が刃を覗かせる。

かつて、穢れた聖杯戦争にて争った黄金の英雄王の宝具だ。

武具一つ一つが宝具の原典、威力は並みではない。

「くっ!?!」

「遅い」

ジャラン

「ぐっ!?!」

アクションを起こそうとしたさくらを起こす前にゲートオブバビロンから伸びたが縛り上げる。

「案内しろ。約束する、お前が思っているように悪いようにはしない」

「えっ!?!」

「――」

ジャラン

悠二はそれだけいうと、さくらを縛っていた鎖を解き、ゲートオブバビロンを閉じる。

「——いくぞ」

「うん、うん」

年齢にそぐわない威圧感に押され、さくらはおずおずと歩き出した。

side end

さくらside

「——ここだよ」

さくらは悠二を案内し、件の桜の樹についた。

「あ」

「御待たせ、ごめんね？」

彼女の言いつけを守り、義之はそこにちゃんといた。そのことに表情をほころばせていると、横から悠二が声をかける。

「——芳乃、これは・・・」

「うん」

（もう、気づいちゃったのかな？）

横にたつ黒いコートを着た少年をみて、思う。

「不完全な願望機。こいつを植えるなんて、正気？」

「――」

（もう、そこまで・・・）

予想以上に彼の力は強いようだ。たしかにこの桜には欠点がある。オリジナルとは違い、要領を越えると無作為に願いを叶えてしまう欠陥品。

しかし、悠二のつぎの言葉でさくらの表情は変わる。

「――なんにもいわなくていいよ。君も理想を追っていたんだ。叶う訳のない、幻想みたいな理想を」

まるで、自分も目指していたみたいな言い方だ。だが、さくらは指摘できなかった。

「でも、君は孤独に負けてしまった。といったところだろう」

そう語る彼がなんとも言えないくらい儚げだったから。

「悠二くん・・・??」

「――いや、ただのざれ言だ。忘れてくれ」

そういつて、顔をそらすと悠二はさくらに向きなおる。

「――トレースオン 同調開始」

なにかを呟くと、悠二はすぐに顔をしかめる。

（なにをしてるんだろ・・・？）

「トレース オフ
同調完了」

再び、眩き眼を開ける。

そして、さくらに向きなおるとんでもないことを言っただけだ。

「今すぐは無理だが、これなら僕でなんとかなるぜ」

「っ！？」

あまりの衝撃にさくらの頭は真っ白になる。

「っ！？……そんなことができるの！？」

「ああ、任せろ。とはいえ、今できるのは応急処置だけだな」

彼はそういつと桜の向き直る。

「サーキットオープン
魔術回路開放」

ブウン

「っ！？」

彼が何かをつぶやくと、彼の保有魔力が跳ね上がるを感じた。

（なにかの封印をしていたのかな・・・？）

さくらの予想は正しい。悠二はいま、封印されていた魔術回路を開いたのだ。

「・・・解析開始」

六歳に似つかわしくないほどに真剣な表情でなにをしている。あいにくとさくらにはそれが何なのかということとはわからない。

「・・・完了。状況把握、完了。構成材質、創造理念ともに解析確認」

そして、流れが変わる。

「っ!？」

それはさくらにも確認できた。いままで淀んでいた魔力が、全部ではないにしろ。澄んできていた。

「・・・全工程完了。終わった」

「・・・すごい」

桜に手を当てて、確認しさらに驚愕する。

（簡易的だけど、自己診断回路・・・??）

かつて、彼女では到らなかったところを目の前の六歳ほどの少年はたやすくやってのけたのだ。

「どうだ？」

彼が聞いてくる。

「う、うん。大丈夫だよ」

「それはよかった」

ふと、さくらは気づいた。

「悠二君っ！？その目はどうしたの！？」

目の前の少年の瞳に赤く巴模様が浮かんでいることに。

「あつ、すまんすまん。戻すのを忘れちゃったな」

シュイン

もとの青い瞳に戻る。

「僕の異能のひとつって、ところかな？」

「――魔眼の類？」

「まあ、そうだな」

さくらだって、それぐらいの知識はある。魔眼とは外界からの情報を得る為の物である眼球を、外界に働きかける事が出来るように作り変えた物。

主に魔術師が持つ一工程の魔術行使で、視界にいるものに問答無用で魔術をかけるというもの。視界に収めていれば効果はあるが、対

象が魔眼を見る（目を合わせる）と効果は飛躍的に増す。

その隠匿性と能力から魔術師の間では一流の証とされる。しかし人工的な魔眼では「魅惑」や「暗示」までが限度で、それよりも強力な魔眼の保持者は全て先天的な能力者である。そして、これら先天的な能力は魔術によって再現する事は出来ない（wikiより抜粋）

写輪眼は厳密に言えば魔眼とは違うかもしれないが

「写輪眼、僕はそう呼んでいる」

「先天的な魔眼なんて、珍しいね」

「・・・良いことなんてないがな」

自嘲気味な笑みを浮かべた悠二をみて、さくらは地雷を踏んだ・・・
と思った。

「・・・ごめんね、悠二君はその目のせい・・・？」

「まあ、な。まあ、この目だけのせいじゃないがな」

そこで、さくらはふと気づいた。

「悠二君、話し方変わってるね？」

あったときの素っ気無い口調は収まっていた。どうやら、こっちのほうが地のような印象をさくらは受けた。

「ああ、お前が嫌な奴じゃないってわかったからな」

「っ！」／／／

「どうした？顔が赤いぞ？」

「な、なんでもないよっ！！」

（言えるわけないよ・・・見惚れていたなんて）

さくらは見惚れていたのだ。いままでの大人びた感じとは真逆な年相応の純粹な笑顔に。

誘い（改訂版）

悠二 side

「さて、行くか」

魔術により、ある程度の改良を施した悠二。それを終えるとそう言った。

いつのまにか、仕事道具の満載されたトランクも持っている。

「え！？…どこ行くの？」

「決まってるだろ？今晚の宿探しだ」

こともなげに答える悠二。こんな時間に入れてもらえる宿があるのか、心底不安であったので最悪野宿を覚悟していた。

（まあ、サバイバルは苦手じゃない・・・が）

たしかに、彼は苦手ではない・・・ができれば普通の部屋で寝たい。なぜなら、彼は成人ではなく六歳という未熟も甚だしい体だからだ。体調面も考えて、できれば野宿は勘弁してほしかった。

「こんな時間に？」

「・・・まあ、なんとまるだろう」

（最悪、写輪眼の暗示で・・・）

「まさか、魔眼での暗示でなんとかしようなんて思っていないよね？」

ギクッ

考えを当てられ、思わず硬直する。

「はあ、図星みたいだね・・・」

「・・・いつものことだ」

「・・・」

悠二はそういつとさくらは悲しそうに顔をうつむかせる。

ギユ

「・・・？」

ふと、気がつくと着ていたコートを誰かが引っ張っていた。

「ねえ、お兄ちゃん」

「――義之だった。悠二の身長が上のため、見上げるような形になっている。」

「一緒に行こう？」

「・・・うれしいことを言ってくれるな」

きわめて自然な手つきで義之の頭に手を置くと、義之と目線を合わ

せるようにすこし屈む。

「でもな。どこの誰とも知らない僕にそんなことを言ったらだめだ」

「う、うん」

やさしく諭すようにいう。そして、さくらたちに背を向けようとするとその前にさくらが口を開いた。

「悠二くん……よかったらさ、うちにこない？」

「……正気か？」

「酷いよ！……それとも悠二くん、ボクたちと暮らすのが……イヤ？」

「お兄ちゃん」

「そうではない」

即答。

「申し出はうれしい。だが……」

シュイン

瞳に巴模様が浮かぶ。

「写輪眼これをはじめ、僕には人をたやすく殺せるほどの異能ちからが宿っている。それでも、君が僕に言うのか？ 供に来いと」

瞬間、魔力が悠二の体に漆黒の鎧を形作る。かつて、狂戦士のクラスで現界した湖の騎士のそれと酷似した漆黒の鎧を。

「……うん」

そう、さくらはたしかに答えた。

「……そうか」

悠二も、どこか安心したような笑みを浮かべ答えるのだった。

*

それから悠二達はさくらに案内され、桜並木を歩いてある不思議な光景だ、と悠二は思う。普通ではあり得ることのない幻想的な風景。まるで、雪のように花弁が舞っているのに向に桜の花は減らない

（まさか、これで冬なんてな）

歩きながら、悠二は思う。

この島……初音島ではなにも珍しくはないが彼の前世ではありえない世界。そして、悲劇の物語としてつづられる舞台。

（……やっと、思い出した）

記憶の奥底に埋没していた記憶をようやく取り戻していた。

「どうしたの？悠くん」

「いや、なんでもない」

いつのまにか、さくらの僕に対する呼称が変わっていた

つい先ほどまでは『悠二くん』だったのに、いまでは『悠くん』となっていた。悠二自身嫌では野で訂正していない。

そんな風に歩いていると、ふと義之は口を開く。

「どこにむかつてるの?」

「いいところだよ。暖かくて賑やかでご飯がいっぱい食べられるところ」

笑顔で答えるさくら。

(・・・やれやれ、やっぱり笑顔のほうが可愛いな)

隣を歩く悠二は彼女を見てそう思った。

ぐう

ふと、誰かの腹の虫になる。

よしゆき「／／／／／」

恥ずかしそうに顔をうつむかせる義之。どうやら義之のようだ。

「あはは、お腹すいた?もうすぐだからね」

それをみて、さくらが幸せそうに笑う。

「えっと、あの、その……」

しどろもどろになってしまふ義之。それをみて、

「さくらだよ。芳乃さくら」

さくらは義之の顔をまっすぐに、そしてじつと覗き込むけれどよしゆきは恥ずかしさのあまりに目を反らす。

（さくらよ、すこしは気づいてやれ）

でも、さくらはそれを別の意味ととったらしく、顔にすこし影が差す

それを見た義之は「しまった」と後悔したような顔をしていた。

子供は純粹だ。よくも悪くも人の感情に機敏に反応する

「……さくらさん」

気恥ずかしさもたぶんにあつたろうに・・・でも、義之はそういったけっして、大きな声とはいえない
でも

「うん」

笑顔が弾けた。

よっぽどうれしらしい

そして、同時に悠二を方を向くと

「悠くんも」

悠二はそんな様子に苦笑を浮かべながらも、答えることにした。

「さくら」

「うん」

呼び捨てなのは、とくに気にしていないようだ。そんなようす悠二は内心、やれやれと内心苦笑する。

「やっと名前呼んでくれたね」

名前を呼ぶ・・・ただそれだけのこと・・・のはずなのに、この人はそんなことでさえ・・・ここ数年はなかったのだろう。

「じゃ、行こっか」

「うん」

さくらの言葉にうなずく、隣を歩くよしゆき

（親子・・・か）

そんな様子に親子を感じてしまい、すこしの寂寥を覚える。彼は親というものは知らなかった。だから、時折、それがほしくなる。

「ほら、悠くんもいくよ」

(やれやれ)

そうやって。強引に悠二の手を握り隣を歩かせるさくら。そんなこそばゆい光景に悠二はまた心中でつぶやくのだった

顔には笑みを浮かべながら・・・

四話 家族

悠二 side

ついに朝倉家へと至った僕達

そして

さくら「今日からここがキミのお家だよ」

さくらがにつこりと振り返りながら一軒の家を指差す

そこには僕としては見慣れているようではじめてみる朝倉家

その隣にたつ和風の家が芳乃家だろう・

よしゆき「ここが？」

「うん。ボクのお兄ちゃんの家なんだけどね。みんないい人だよ」

——ピンポン

さくらがインターホンを押すと、ぱたぱたと家の中から足音が聞こえてくる

そして、程なく

ガチャリと音を立てて玄関が・・・少しだけ開き・・・

由夢「……………」

幼き由夢がそこから僕達を覗き込む

よしゆき「……………」

由夢「じー」

よしゆき「え、あ、えっと」

由夢「じー……………」

よしゆき「あ、あの」

「じ……………」

よしゆき「さ、さくらさん？……お兄ちゃん!？」

興味津々な由夢に若干……というかなんか戸惑つよしゆき。

さくらと僕に助けを求めるが

さくら「にやはは、こんばんは由夢ちゃん」

さくらに関しては原作どおり、無干渉のようだ・

すこし意地悪すぎやしないか？

由夢「こんばんは」

視線をよしゆきに向けたまま、さくらに挨拶する由夢。

よほどよしゆきに興味があるらしい・・・

すこしさびしいな・・・

だって僕・・・空気になっちゃってるし・・・orz

さくら「この子が義之くん。この前お話した子ね、でこの子が水無月悠二君」

由夢「うん」

さくら「音姫ちゃんもおいで」

さくらがドアの奥の方に向かって声をかける。

すると

音姫「……………」

小さく漏れる息と共に、ドアの隙間からもうひとつの顔が飛び出す。

朝倉音姫・・・原作でのメインヒロインの一人だ

音姫「ほら、ゆめ。ちゃんと外にでて」

由夢「はい」

ひょこひょこ出てくるふたりの女の子、というか・・・やはりお

約束というかなんというか・

小さな方は少し恥ずかしそうに、大きな方は少しぶすつとしながら。

やれやれ、これがあの音姉と由夢だとはね・

キャラ変わりすぎでしょ・

二人を前にしてよしゆきが困ったようにさくらを見上げるが・

さくら「ボクはお兄ちゃんに話があるから、後は適当にやってね。

」

予想通りの無干渉

さくら「ちゃんとうまく仲良くするんだよー」

そついい残し、さくらは早々と家に入ってしまう

・・・やれやれ

僕達二人が取り残される

よしゆきは相変わらずどうしたらいいのかわかりかねているが、ここは年長者？として先に手本を見せますか

「とりあえず、僕は水無月悠二・・・よろしくな。二人とも（ニコッ

二人「うん／＼／＼／＼／＼／」

二人とも急に顔が赤くなった・風邪だろうか？

よしゆき「さくらいよしゆきです。よろしく」

俺に習い、自己紹介をするよしゆき

そして手を差し出すが・

……………。

でも、その手に触れるものはなく、ぶらぶらと宙に浮いたまま。

よしゆき「あ、あはははは」

そして、よしゆきが手を戻そうとした時、ぎゅっと温かい感触が右手を包み込む。

よしゆき「えっと」

由夢「ゆめ」

よしゆき「へ？」

やれやれ、なに鳩が豆鉄砲食らったみたいな顔してんだか・

由夢「あさくらゆめ」

そう言つて由夢はにーっと笑った。

かわいいじゃねえの・

お持ち帰りはおK？

よしゆき「あーっと、名前？」

なに当たり前なこと聞いてんだか、この野郎は・

由夢「うん」

よしゆき「そっか、ゆめって言うんだ」

由夢「そう、よろしくね……お……」

よしゆき「お？」

はぁ……僕はどうかやら蚊帳の外みたいだな・

由夢「お……おにいちゃん達／＼／＼／＼／＼／」

とおもったが、ちゃんと入っていたみたいです・やったあ！！

音姫「おとめ」

ポツリと一言。

それだけ言っと、音姉は家へと入ろうとしてしまう

これで原作での初対面は終わり

だが……所がぎつちゅん！！

「音姫ちゃんていいのか？」

音姫「うん」

僕の言葉に立ち止まる音姫

俺様という異端【イレギュラー】がいる以上、原作どおりに行かせ
るわけにはいかない

俺はポケットに手を突っ込むと

「ほい」

中から取り出したように和菓子を音姉の前に差し出す

音姫「これ・・・私に？」

「ああ」

実はこれ、僕が能力を使って作った物なんだが今ばれるのはめんど
いからな。ポケットから取り出したようにしたわけだ

由夢「じーーーーー」

それをみて、猛烈な視線が一つ

由夢だ

どうやら、彼女もほしいらしい

「ほれ」

同じものをもう一個作りだし、今度は由夢に渡す

さらに

「よしゆきにもな」

さらによしゆきにもあげる

「まあ、お近づきの印ってやつだ。シシシ」

前世のときのように声に出して笑う

・・・ただ、知り合いには意地悪な笑顔だと言って不評だったけどね

音姫&由夢「あ、ありがとう／＼／＼／＼／＼／」

「ああ、どうしてしまして（ニコッ）」

由夢&音姫「／＼／＼／＼／」

どうしたんだろう、二人とも顔が真っ赤だ

はっ！

まさかこれが噂のニコポか！？

・・・ありえないな。

由夢「そ、それよりも、はやく中に入ろう？ かぜひいちゃうよ」

由夢に半ばひっぱられるようにして玄関をくぐるよしゆき。僕も続いてはいる

家に入ると温かい空気、そしておいしそうな匂いが漂ってきた

・・・僕が望んでも手に入らなかった感覚・・・いや、今は止そう

よしゆき「あ、え、えっと、おじゃまします」

由夢「ちがうよ」

よしゆき「え？」

由夢「ただいま」

よしゆき「ん？」

由夢「だから、ただいま、だよ」

由夢が屈託のない純粹な笑みで言う

由夢「今日からおにいちゃんのおうちだもん」

いまは・・・いまだけは・・・この幸せをかみしめよう

考える時間はいくらでもある・・・

みんなが笑えるようになってからでいいじゃないか

そう自分に言い聞かせるように心中でつぶやくと由夢に手をひかれて奥に行くよしゆきを見る

・・・ありがとう

口には出せないが、心の中で礼を呟く

その日、僕に【初めて】の家族ができた

四話 家族（後書き）

後書きです

悠二「なあ、リオン」

なんだ？

悠二「お前、たしかそろそろ試験だよな？」

ギクッ！

さくら「リオンくん？（「「「「「「「」」」」」」」」」

悠二& amp・リオン「「ひっ!？」」「

だ、大丈夫ですよ……多分（ボソッ

さて、そんな下らないことはさておき、感謝コーナーどうぞ

さくら「ええっと、やまあざらし様、さまよう人様、そして龍賀様、
感想ありがとうございます」

そして、読んでくださった皆様に無上の感謝を

やまあざらし様に指摘していただいた所はノロノロですが、訂正し
ていきたいと思っています

次回も、前作と大差ない予定です

では、次回のD・C？ 孤独な転生者と孤独だった魔法使い

悠二「第五話 音姫。」

3人「「見届けろ、すべての始まりを！」」

五話 音姫

悠二 side

「はぁ・・はぁ!」

ぼくはいま、走っている。

前世ではなかったぐらいに必死に走っている。

原作通りといえばわかるだろうか？

そう、由姫さんが死んでしまったのだ

その時、ぼくは何もできなかった・

……なにか出来たかもしれない

もちろん、由姫さんにバレるのも覚悟で解析の魔術をかけたさ

でも…

出された結論は『原因不明』

実のところ、由姫さんの病気は不治の病どころか、症例すら少ないらしい

病院の医者のお話を盗聴しての情報だった

そして、ある日

「悠二くん」

懺悔のつもりか……ぼくは解析の魔術を掛けた日から毎日、由姫さんの病室を訪れていた

そんな日が数日続いたある日、突然由姫さんが話しかけてきた

「……なんですか？」

「……悠二くん、ありがとう」

え？

なんで由姫さんがぼくに礼を言うんだ？

「……感謝されるような事は何ひとつしてませんよ」
そう、ぼくが呟くとすこし可笑しそうに笑い

「貴方は私を直そうとしてくれた」

「……なんのことですか？」

いくら、バレるのも覚悟とはいえ、バレないに越したことはない
ぼくのアレは魔術であり、彼女達の魔法とは似て非なるモノだ
でも

「隠さなくてもいいわよ、貴方の事はさくらさんから聞いてるわ」

まるで、すべてを見透かしたような言葉

…あのお喋りめ

その原因がさくらにあるときき内心毒づく

「すみません…ぼくの力不足で」

「いいのよ。私はもう、十分に生きたわ」

トレースオン
……同調開始

由姫さんの体に解析の魔術を走らせ、状態を確認する

……良くなっているはないが、悪化もしていない

「どう？私のからだの調子は」

「っ！？」

ぼくはよほど、驚いていたんだろう

逆に由姫さんがすこし驚いたように「それでも正義の魔法使いなんだから」と微笑む

それは音姉や由夢と同じで綺麗…というより、可愛い笑顔だった

ふう、敵わないな…

どうやら、最初からぼくが魔術を使用していたことを知っていたようだ

「悠二くん」

「はい」

いままでの和やかな雰囲気は成りを潜め、一瞬で引き締まる

「あの子達……音姫と由夢をよろしくね」

そういつて、また微笑む

ほんと、病人には見えないよ

「大丈夫ですよ。あの二人は強い、ぼくの助けなんて要りませんよ」

これは素直な感想

原作知識云々ではなく、実際に音姉や由夢と生活したぼくの感想だ

……でも、由姫さんの表情は晴れない

「ええ。たしかに二人は強いわ。でも……」

とても脆いのと悲しげな表情で続ける由姫さん

「……」

「もし、二人がくじけそうになったとき、二人をお願いしてもいい

かしら？」

まるで、答えは決まっている問いを確認するように聞く

……いいのだろうか？

ひょっとしたら、ぼくには此の問いに答える資格はないのかもしれない

でも

「はい」

そう、迷い無く答えた

自分でも驚くぐらいに

「そう」

満足そうに微笑み

「どうせなら、恋人になってくれてもいいわよ？」

そんな爆弾を投下した

でも、焦りはしない、動揺もしない。

なぜなら

「馬鹿な事、言わないで下さい。二人にはいずれ相應しい彼氏が見

つかりますよ」

そう、苦笑混じりに答える

なぜなら、ぼくは二人の後押しは出来ても、手を取ることも……出来はしないのだから

「鈍感（ボソツ）」

由姫さんがなにか、呟いた気がしたが、上手く聞こえなかった

……その翌日

ぼくが用事で居ないとき、由姫さんは息を引き取った

なぜか、由姫さんの死に顔は何とも安らかだったそうさ。

それから、迅速に葬儀は終わり、由夢はまるで滝のように涙を流し、音姉は妹に涙を見せまいと冷たい仮面で涙を隠した

ぼくは……涙すら流れなかった

分かりきっていた事だった

ぼくは……もうとつくに人間として壊れてるのだから
でも……慣れていたことなのに……

泣けない自分に無性に腹がたった

……それからだった

音姉が変わったのは

なにを話しかけても「興味ない」「だからなに？」と冷たくあしらわれ、家の誰とも距離を置くようになってしまった

無論、ぼくからも

誰もがその原因が痛いほどわかるため、なにも出来ないでいる

そんな中で今日

音姉が家出した

幸い、今日が日曜であつたためにぼくやよしゆきはもちろん、普段「かつたるい」と言って動きたがらない純一さんまで加わり、朝一で搜索をはじめた

と冷たくあしらわれ、家の誰とも距離を置いた

無論、ぼくからも

誰もがその原因が痛いほどわかるため、なにも出来ないでいる

そんな中で今日

音姉が家出した

幸い、今日が日曜であつたためにぼくやよしゆきはもちろん、普段「かつたるい」と言って動きたがらない純一さんまで朝から探していた

「はあ…はあ」

いくら、神様の魂の改ざんで強化されているとはいえ、子供の体では朝からの搜索は堪えた

全身の筋肉に微量の魔力をながし、強化する

明日は反動で動けないだろうが知ったことじゃない

いまは一刻を争うんだ

「はあ……はあ」

いま、向かっているのは桜公園

焦るからか、すっかり失念していたが原作ではそこにすわってたんだ

「はあ、いた！！」

予想通り、目的の少女は桜公園の一角に設置されているベンチに姿勢よく座っていた

やはり、原作と同じように音姉はそこにいた

音姉の顔には喜怒哀楽…一切の感情を感じられない

その姿は、まるで人形のような

「音姉・・・」

「……」

声をかけるも無視される

孤独……絶望

いまの彼女を占めている負の感情

……このままではいけない

このままでは、その感情に飲まれてしまう

「音姉！聴こえてんなら返事をしてくれ」

声を大にして叫ぶ

「聞こえてるよ……」

帰ってきたのは感情の一切籠っていない悲しい返事

「こんな所に居ると風邪、引いちゃうぜ？」

「いいの……」

相変わらず無表情のまま答える音姉

良いわけがない……

このこんな事、あのひて由姫さんが望むわけがない

「良い訳無いだろうが。純一さんだって、由夢だって義之だって…
それにぼくだって心配してんだからさ」

「……」

「だからさ、帰ろうぜ？……ぼく達の家にさ」

「いや……だよ」

音姉の表情が揺れる

「……」

「いやだよ！！だって……お母さんがいないんだもん……」

音姉の表情を覆っていた仮面に罅が入る・

そして、まるでダムが決壊したように溢れ出す

……涙

音姉にとって由姫さんの存在は特別なんだろう…

魔法のことをしる唯一の家族

魔法……それが、音姉と由姫さんを繋いでいた特別な繋がり

例え、それが断ち切られたなら繋げば良い

音姫「このまま、病気に成れば……そうすればお母さんに会えるんだもん!!」

まるで、なにかを振り払うように悲痛な叫びを上げる音姉

「なら、もし由姫さんにあつたら、音姉はなんていうんだ?」

音姫「え!?!」

僕の問いかけを聞いて、キョトンとする音姉

「……あの人にあつたら、お前はどっちはなすんだ?」

「えつと……私は……」

しどろもどろになりながら焦る音姉

「あの人は……笑って逝った。なら、音姉ももし由姫さんにあつたら笑って話させるように生きないとな」

「……君に何がわかるの?」

やはり……見せないと信じてもらえないか

やれやれ

「音姉は1つ、誤解してることがある」

「誤解?」

疑わしそうな視線が痛い

「ああ」

そう、誤解だ

ほんとに細やかで重大な誤解。

「この世界にはさ、割りと多いんだぜ？……魔法使って人種はさ」

トレスオン
投影開始

「ええええええええ！？」

なにもない地面に20ほど、剣を投影しただけだ

それを見た音姉はさっきの泣き顔もどこえやら、驚愕している

驚いている顔の音姉もかわいい

音姫「これ……魔法？」

「まあ、その様なもんだ。ぼくのこいつは自分の見たものを贋作として複製することができる」

音姫「贋作？」

頭の上に疑問符が三つぐらい付いている

すこし言葉が難しすぎたかな・・

「まあ、ぶっちゃけた話偽物だ」

まあ、物によっちゃ本物になるんだけどね

トレースアウト
「投影破棄」

音姫「あ！」

物騒なので剣は消す。その代わりに

トレースオン
「投影開始」

適当なデザインのネックレスを投影する

中央に宝石があしらってある銀のやつだ

……改めて思うけど、便利な力だな（笑

「これ、私に？」

「ああ。ま、偽物で悪いんだけどね」

まあ、とあるアニメでもっているしな

真作や贋作の差なんて、美しさの前ではほんの些細な問題だ

「きれい・・・」

「気に入ってもらえて何よりだ」

音姫「じゃあ、御返ししなくちゃね」

そつ、可愛く微笑み僕に大福を渡す

音姫「フフ、和菓子は嫌いだった？」

音姉の表情はなにき憑き物がとれたような明るい笑み

それをみて、ぼくは安堵する

そして

「・・・嫌いじゃないさ」

パク

和菓子を口に運ぶと高価な和菓子特有の上品な甘さが口に広がる

甘過ぎず、しつこすぎずってやつだ

音姫「どう？」

「美味しいな、うん。この味はぼくの中でも複製できるか不明だ」

久しぶりに自然に笑みが浮かぶ

「あ、ありがと／＼／＼（か、可愛い／＼／＼）」

音姉の顔が赤いな…

ほんとに風邪、引いちゃったのかな？

作者「このリア充め！！…爆発すれば良いのに」

なんか、変な電波がきたが、それは無視、シカト、ブッチギリで

「あのね、私はね。正義の魔法使いなんだよ！」

小さく、胸を張って宣言する音姉

ああ…なんか未来の片鱗が見えた気がするよ

「だからね、君も魔法の事は秘密にしなくちゃダメだよ？」

「音姉がそういうんだったらな」

まあ、さくらや純一はもう知ってるけど…（苦笑

音姫「それにね、秘密を共有するってことはね、い、一心同体になることなんだって／＼／＼／＼」

そっぴや、原作でもそういうことだった気がするな…

それにしても一心同体か…

そんな風に考え込んでいると

音姫「私と一心同体になるの……イヤ？」

涙目＋上目遣い……orz

このリーサルウェポンを出されてNOと言える奴は居ない……居てはいけない

もしいたらばくが全能力を駆使してこの世から抹殺してやる

「そんなこたあねえよ、ただすこし考え事をしてただけだ」

音姫「あ、ありがとう／＼」

か、可愛いぜ

赤くなつて笑顔とか……最強すぎだろ

音姫「じゃ、じゃあ、指切りしよ？」

「ああ」

音姫「指切った！……よろしくね、弟くん」

あれ？

音姫「私だけがお姉ちゃんじゃ、不公平でしょ？だから弟くん、文句ある？」

「い、いや……」

音姫「なら、弟くん」

音姉はそれから終始笑顔だった

それからだった

妙に音姉は僕に甘えてくるようになったのは

そして、僕は確信した

義之の音姫フラグを木端微塵に粉碎し、代わりに僕が建ててしまったことを

五話 音姫（後書き）

あ、後書きです

さくら「大丈夫？」

ツンツン（指でつつく音）
な、なんとか…

悠二「試験は大丈夫なのか？」

……

悠二「そこで黙るな」

ゴホン、それはさておきさくらさん、感謝コーナーを
さくら「うん」龍賀さま、さまよう人さま、紅さま。感想ありがとう
ございました」

そして、読んでくださっている皆様に無上の感謝を

悠二「で、次回は何？」

次回は……とりあえず日常
さくら「ふうん」

悠二「では、次回のD・C？ 孤独な転生者と孤独だった魔法使
い」

さくら「第六話・日常（朝）」

3人「「「見届けろ、すべての始まりを」」」

六話 日常（朝）（前書き）

書き方変えてみました

どうでしょうか？

六話 日常（朝）

朝

「うゝ」

我等が主人公、水無月悠二は目を覚ました

あれから、悠二は朝倉家に居候していた

その件でさくらは駄々をこねたのだが、これはまた別のお話

悠二の朝は早くもなく遅くもない

ガチャ

「あ、悠二。起きてたんだ」

扉が開き、さくらが姿を表す

なぜか、彼女は朝昼晩と飯は朝倉家で食べ、そして家には寝に変えるという感じに過ごしていた

その理由は悠二とすこしでも長くいたいというなんとも純な想いだ
ったが

（やっぱり、いまでも純一さんと一緒にいたいのかな？）

などと、鈍感な悠二はお門違いなことを考えていた

「早く着替えと降りてきてね」

ガチャ

さくらが扉を閉めたのを確認すると悠二は寝巻きの浴衣を脱ぎ、かけてある制服に手を伸ばす

悠二や音姫達が通っているのは風見学園附属小学校

彼らが将来、通うことになる学園の附属小学校だった

私立のため、当然のように制服が存在する

悠二はそれに袖を通すと長く伸ばしている髪をポニーテールに結う

彼がなんで髪をそうするようになったかという答えは単純だ

彼はポニーテールが好きだから

まあ、初めてそれをみたさくらや音姫、由夢が真っ赤に顔を染めたあたりで、似合っているかどうか分かるが…

彼が降りるとすでに食卓には朝食が人数分用意されていた

「おはよう、悠二」

「おはようございます。純一さん」

悠二が挨拶した気の良さそうな老人

彼が朝倉純一

D、C、?の主人公であり、この島の数少ない魔法使いだ
ちなみに音夢は現在、純一を置き去りにして美春や眞子たちと本島
の温泉に行っていた

「弟くん、おはよう♪」

洗面所から制服に着替えた音姫が顔を出す

数日前の事以来、音姫は以前より見違えて明るくなった

ただ……

「ほらっ、ネクタイがまがつちゃってるよ」

「大丈夫だって…」

この通り、原作通りの音姫になってしまっていた

（はあ、明るくなってくれたのはうれしいけど、これは恥ずかしい
よ…）

原作では割りと音姫というキャラを気に入っていた悠二は嬉しいの
やら、恥ずかしいのやらと複雑な感じである

「あはよう、お兄ちゃん♪」

テトテト

ギョ

「由夢っ!？」

あれから…というか、音姫が悠二に甘々になってからというもの、由夢も負けずと悠二に甘えるようになった

「ハハハ、朝から元気だなあ」

「むっ…」

愉快そうに笑う純一に不満そうに頬を膨らませるさくら

純一は自分の孫に好きな人ができたことを純粹に喜び

さくらは準備があるために甘えられなくてすこし嫉妬していた

しかし、三人の想いを知らない（気づかない）鈍感野郎は

（いったいどんなカオス？）

で、ただ首をかしげていた

それから、義之も起床し一家は朝食を食べ始めた

今日のメニューはアジの開きにほうれん草のお浸し、納豆に味噌汁
そして炊きたての白米だ

ちなみに作ったのはさくら

基本、悠二達は交代で料理や家事をしている

料理の腕前で言うなら

悠二>さくら>音姫>義之>由夢といった感じだろう
悠二に至っては前世の経験と魂の改ざんで身に付いた技能の賜物だろう

由夢に関しては最初からさくらと悠二が教え込んだために原作のような炭を作ることもない

朝食はなにげなく終了し、四人は一緒に家を出る

（もう、三年生か…）

いままでのことを染々と思い返す

あれから、唐突、かつ一方的に小学校への入学を決められ、拒否したが遂には承諾してしまった事

（あれは反則だよな…）

ダメだというと、音姫や由夢まで涙目で悠二を見上げるのだ

（あれでNOなんて言えたらそいつは勇者だよ…）

それから、休日にはさくらに職場に拉致されそうになったり…

（まったく、すごい密度の数年だったな）

だけど、自然と頬が緩む悠二

「弟くん？」

悠二がみゆうに遠いめをしていたので音姫には気になっていた

「お兄ちゃん？」

義之も気になり、声を掛ける

「いやな、楽しかったとおもってさ」

「楽しかった…じゃないよ」

すこしだけ、不機嫌そうに由夢が呟く

「そうだよ、これからもきつとたのしいよ！」

由夢の言いたいことが判った義之が繋ぐ

「……そうだな」

悠二もそういつてクスリと笑う

「…／／／／」

「／／／／」

悠二の不意打ち的な笑顔をみた音姫と由夢はすっかり顔を赤く染めてしまった

しかし、その元凶は

（二人とも、顔が赤いな。風邪かな？）

と、遺憾なく鈍感スキルを発動させていた

そして

（音姉も由夢も大変だね（汗）

同じく、将来的に同程度の鈍感スキルをもつ義之は内心、そう呟いていたとき

それから四人で歩いていると、悠二があることをふと、思い出す

（そっぴや、あとすこしでなのはの無印か…）

だが、悠二は介入する気はなかった。

理由としては彼女らの成長のため

あれぐらいの悲しみを乗り越えなければこれから先へはいけないと悠二は考えているからだ

「ほら、弟くん。早く行くよ」

「あ、ああ。（いつのまにか脚が止まっちゃったか…）」

再び、足を動かす悠二

（なんだかんだで、楽しいな）

悠二はおかしそうに笑うと歩き出した

ガラガラガラ

悠二が教室のドアをあける

「「「「「」」」」」

だれかと、一瞬だけクラスの視線が集中するが、すぐに雑談に戻っていく

これで仲のよい人だったら話し掛けて再び雑談

大体、そんなものだ

ちなみに悠二のクラスは三階

音姫は悠二達より二つ年上なので上の四階

由夢に関しては同じ三階だ

校舎は四階立てで南北と別れている

悠二達は北

音姫だけは南

…ご愁傷さまである

「よいしょと」

悠二がまるで老人のような掛け声ですわると前の席に座る義之が

「お兄ちゃん、まるでお爺ちゃんみたいだよ？」

やさしく突っ込みを入れる
それに対し

（いいんだよ、義之。ぼくはもう二十歳（精神年齢）だから…）

なんで二十歳で老人になるのか激しく疑問だが

義之の突っ込みに対し、内心呟く

まあ、実際にいたらイタイ人扱いだろう

「おはよう。義之くん、悠二くん」

義之のとなりに座る若干茶髪の美少女

彼女は月島小恋

D・Cのヒロインの一人である

さすがに小学生のため、特徴だった丰满な胸はないが、ぽよぽよん
とした雰囲気をもった癒し系である

「なんか不愉快な紹介をされた気がする」

メタ発言はやめてください（汗

「よう、小恋」

「小恋ちゅんおはよう」

実はこの小恋

不思議なことにいままで二度行われたクラス替えにも関わらず、必ず同じクラスとなっている

それに関しては悠二は

（幸運値はA+だな）

などと心底羨ましそうに見ていたのは余談だ

それから、三人は他愛のない雑談に興じていると

ガラガラガラ

「あ、先生がきちゃった…」

教室に四十代ぐらいの初老の教師が入ってくる

「HRを始めるぞお！」

そっいつて手の帳簿を開く

みんなこられたくはないのでおとなしく席に座る

こうして、一日はじまるのだった

六話 日常（朝）（後書き）

あ、あとがきです（バタッ

悠二「また倒れやがったな」

さくら「仕方ないよ、試験勉強にこれの更新までしたんだもん」

悠二「まあ、こいつにしちやがんばったよな」

さくら「うん、感想をくれた皆様、ありがとうございました。」

悠二「あと、活動報告でアンケートをしているからそちらの参加も頼む」

さくら「さて、次回のD・C・？ 孤独な転生者と孤独だった魔法使いは？」

悠二「なになに？ 昼飯みたいだな。次回 七話 日常（昼）だ」

さくら& a m p・悠二「見届けろ、すべての始まりを」

あと…すこし（バタッ

七話 日常（昼）

キンコーンカーンコーン

そんな間の抜けたチャイムの音が響き、四限目の授業が終わったことを告げる

時間は12時半

ちょうど、お昼時だ

「うーん」

我らが主人公、水無月悠二も例外ではない

「うーん・・・」

ランドセルに手を突っ込み、まさぐる

だが、実は

（・・・しまった。・・・今は食料が切れてたんだ）

そう、彼はランドセルにてを突っ込むふりをして王の財宝にアクセスゲートオブバビロンしていたのだ。

ゲートオブバビロン王の財宝にはほかにP。Pなどのゲーム機器やウォークマンなどといういろいろ入っている

もうすでに便利倉庫扱いである

本来の持主たる英雄王が知ったら憤死するだろうな・・

しかし、昨日でちょうど切れていたのであった

残念

それなら弁当を作ってくればいいのではないか？

そう思うものだが、彼の場合はすこし複雑だった

（毎度毎度、あいつらが僕の弁当箱を拉致するからな・・）

心のつぶやきどおり、悠二の使っている黒と白のちょっと大きめな弁当箱は大体の場合、悠二の手元にはない

「おにいちゃん、大変だね」

義之はさくら謹製の弁当をバックから取り出す。

大体、義之の弁当はさくらが自分で作っている。たまに悠二

「そつでもないさ」

悠二にとってこれが割とあることなのだ

・・いや、割合的には8対2ぐらいだろうか？

そんな風に会話していると

ガラガラガラガラガラ

教室の扉が開く

「「「っ！」「」」

そこにクラスの男子たちの目が集結する

「弟く〜ん♪」

「お兄ちゃん♪」

そこに立っているのは学園のアイドル的な存在にして悠二の家族たる二人の少女だった

手には桜模様の入った巾着と、黒い亀甲模様の描かれた巾着

前者は彼女らの、後者は

「はいっ」

「ああ。サンキュな」

悠二の弁当である。

悠二は音姫から弁当を受け取ると悠二はがさごと机を動かしたす

それに倣い、全員が人数分の机を寄せ終わると

「さて、食べますか」

いつも、昼を食べている面子は悠二、義之、音姫、由夢、小恋の五人である

その理由はあまり悠二が他人とは関わろうとしないため

そして、由夢がすこし人見知りだから

閑話休題

昼食が始り、交わされる他愛ない会話、その間に見せる純粋な笑顔

(・・・眩しいな)

悠二はひとり、無言で料理を口に運んで行く

悠二は音姫や由夢をみて、いつもおもう。

ああ・・・眩しいなあと

音姫「どうしたの、弟くん。ぼうつとしたりして」

「いや、なんでもねえ」

音姫「そう……」

おそらく、自分でもわかっていないだろう

いま、自分の表情に

（弟くん・・・）

小さいながら、音姫は悠二がなにかを恐れていることに気づいていた
悠二が恐れているもの・・・

それは孤独

（・・・ほんと、世話が焼けるんだから）

そう内心のつぶやきとは裏腹に決意する

この小さくも大きい大切な人を一人にはさせないと

「・・・（私だって負けないんだから・・・）」

無言で由夢も自分の姉たる少女のにらむ

（・・・お兄ちゃんは渡さないから）

こんな修羅場が展開されているとは知らずに

（・・・この唐揚げうまいな）

のんびりと、音姉たちが作った料理を堪能していた

そんなとき

「弟くん、あゝん／＼」

顔を真っ赤にした音姫が箸でつかんだ唐揚げを差し出してきた

「あの、音姉？……ぼくは「」「」「キサマああ！！」「」「…」

悠二が羞恥心から断ろうとするとクラスの大半（全男子）が叫びをあげる

そして、どこからか出した鈍器を構える

「朝倉さんと仲睦まじいなど…」

「許さん！！許さんぞ水無月っ！！」

などとあきらかにイッちゃった目で悠二をにらむ男子達

（毎度毎度、飽きないな…）

さらにめんどくさいことになりかねないので口には出さないが呟く

「お兄ちゃんも大変だね」

「まったくだ…」

しかし、

「「っ！？」」「」

二人の表情は一瞬にして永久凍土のように凍りつく

その理由は至極簡単

音姫&・由夢」「……」

いまの季節は夏

蒸し暑いほどの熱気が辺りを支配している……が

「「「……（ガクガクブルブル」」」

音姫や由夢に睨まれた男子達はまるでここは極寒の北極かのように震えている

いや、正確には睨んですらいない。

彼女はただ笑顔を向けているだけだ

「ねえ、私の弟くんになにしてるのかな？」

「……（ニコッ）」

ただ、威圧感が半端じゃないんだ

「……」

それからは読者様の想像にお任せしよう

え？わかり切ってるって？

ですよ〜

あと、悠二と義之は二人を本気で怒らせまいと決意したのは余談だ

[illegible]

そんななか、小学校の校舎内にそんな悲鳴が聴こえたとか、聴こえないとか

合掌

そして、そんな平穏？な昼休みは終わり、ときは流れて放課後

$$\begin{array}{c} \neg \\ h \\ \vdots \\ \neg \end{array}$$

朝倉家に帰った悠二を迎えたのは小さな段ボールの箱。そこには達筆な文字で『水無月悠二』と書かれていた。「だれからだ？」

差出人を見ると簡潔にひとつだけ、文字が書かれていた

神よりと

七話 日常（昼）（後書き）

あとがきです

悠二「まったく、吼太も龍斗もやっぱり勝てないか…」

あら、わかってたんだ

悠二「ああ。正直、僕は多分、自分の力の10%も引き出せてないだろう」

で、なんかわかったか？

悠二「それなりだ」

そうか

感想をくれた皆様、ありがとうございます

そして、読んでくださっている皆様に無情の感謝を

次回 修練

二人「見届けろ、全ての始まりを」

八話 修練（前書き）

景気付けの連続投稿です！

八話 修練

ベリベリベリ

家に変えると置いてあつた段ボールの箱

悠二はそれを自室に使わせてもらっている部屋で開封していた

「これって…」

開けてみると中に入っていたのは青い水晶がはまつたゴツい指輪

（なんで大空のボンボレリング？）

悠二の言ったとおりその指輪のデザインはリボンに出てくる大空のボンボレリングだった

『はじめまして、マスター』

「やっぱりデバイスか」

その指輪は声を発した

『驚かれないんですね』

悠二は「予想はできたさ」とデバイスを左手の中指指に嵌める

『ぼくはシャルティエです。マスターは水無月悠二さまで間違いありませんね？』

シャルティエ？

その単語が妙に引っ掛かった悠二は頭に検索をかける

…… 検索すること数秒

「ああ…、ソーディアンか」

シャルティエ

ティルスオブデスティニーでのリオン・マグナスの愛剣のソーディ
アンの名だ

たしか、その次回作で消えたはずだが…」

『あの神様に回収されたんですよ』

悠二の疑問にシャルが答える

悠二は不機嫌そうに目を細めて

「…… 心を読むな」

『声に出してましたよ』

「むっ」

どうやら、悠二は無意識で声を出していたらしい

（しかし、過保護な神様だな…）

悠二としてはデバイスを作る手間が省けたので嬉しいのだが、すこし過保護過ぎやしないか？と内心、苦笑する

『いいでしょうか？』

「ああ」

そして、シャルティエの性能に関する説明が始まる

『ぼくは基本、マスターのサポートです』

「武器はないのか？」

すこし驚いた悠二

『はい。そこはぼつ…マスターの能力でお願いします』

（たしかに、変に武器があるよりサポート重視の方が良いか…）

うでをくみ、考える

『そのほかに、王の財宝ゲートオブバビロンの管理などを担当します』

「そうか、ほかには？」

『はい、そのほかにはアルターシステムがあります』
「アルターシステム？」

再び、アルターという単語が気になったので検索をかけていると

『アルターシステムというのはマスターの周囲の魔力素を疑似物質に変換し、バリアジャケットとして纏うシステムです』

「そのまんまだな」

アルター。

わかる方はすきないと思うがスクライドというアニメで登場した能力だ

閑話休題

『あとはぼつ、マスターの好みで能力を追加できるように要領は無限に近いぐらい存在します』

要するに、武器の機能をつけるもよし、完全なサポートにするもよしという感じのようだ

「シャルティエ」

『なんですか？』

悠二はさっきから気になっていたことがあった

「ぼくの事はお前が呼びたいように呼んでくれ」

『っ！？』

デバイスの表現としてはあってないかもしれないが、息を呑んだ

『わかりました。よろしく願いします、坊っちゃん』

「ああ、よろしくな。シャル」

こうして、悠二はシャルティエという仲間^{デバイス}をてにいれた

その夜

「さて、始めるか」

『はい』

悠二とシャルティエは転移魔法で管理外世界にいた

（^{トレースオン}投影開始）

悠二は自信に眠る500もの魔術回路のうち、二本を起動させる

そして

創造の理念を鑑定し、

基本となる骨子を想定し、
構成された材質を複製し、
製作に及ぶ技術を模倣し、
成長に至る経験に共感し、
蓄積された年月を再現し、
そしてここに幻想となす

トレースオフ
「投影完了」

そう呟く悠二のてには美しい装飾を施された黄金の剣が握られていた

エキスカリバー
『約束された勝利の剣ですか』

「ああ……」

トレースアウト
（投影破棄）

そう念じると黄金の剣は魔力素に戻る

「シャル、セットアップ」
『了解』

ウイン

悠二が一瞬光に包まれる

そして

（バリアジャケットのデザイン……これだ）

光が止むと右だけに袖がある黒のロングコートに黒いジーンズに同じ色のブーツ

さらにロングコートには赤い線が数本走っており、下には黒いボディーアーマー

手には同色のグローブ

と、黒ずくめなバリアジャケットに身を包んだ悠二が立っていた

『どうですか?』

「悪くない」

シャルに答え、改めて自分の姿を省みる

(赤原礼装にルフェインジャケットの合作かよ…)

すこし苦笑する

そして

「トレスオン
投影開始」

こんど、悠二が投影したのは黒と白の双剣。

あの紅い弓兵の愛用した夫婦剣『干将』『莫耶』

スウ

それを構えると、こんどは戦う相手を想定する

相手は自分に戦いを叩き込んだ師匠

タッ

踏み込む悠二

常人では認識すらできないスピードでの踏み込みだ

（はっ！！）

踏み込みにあわせて切り込むが

（っち）

その影には余裕綽々で避けられ

（ぐっ！）

師匠のよく使う刀で反撃を食らう

それを左手の莫耶で防ぎ、干将で反撃する…

しかし、それもよけられる

そのようなシャドーボクシングのようなものを続けること30分

「はあ…」

『惨敗ですね。』

ああとシャルティエに残念そうに答えた

シャルティエのいうとおり、結果は惨敗

少なくとも二十回、彼は三途の川を渡っていた

体の若返りによるリーチの違いなどはあったが、それは言い訳にはならない

（まだまだ、だな）

そう呟き、双剣を破棄する
続けて、弓を投影する

「シャル、的を頼む」

『了解です。距離はどれくらいにしますか？』

「〃、二キロ、三キロ、四キロの地点に二つずつ」

『はい』

普通なら、弓を射る処か、目視すらかなわない

あくまで、普通なら

ギィ

そして、彼は投影した矢をつがえると、はるか先にある的を見据え

ヒュン

放つ

だが、それだけではなかった

ヒュンヒュン

続けて二連射

さらに

ヒュンヒュンヒュン

こんどは三連射

「ふう…」

『お見事、全弾命中です』

はるか先、シャルティエが設置した魔力弾の中央には深々と悠二の放った矢が突き刺さっていた

悠二のもつ固有スキル『千里眼』により、悠二ははるか先にある的確に認識できていたのである

（身体的な力は下がる処か、上がってるな。視力に関しては言わずもがだな）

「シャル」

『なんですか？』

すこし気になっていたことを聞いてみる

「ゲートオブバビロン王の財宝の中って宝具の原典以外になが入ってんの？」

するとシャルティエはとんでもないことを言っただけだ

『坊っちゃんの知っている魔道具、宝具、武器など、すべてが納められています。量が膨大すぎますからね、そのために僕が作られたんです』

「な、なるほど…」

なんか、予想以上の出来事にめがかるく挙動不審になっている悠二

『リストを作成しましょうか？』

「頼む」

悠二はシャルティエの提案に乗ると

（ここに来て、もう四年か…）

悠二はさくら達にはけっしつ言わないが、これから桜を治したら、姿を消すつもりで居る

（あいつには、ぼくのような人殺しは要らないからな）

自然と苦笑がもれる

そして、前世で言われたことがフラッシュバックする

『自分を赦してあげなさい』といってくれた一人の少女

（これじゃ、まるで紅い弓兵だな）

また苦笑をひとつ

『できました』

そんな考え事をしているうちにリストが出来上がったらしい

「どれどれ…」

（たしかに、この量は尋常じゃないな…）

とかいいながら、常人ではありえない速度で目を通していく悠二

（これは！？）

なかには驚愕するものまで納められていたようだ

それから、数分間で悠二は最後の項まで至っていた

ほんとにこいつは人間か？

「なんか、失礼なことを言われた気がする」

メタ発言はやめろ

そして

「なっ!?!」

最後の項

その際奥にはあるものがあつた

「マジかよ……」

それはシャイニング・トラペゾヘドロン

世界の破壊所か、創造すらできるまさに神器

(こんなものまで……)

そのほかにはGNドライブやイタクア、クトウグアなど、アニメやゲームの最強武器のオンパレードだった

『どうですか? 坊っちゃん』

もしデバイスに顔があるなら、いまシャルティエはドヤ顔をしていることだろう

「はあ……」

もうすでに驚き疲れた悠二だった

「とりあえず、ゲートオブバビロン王の財宝」

ウイン

悠二の背後が赤く光り、無数の柄が現れる

そのうちの一本を抜くとそれはなんの変哲のない刀だった

「フッフ」

それをみた悠二が怪しく微笑む

ヒュンヒュン

刀を二三回、振ると上段に構える

「吠えろ！斬艦刀！！」

カシャン

悠二の叫びに呼応し、柄が伸び、鐔が広がる

ウイン

刀身は液体金属におおわれ、悠二の身長を優に越える大刀となる

「チエストオオオオ！！」

それを力任せに振り抜く

斬！！

「……我が斬艦刀に断てぬものなし」

悠二の満足そうな声に違わず、目の前にあった巨大な岩山が横一文
字に切り裂かれていた

（やってみたかったんだ…）

心底、満足したような顔で斬艦刀を王の財宝ゲートオブバビロンに戻す

『っ！？魔力反応確認！こちらに接近中！』

（やりすぎたかつ！）

悠二がシャルに転移を指示しようとする

ウイン

「っち」

先手をとられ、結界を張られる

『すいません』

「大丈夫だ（投影開始）トレスオン」

ジューダスの仮面を投影し、被る悠二

『……』

なぜか、髪の色まで黒に変わる

『（だって、金髪はなんて似合わないでしょ？）』

シャルティエ、地の文に突っ込むな

すると

「こんなところでなにをしてるのかな？魔導師さん」
(っ！？)

それから降り立ったのは悠二の良く知る人物だった

九話 対決（前書き）

遅くなって申し訳ありません。

しかも通常の三割増し以上に駄文です。しかもグダグダorz

九話 対決

「おとなしく武装解除して投降してください」

悠二が管理外世界で能力を実験しているとそこにさくらが表れた

「……」

悠二は無言。

「…そうですね、なら」

さくらはパルチザンのような槍型のデバイスを構える

「……しょうがないか（トレースオン投影開始）」

自分にのみ聞こえるような音量で呟き、夫婦剣を投影する

「行きますっ！！」

『ソニック・ムーヴ』

一瞬、さくらの姿がぶれ、槍なら届き、悠二の双剣では届かない間
合いまで詰められていた

「やあああ――！」

シンシンシンシンシンシンシンシンシンシンシン

「くっ」

その細い腕からは想像も付かないほどの速く…そして重い刺突の嵐
ガキンガキンガキン

悠二の『千里眼』の動体視力をもってしてようやく捌くことのできる速さ

そして、強化こそしていないまでもチートな悠二が弾けない重さ

どれも、悠二にはなかった才能と研鑽が合わさったもの

一流

（だがっ！同調開始^{トレスオン}）

四肢を強化する

ガキン

「えっ！？」

腕を重点的に強化し、やっと弾く

タッ

悠二は一旦、距離を置くように後方に飛び去る

なぜ、攻勢にでなかったのか？

理由は簡単だ

ピキッ

（まさかね…）

悠二のもつ『干将』『莫耶』に罅が入っていたのだ

（ぼくの骨子の想定が甘いのか、はたまた…さくらの刺突が化け物なのか…）

さくら「これで君のデバイスはなくなったよね、お願いだから投降して」

さくららしい勧告だ

でも

「……断固拒否する！！」

ヒュン

ひび割れた夫婦剣を投てきする

「——しんぎむけつにしてはんじやく鶴翼、欠落ヲ不ラズ」

「えっ！？」

ガキン

二降りとも弾かれる

（まだまだっ！！）

再び、投影しさらに投てきする

「——心技、泰山ちからやまをぬき二至リ

——心技、黄河つるぎみずをわかつヲ渡ル」

さらに投げる

「無駄だよ！」

しかし、なんなく防がれる
だが

『マスター！』

デバイスのほうが気づいたみたいだ

（だが、もう遅い）

背後から忍び寄る一対の夫婦剣に

「——唯名、別天二納メ（せいめいりきゆうにとどき）」

タッ

走り出すと同時に投影した『干将』と『莫耶』を持った手を背中に回す

そして、まるで翼のように構えると

「トレスオン
投影強化」

夫婦剣に強化の重ね掛けを施す

すると

「オーバーエッジ」

一对の夫婦剣はまるで翼のような黒白の長剣と化す

「これが狙いつ！？」

「——両雄、共ニ命ヲ別ツ（われらともにてんをいだかず）！！」

長剣でXに切り裂く。

鶴翼三連

干将と莫耶を複数個を投影し、さまざまな角度・タイミングから投擲と斬撃のコンビネーションを叩き込む紅い弓兵の生み出しし技だ
パライイン

双剣は強化に耐えきれず、碎ける

タッ

悠二は後方に飛び、仕上げの一言を呟く

「ブロックン・ファンタズム
……壊れた幻想」

爆――！

その一言に反応し投擲した双剣は爆発する

（これで終わっていてくれ）

悠二はできるなら、誰にも自分が魔導師であることを知られたくない
かといって、家族のさくら達をできるなら傷付けたくない

しかし、運命は残酷だった

「すごいな。まさか、背後から剣が襲ってくるなんて」

「……」

悠二の思いとは裏腹に、さくらはシールドを張って防いでいた

「鎖よ――！」

突然、さくらの周囲がゆがみ、まるで空間から編み込まれたように
鎖が悠二を縛らんと接近する

「くっ！？」

とっさに投影した剣で切り裂く

そして

（なっ！？）

内心、驚愕した

さくらが放った鎖。

悠二は魔力で形作られたバインドのようなものだと思っていた

だが

（こいつは、間違いなく実態だ）

悠二が切り裂いたその感触は間違いなく鉄だった

そして編み込むように歪んだ空間

それから導き出される最悪の答え

「……マーブル・ファンタズム
空想具現化」

マーブル・ファンタズム
空想具現化

真祖の姫君のつかいし、世界を己の空想で塗りつぶす異能

「……ゲートオブバビロン
王の財宝よ」

悠二の意思に呼応し、背後の空間が赤く光り、波紋が広がる

「えっ!?!」

こんどはさくらが驚愕する番だった

悠二は忘れているが、さくらはあのときのことを鮮明に覚えていた

そして、悠二は気付いていなかった。

少し前のさくらとのうちあいで仮面に罅が入っていたことに

「行K【パリイーン】」

「っ!?!」

ついに悠二の仮面が砕けた
そして

「悠くん?」

「…はあ」

なんとも残念そうな溜め息をはく悠二

それに呼応し、背後の宝具らも消えていく

「にやはは、まさか本当に悠くんだったなんて」

いままでの険しい雰囲気は一転、いつものさくらに戻っていた

「とにかく帰ろう。話はかえってからだ」

「うん」

そうして、二人は転移した

「で？」

朝倉家に戻った悠二はさくらに事情を説明した

あの場には訓練でいたこと

悠二がさくらに襲い掛かったのは力試しがしたかったからなど

「なるほど。それはわかったよ」

(ふう)

悠二は内心、胸を撫で下ろす

「ねえ、なんであのとき後ろから剣が来たの？」

「ああ。それにはまずぼくの魔術から説明しないとな」

「魔術？」

疑問顔のさくら

まあ、仕方ないだろう

この世界の魔法と悠二の魔術は違いすぎるからな

「うん、トレスオン投影開始」

「あっ！」

悠二の手には先ほどと同じように『干将』と『莫耶』
さくらは突然出てきたから驚いている

「これ、あのときの」

「ああ。こいつらの名前は干将と莫耶」

「っ！？」

はっと息を呑むさくら

博識なさくらは気付いたのだ

そして、納得した

陰陽一対の夫婦剣『干将』『莫耶』

刀匠千将が妻の莫耶の犠牲を得て鍛え上げたとされる二刀一対

そして、その二つはあたかも、磁石のS極とN極のようにお互いを引き合う性質を持っている

「だからなんだ」

いまだ信じられないといった感じで呟く

それから、悠二はかいつまんでさくらに悠二の魔術やデバイスのことを説明した
もちろん、固有結界のことや宝具などのことも含めて

「じゃあ、あのまま戦ってたら僕は」

「それはわからん。あのとき、お前は本物の鎖を出したな？」

そう、あの能力は危険だ
ちから

悠二の宝具も大概だが、あれは各が違ふ

「あれは僕の希少技能だよ。さくらの樹を通して幻想で世界に干渉できる力」

「……劣化版の空想具現化か」
マープル・ファンタズム

マープル・ファンタズム
空想具現化

それは自身の意思を世界に直結させることによって、これを思い描

いた通りに変貌させる世界干渉の事だ

さくらはさも簡単なことにいつているがこれは本来ならあり得ないことだ

悠二は転生者として、

魂を改ざんされたことで魂は世界を認識し、アクセスすることで本来なら世界に存在しないモノの行使ができる

それをいくら桜の樹を介したとはいえ、世界の枠を出ない人間のさくらがおこなっているのだ

そう考えると、枯れない桜

それ事態が世界へのアクセス端末でないのか？

（こいつはなんてものをつくったんだ）

「悠くん？」

「マープル・ファンタズム
空想具現化は僕以外に使ったか？」

うつんと首を横にふるさくら

それをみて、また安堵する

「いいか？あの力は使っな。監理局なんかに知られた日には救いようがない」

「うん、わかった」

（まさか、枯れない桜にそんなからくりがあつたなんてな…）

一人、悠二は呟いていた

九話 対決（後書き）

更新です

悠二「今回は時間食ったな・・・どうした作者」

いやあ、家のパソコンが返ってきたのはいいんだけどネットつなげなくてさ。それで書いたはいいけど、なかなか投稿できなくて

さくら「それは仕方ないね」

はい、ただその分ストックがあるので出していきたいです

さくら「うん」感想をくれたみんな、ありがとう。お礼に悠くんの女装写真をお送りします」

悠二「うがあああああ!？」（マグダレの聖骸布に拘束されている）

さて、次回のD/C?孤独な転生者と孤独だった魔法使い

「第十話 邂逅」

孤独な少年は一人の二人の魔導師の少女と出会う。そして、生まれる綻び

「「見届けろ、すべての始まりを」」

悠二「うぐあああああ・・・」

十話 邂逅

驚くべき事実の発覚から数年ががたった。悠二と義之は中学へと上がり、音姫は中学3年生
由夢は小学校の最高学年となっている。

2年前のクリスマスには本島から莫大な魔力を感じた悠二はA S編が終わったのをしる

そして、暦は一月。

悠二Side

初詣などの正月の行事を終え、ようやく一息が着いたという頃。

我らが主人公 水無月悠二は珍しくコートなどを着込み、町を歩いていた。

「寒い・・・散歩なんてしなきゃよかった」

ほんの気紛れで散歩で出てきた彼は開始10分で早くも後悔し始めていた。

（はぁ・・・）

ウィン

ゲートオブバビロン
ひそかに王の財宝から自前の財布を取り出す、ズボンの後ろポケットにねじ込む。

これだなにか暖かいものでも買おうというのであろう。

余談ではあるが生憎、悠二は料理屋お菓子といった類の解析は出来ても、それ自体を直接投影することは不可能だ。

だから、悠二は答えを出すものなどを使い、料理を腕を上げているのである。
アンサートーカー

そして、キヨロキヨロと周りを見回していると

「ん・ん」

眼に入った不快な光景に顔を顰める。

そこでは中学生か高校生ぐらいの男数人が、若干赤っぽい髪の少女を囲んでいた。

（・・・やれやれ）

あれをみて、自分が怒りを感じている・・・そんな当たり前なことに嘆息しつつ、オーバーキルだとわかっていてもコートの裏で黒鍵を投影する。

黒鍵は投擲用の剣のことだ。

*

??Side

少女はコンビニからの帰りだった。

お目当ての雑誌とほかほかの肉まんを買い、それを食べながら歩いていると、数人の男子に絡まれた。

それから

「離してください!!」

少女は懸命に男たちに訴えるが・

「いいじゃん、俺たちと遊ぼうぜ?」

「そうそう、きつと楽しいぜ?」

外見からしてチャライ不良体の男達は応じようとしな

寧ろこの状況を楽しんでいるようだ。

(・・・誰か、助けて!!)

少女は心の中でそう懸命に叫ぶが、心の声が響くはずはない。

ましてや、ここは人通りの少ない寂れた小道。

通る人など、散歩好きの老人ぐらいしかいない。

つまり・・・助けは来ない。

少女もあきらめた、そんな時

「へブラっ?!」

「えっ?」

突然、自分の前にいた男が醜い悲鳴を上げ、消える。

咄嗟に後ろを向くと、なにか剣のようなもので貼り付けにされた男がいた。

「白昼堂々といいたいけな少女を多数の男が囲む・・・男として恥かしくはないのかね?」

その声の先にいたのは赤い線の入ったロングコート（イメージ的には切嗣のトレンチコートに赤い線と士郎の令呪のような模様が入ったようなもの）に身を包んだ金髪の女の子（少女にはそう見えた）悠二だった・・・だった。

「だ、誰だっ!?!」

あきらかに怯えた様子の男はその女の子に半ば叫びで問う。

悠二はクククと嘲笑に口を歪め

「・・・君達に名乗る名などないよ」

「くう、やっちまえ!!」

錯乱した男子達はその女の子に襲い掛かる

しかも、少女には見えないように

ドサッ

先までつるしていた男が落ちるが二人とも特に気には掛けない。

（もう行くか・・・）

思わぬところで道草？を食ってしまったと悠二は再び歩きだ・・・せなかつた

ギユ

少女にコートの端を握られてたのだ。

「あ、あの助けってくれてありがとうございます／＼／＼／＼／＼／」

「・・・ああ」

悠二はそつぽをむくと恥かしそうに鼻の頭を書きながら、それだけようやく吐き出した。

（まったく・・・）

目の前の少女の笑顔が可愛くて顔を背けてしまったなど、口が裂けてもいえない悠二だった。

「私は白河ななかです。あなたは？」

「僕は水無月悠二。まあ、しがない中学生だ」

（似ていると思ったが、まさか御本人様だったとはね・・・）

思わぬエンカウントに驚く悠二だったが、それもありかと割り切ろうとしていると

『坊ちゃん、ここから北に二キロの地点で結界の発生を確認。魔力反応はクリスマス時の魔力と類似してます』

（こんなときに!?!）

シャルティエの念話での報告に内心、あせりつつ

「すまん。白河さん、家まで送りたいところだが急な用事が出来ちまった。一人で大丈夫か？」

「は、はい」

「じゃあな。もし、今度会えたらなにかを奢ると約束しよう」

それだけ言うと、悠二は走り出した。

ななかSide

「じゃあな。もし、今度会えたらなにかを奢ると約束しよう」

「あ、行っちゃった・・・」

彼・・・悠二はそういうとかなりの速さで走り去ってしまった。

（なにも御礼してないのに・・・）

「あ、時間！」

いろいろあつて、もう外は夕焼けが沈み始めていた。

遅くなつては両親に心配を掛ける。

（それに・・・）

なかなかの中には予感めいたものがあつた。

また、そのうち彼に会える。

（そのときには、ちゃんとお礼しよう！）

そつ、心に決め、なかなか悠二がいったのとは別方向に走り出した。

その機会は遠からず訪れることを、まだ悠二もなかなか知らない

そして、所変わつて結界の中心部

そこには白いバリアジャケットと黒いバリアジャケットの少女がデ
バイスをかまえ、まるで骨の化け物と対峙していた

?? Side

「なに、こいつら」

「フェイトちゃん、気をつけてね」

白いバリアジャケットの子にフェイトと呼ばれた黒いバリアジャケットの子は

「なのはこそね!」

そういつてサイズフォームの自分の相棒『バルディシュ』をかまえる

「うん!」

なのはと呼ばれた白いバリアジャケットの子も相棒の『レイジングハート』を握り締める

「デイベインシューター!」

『デイベインシューター』

なのはが桃色の魔力弾を複数放つ

「フォトン・ランサー!」

『フォトン・ランサー』

対して、フェイトも銃型の魔力弾を複数はなつ

ダダダ

それらはすべて命中した。

たしかにダメージは与えている・・・が

「■■■■!!」

その程度のダメージはまったく聞いていない様子だ。

（なんだろう、こんな生物、資料でも見たことない）

それもそのはずだ。

これらは・・・この世界では存在するはずのない生物なのだから。

しかし、彼女らがそれを知るはずもない

「■■■■・・・■■■■!!!!!!」

骨の化け物は自分の骨を肥大化させ、それを投げ付ける。

「なのはっ!!」

『ソニック・ムーブ』

その攻撃に気付いていない親友を助けるべく、少女は魔法を発動させる

が

ヒュン・・・ガキン

それは一条の矢によって叩き落された。

「にゃ?!」

「はあああ!!!!!!」

『サンダーレイジー』

ドゴオオオオオオン

砲撃を放ち、自分の周辺の敵を吹き飛ばす。

さすがに砲撃クラスの魔法は聞くようだ。

そして

ヒュン ヒュン ヒュン

「■■■!?!」

今度は複数、矢は飛来し的確に骨の化け物の頭を撃ち抜いて行く。

「誰が放ったの?」

『・・・後方、300メートルの地点に魔力反応感知。推定ランク・・・SSS』

「っ!SSSランク!?!」

SSSランクといえば、管理局では・・・一人・・・少なくともフェイトが聞いたことある人物しかないほどの魔力量。

（それに・・・そんな離れているところから、矢を放つなんて・・・）

『データベースに照合・・・該当なし。』

「・・・現地の魔導師さん？」

「・・・かもしれない。でも、ここは管理外世界なのに・・・」

なのはの疑問にあまり答えになっていないような答えを返すフェイト。

なぜなら、ここは第11管理外世界。

それは彼女達の『魔法』が一般的に知られていない世界とされているのだから。

悠二Side

「・・・ふむ。」

結界の中心付近・・・そこから300付近の地点にバリアジャケットに換装した悠二は居た。

手にはハンドガードのついた黒塗りの洋弓。

「・・・なぜここになのは達が着ているのかも疑問ではあるが、もっとアインストが居るのか気になるな」

さきほど、彼は矢で骨の化け物・・・アインストクノッヘンの放つ骨

のブーメラン『シックナーゲル』を叩き落とし、さらには投影した剣の骨子を捻じ曲げ、矢としたものを数発はなつた。

アインストクノツヘン

スーパーロボット大戦OGに出てくるアインストと呼ばれる化け物の尖兵たる一種だ。

『千里眼』で見たところはクノツヘンしかないようだが、ほかには砲撃戦用のグリードや白兵戦用のゲミュートなどが存在する。

閑話休題

どれも頭を撃ち抜いたことは悠二の千里眼が捕らえている。

（あれが本当にアインストだった場合・・・おそらくレジセイア・・・最悪、ノイレジセイアが来ている可能性がある）

「しかし、このまま矢でちまちま・・・というのは、どうも性に合わないな・・・」

自分の短気さにすこし苦笑すると

『大丈夫ですよ、坊ちゃんはどこらでも御強いですから』

「ありがとな、シャル」

相棒の賞賛を受け取り、弓を破棄する。

「さて、んじゃ行きますか・・・トレースオン同調開始」

足に魔力を流し、強化する。

その頃

なのはSide

『上空に転移反応』

「っ！！」

レイジングハートの報告を受けて、空を見上げるとそこには赤い線の入った黒いバリアジャケットを身に纏った一人の少年が転移していた。

フェイトと同じような綺麗な金色の髪にその青い眼は目の前の骨の化け物たちをにらんでいる。

「数は？」

『およそ1000』

彼のデバイスだろうか？

デバイスが彼の問いに答え、彼は渋い顔になる。

すると

ストッ

突然、地上に降り立つと

「しょうがない、固有結界を使うぞ」

『了解、１０００ですもんね』

彼のデバイスはデバイスらしからぬ人間のような口調で答えるとそれに「違うない」と笑う

「なのは、味方なのかな？」

「そうだと思うよ。きっと・・・」

フェイトの疑問に答えると、目の前に眼を戻す。

すでにすべての化け物の注意は彼に向かっている。

トレース・オン
「投影開始」

彼が何かを呟くと彼の両手にまるで鉈のような白と黒の剣が出現する。

それを構えると

「さあて、はじめようか？」

化け物に問いかける当に言葉を投げかけ、走り出した。

フェイトSide

「はあ!!」

彼は両手に握った白と黒の剣で多数の骨の化け物アインストクノッヘンを相手取っている。

そして

「I am the born of my sword」

<体は剣で出来ている>

そのさなか、なにかの詩の一節のような言葉をつむぐ。

しかし、手は休めない。

「Steel is my body and fire is
my heart」

<血潮は鉄で、心は硝子>

また、つむぐ

ガキン

クノッヘンの攻撃を双剣で受け止め、骨のブーメランを紙一重で交わし、そして時に剣で切り裂き、時に瞬時に出した剣を投擲して撃ち抜く。

そして、また

「I have created over a thousand
blades」

< 幾度の戦場を越えて不敗 >

紡ぐ。

「なのは・・聞こえている？」

「うん。なにかを詩みたい」

なのはやフェイトにもソレは聞こえていた。

不思議と、闘いの雑音はそれの邪魔をしない。

「Unknown to Death・・・Nor known
to life」

<ただ一度の敗走もなく、ただの一度も理解されない>

「なんだろう・・」

「うん、とても悲しい感じがする」

二人にとって、悠二が謳っているこの詩の意味はわからないだろう。

直訳すればなんともおかしい英文だ。

ただ、ただこう思った

『なんて悲しい歌だろうと』

「Have withstood pain to create
many weapons」

<彼の者は常に独り、剣の丘にて勝利に酔う>

しかし、敵の数は減っている気がしない。

どうやら、彼が来たことに反応し、さらに転移を始めているようだ。

でも、彼にはあきらめたような感じはない。

「Yet, those hands will never
hold anything」

<故に、生涯に意味はなく>

なのは達は気付いてすら居ない。

この詩こそが、悠二の逆転の秘策であることに。

そして、その準備は今・・・仕上げを残すのみとなった。

悠二は剣を振るいながら、ニヤリと笑いソレを唱える。

「So as I pray, Unlimited Blade
Works」

<その体はきつと剣で出来ていた>

その瞬間、世界は炎に包まれる

悠二Side

「――」

ガゴン ガゴン ガゴン ガゴン

一定のリズムで重低音を奏でているのは空を覆う巨大な歯車。

「ここはっ!？」

「いつのまに?!」

後方の二人の少女が喚いているが、それは想定内。

地に広がるのは荒野。

生きるもの、一つとして存在しない悲しい荒野。

そして、そこにまるで墓標のように立ち並ぶのは……数えるのも億劫な……まさに無限としか形容できないほどの量の剣。

その中心、そこに立ち尽くしている悠二は

「さあ、我が剣の荒野へようこそ。生憎、出す茶もお菓子もないが・
・ゆっくりして言ってくれ」

スウ

悠二が手を掲げる。

それだけ……それだけで

ザシュ スウウウウ

地面に突き刺さっていた無限の剣は浮遊を始める。

そして

（行けっ！！）

ブン

手を振り下ろし、心でそう命じる・

すると

ダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダ。

この荒野に存在する無限の剣達はまるで雨のようにクノッヘンたちをふち注ぐ

「■■■■■■■■■■！！？」

「■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■！！！！」

「■■■■！！！」

思考すら出来ない骨の尖兵達は無限に続く剣の舞踏によって蹂躪されていく。

やがて、すべて動くものが存在しなくなると

「……
ブローケン・ファンタズム
壊れた幻想」

爆！！

とてつもない大爆発により、その舞は終了した。

十話 邂逅（後書き）

あとがきです。

悠二「なんでアインスト？」

さくら「ジ・インスペクターの影響かな？」

・・・さくらさん、それは違いますよ。

アインストの件は自分で前から考えていたんです。

これの原型の小説にだって登場してます！！

悠二「じゃあ、アルフィミイも出てくんのか？」

さあ？

さくら「さあって（汗）」

さて、それはさておき次回D・C？ 孤独な転生者と孤独だった魔法使い

さくら「第十一話 存在しないもの」

悠二「巨大なアインスト・・・そして現れる管理局。どんな装甲だろうと・・・撃ち貫くのみ！！」

「「「見届けろ、すべての始まりを」」」

十一話 存在しないもの

悠二Side

「……………」

無限の剣による蹂躪が壊れた幻想による大爆発によって締められると、役目を終えたかのように周りの風景は戻っていく。

「貴方は…」

「話はあとだ」

(トレースオン
投影開始)

まだ、悠二は警戒を解いていなかった

『干将』と『莫耶』を投影するとかまえる

「えっ!?!」

「まだだ…」

グシャ ゲシャ ガギ

そんな耳を塞ぎたくなるような生々しい音とともにクノッヘンの死骸はひとつに固まっていく

(まさか、レジセイアに変化するのか? いや、違うな…)

「なに、あれ…」

なのはの声にはたしかに怯えが含まれている

それは仕方ない。

普通なら、嘔吐して気絶してもおかしくない状況だ

「……」

やがて、歪な変化は終わり、三メートルほどのアインストクノッヘンが出来上がっていた

「つち…」

（固有結界を解くんじゃなかったぜ）

しかし、腹水盆に帰らず…。

いまから詠唱するんじゃない時間がかかりすぎる。

そんなことを考えながら、夫婦剣を構える悠二

対する巨大アインスト・クノッヘンは

「■■■■■！！」

シュン

雄叫びと共に自信の骨をブーメランのように放つ

目標は・・・

「えっ？」

悠二の後方に待機していたなのはだった。

完全に油断していたようで、反応が鈍い

「くっ！I am the bone of my sword）
体は剣で出来ている）」

あれだけの巨大な骨とはいえ分類するなら投擲武器

なら悠二は考えた

そして、自信の丘より最強の盾を召喚する

「ロー・アイアス
織天覆う七つの円環！！！」

『ロー・アイアス
織天覆う七つの円環』

それはかのトロイア戦争の英雄アイアスが所持していた青銅の盾になめした牛皮を七枚敷き詰めた盾が宝具へと昇華したものだ

同じくトロイア戦争の英雄ヘクトールの投槍を唯一防いだと言われることから、投擲武器には無敵の防御を誇る概念武装だ

悠二のつきだした左手を中心に七つの桃色の花卉が展開される

それ一枚、一枚が古の城壁に相当する

ガキン

当然、宝具でもなんでもないクノッヘンのブーメランなんかで響く訳がない

「あ、ありがとう……」

「……気にするな。」

なのはにそうこたえ、悠二は冷静に頭を巡らせる

正直な話、あの程度のやつを殺すのは訳ない

リミットを外して、直死の魔眼を使い、死の線を切り裂くなり、点をつけばいい

直死の魔眼はモノの死を視覚情報としてとらえることが出来る

それに強度や腕力は関係ない

閑話休題

なぜ、悠二がそれをしないのか？

（アイツ等が見ているからな）

先程から感じる気配

（恐らく、サーチャーだろうな…）

管理局のよくつかう無人偵察機

それらしき気配が二、三ある

直死の魔眼や万華鏡写輪眼を始め、悠二の魔術や宝具は管理局にしてみればロストロギアだ

そんなことで目をつけられるのは悠二としては勘弁願いたいのだろう

「やれやれ」

そうなると自然に手は限られてくる

『シャイニング・トラペゾヘドロンで世界を創っちゃったかどうか？』

（吼太じゃあるまいし）

つい最近、ボッコボコにされた奴の事を思い浮かべる

余談だが、あのあと悠二は吼太の世界に行こうかなと、真面目に考えていた

閑話休題

「……シャイニング・トラペゾヘドロンは却下だが…そうだな。思いつきりやるか！」

『はい！』

すると、悠二の周りに魔力が溢れる

「にゃ!？」

その理由は簡単だ

悠二が己のなかにある枷を外したのだ

それにより、悠二の魔力の半分 封印されていた五百の魔術回路
瞳術などが解放される

「さて、やるぜ!アルター起動!！」

『了解、コードは?』

ニヤリと悠二は不適に微笑み

「撃ち貫けっ!阻むもの全て!！」

悠二は迷い無く、前世でのお気に入り機体の代名詞たる言葉を叫ぶ

『了解、コール…』

「『アルトアイゼン・リール!』」

二人?の叫び声がシンクロする

その瞬間、空間は虹に包まれ

「これ……」

「まほうなの？」

それが収まると

「……」

ロングコートのバリアジャケットの面影はなく、肩のアーマーと背面のスラスター、そしてなにより右手の杭打ち器『リボルビングバスター』が特徴的な深紅のまるで鎧のようなバリアジャケットを纏った悠二がいた

「さて、いくぜ!!」

カシャン

顔部分を覆い隠すようにマスクが展開される

ブオン

それと同時に背面のスラスターが火を吹き、猛烈に加速する

「にゃ!?!」

「えっ!?!」

……余談ではあるが、その余波でフェイトやなのはのスカートが捲れ上がっていた

もちろん、アルトアイゼン・リーゼでハイになっている悠二が気付くはずもない

閑話休題

「
■ ■ ! !」

シュン シュン

再び、骨をブーメランが飛ぶが

「当たらねえよ」

横にスラスターを吹かし、避ける

そして

「踏み込みの速度なら負けん!!」

ブオン

さらに急加速するアルトアイゼン・リーゼ…基、悠二

(ぐっ…)

いくら、

チートな悠二とはいえ10Gの重力は答えたようだ

だが…

「貰ったっ!!」

急加速の勢いを殺さずにそのまま、突進する勢いで

「伊達や酔狂でこんな頭をしている訳ではない!!」

『プラズマホーン』

斬!!

頭のプラズマホーンで切り上げる

だが、まだ終わりではない

カパ

肩のアーマーが上下に開き、中に納められた大量の魔力製のベアリング弾が除く

「そら、全弾持つていけ!!」

『アバランチ・クレイモア』

ダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダ

おびただしい数のベアリング弾が巨大化したアインストクノッヘンを蹂躪する

そして

「はぁ!!」

『リボルビングバンカー』
ザシュ

再び、神速の踏み込みにより接近した悠二が勢いのままリボルビングバンカーをつきさす

「どんな装甲だろうと、ただ『撃ち貫くのみ!』」

シャルティエと声が重なり

ダン ダン ダン ダン

計五発のカートリッジが炸裂し、バンカーを強烈に押し出す

そして

「終わりだ!」

ダン

最後の六発目で跡形もなく吹き飛ぶ

「ふう…」

悠二は斬艦刀のときとおなじような満足げな顔を見るとアルトアイゼンの装甲は魔力素へと帰っていく

所変わって某所

そこでは緑髪の美女がサーチャーから送られてくる映像に顔をしかめていた

（一体、彼はなにものなのかしら…）

モニターにはバリアジャケットを纏った悠二が固有結界を展開から、アルトアイゼンの装甲を纏う一部始終が写っていた

彼女の名前はリンディ・ハラウン。

この次元戦艦『アースラ』の艦長を勤めている女性だ

（なのはさんを守ったあの花卉のようなシールドはS……。それになんなの、あの結界は……）

なのはやフェイトに今回の仕事を依頼したのは彼女だ

二人は囑託魔導師としての初仕事

任務事態は簡単かつ安全なはずだった

いや、彼女も警戒を怠ったのかもしれない

あの島『初音島』には管理局に友好的ではないけど、局内でも二二を争う魔導師が住んでいるから

（芳乃さんに頼ればいいなんてね）

リンディはその魔導師……さくらとは面識があり、彼女ならいざとなれば助けてくれると判断しての依頼だった

しかし、蓋を開けてみれば謎の生物の来襲に、加えて謎の高ランク魔導師の少年

「艦長？」

そんな風に思考の海に埋没していると声をかけられた

「え、ええ。クロノやはやてちゃんも準備しておいて」

「了解！」

そう言つて去っていく少年は彼女の息子のクロノ・ハラウン

管理局で執務官をしている自慢の息子だ

ただ、頭が固すぎるのがなんてんだが…

再び、モニターに目を戻すと、彼を覆っていた紅い装甲は魔力素へと帰っていった

その頃、悠二は

（やったぜ…）

内心、ニヤニヤが止まらなかった

自分の好きな機体になれてよほど嬉しいらしい

（さて、帰るか…）

『そうですね…』

満足した悠二とシャルティエは転移で帰ろうとすると

「っ！？」

突然、バインドでがんじがらめにされる

魔力の色はピンクと黄色

「……なんのつもりかな？」

どうやら、機嫌の良いところを邪魔されて少々、頭に來ているらしい

「あ、あなたを拘束します。」

「そのまま、動かないでください」

ガタガタと震えながら、懸命にデバイスを向ける二人

その姿を見た悠二は怒りを霧散させてしまった

そして、代わりに苦笑を漏らすと

「そんなに怯えてんだったら、行かせてくれよ…」

そんな風に呟くと

前方に転移魔法

そして姿を表したのはKYことクロノ・ハラオウンと

「はやてちゃん！」

「シグナム！」

夜天の書の主八神はやて

そして、主を守る守護騎士烈火の将シグナム

「時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。おとなしくして
貰おうか」

十一話 存在しないもの（後書き）

ふう…やっと投稿できた

悠二「USBなんて無くすからだ」

さくら「みつかった？」

いいえ、全然

さくら「じゃあ…」

はい、いまいちから作り直してます

悠二「大丈夫なのか？」

まあ、大丈夫だろ

悠二「……激しく心配だ」

さくら「さまよう人様、龍賀様、この世全ての悪様、感想ありがとうございます」

悠二「んで、次回は？」

次回 D C ？ 孤独な転生者と孤独だった魔法使い 第十二話
壊れた心

悠二「捕らえられた悠二。よみがえる忌まわしき過去、投影充填…

ナインライフス・ブレイドワークス
是・射殺す百頭」

3人『見届ける、全ての始まりを』

十二話 管理局との邂逅

「大人しくしてもらおうか」

アルターシステムと無限の剣製アンリミテッド・ブレイド・ワークスによってアインストを撃滅し、なのは達を助けた彼は助けた彼女達の魔力によって編まれた魔力の縄バインドによって縛られている。

そのうえ、突然上空から転移してきた管理局の執務官を名乗る少年にデバイスを向けられている。

(・・・)

その状況に悠二は嘆息する。

『この殺人鬼め!!』『(ま人でなし!!)』

フラッシュバックする忌まわしき記憶。

(まあ、裏切りは・・・これが初めてってわけでもないけどな)

そう、心の中でつぶいている悠二の表情は軽い声とは真逆に寂しそうな表情をしていた。

「おとなしく連行されてば、君には弁護の機会があた・・・僕がなにをした?」・・・貴様!!」

「僕はただ、こいつらを助けただけなのだが?」

『・・・』

「だが、貴様はデバイスを不正に所持している!!」

「・・・それに、僕は管理局などという組織は知らない」

「っ!?!・・・デバイスを持っている魔導師で知らないわけがないだろうが!!」

(・・・頭の固い奴だ。まったく)

こんなやつが執務官をやっている管理局とこんなやつが現場に出て切るという二重の意味で再び嘆息すると

「知らんものは知らん。自分の常識を僕に押し付けなくてもらえるか?」

「っ!・・・これ以上の問答は無用だ!! 貴様を拘束する!!」

そう言つて、デバイスであろう、杖をこちらに向ける少年。

「――言葉で負けたなら実力行使・・・そこが知れるな、執務官殿
トレスオン
?・・・同調開始」

バリイン

「なっ!?!」

悠二は肉体を強化し、バインドを強引に打ち破る。

「くっ!!」

『ステインガースナイプ』

「・・・悪いが、捕まるわけにはいかん・・・」

「っ！抵抗しないでください!!」

「断るっ!!ラステル・マ・スキルマギステル、闇夜切り裂く一条の光 我が手に宿りて 敵を喰らえ……白き雷!!」

・・・白き雷・・・

「っ!？」

『プロテクション』

全員、それなりの防御魔法で防ぐ。だが、これで終わりなわけがない。

「影の地 統べるもの スカサハの我が手に授けん 三重の棘を持つ愛しき槍を！ 雷の投擲!!」

・・・雷の投擲・・・

続けてゲイボルクを模した雷系の魔法で追撃する

「きゃああ…………!!」

バリン

さすがにプロテクションを貫き、ダメージを与える

「くっ!？」

『ステインガー・スナイプ』

「当たらんよ。そら、お返しだ!」

- - -魔法の射手 光の9矢 - - -

無詠唱の魔法の射手で反撃する

「くっ!？」

「終わりだよ」

「ぐはっ!？」

ドン

一瞬で瞬歩で詰め寄り、クロノの腹に拳を叩き込む

「そらそらそら!！」

「ぐっ・・・がはあ!!！」

宣言と間髪いれずに接近し、掌底 斧刃脚 上段回し蹴りとコンビネーションを叩き込む悠二。

どれも、前世で暗殺術と化してしまった“元”八極拳であり、それ

それが常人では即死の威力を持つ。

今回は死なない程度に加減しているようだけれど……。すさまじい激痛であることは簡単に推測が出来る。

「ぐはぁ・・・」

さらに脚払い　そして肘を胸に打ち込む

「かはぁ！！」

「さら、最後だ。受け取れ」

—— 絶拳・崩落 ——

ドゴオオン

残った左腕に気を集中させ、さきほど肘を打ち込んだところとまったく同じところに追い討ちをかけるようにぶち込む。

『坊ちゃん・・・今ので相当内臓とかアバラとか逝きましたよ?』

「まあ、なんとかなるだろう。」

悠二が放った技は言峰綺礼の技　絶拳と遠坂凜の功定四泊をブレンドした悠二オリジナルの技である。

「ぐはっ・・・ま、ただ・・・」

「トレースオン 投影開始・・・トレースイン 投影充填」

バリイン

瞬時に悠二は身の丈を超えるまるで斧のような大剣を投影すると、それを軽々と頭上に掲げる。

そして、その本来の担い手の経験 筋力などを読み取り、一時的に自分へと投影する。

「――受ける、ナインライフス・ブレイドワークス是・射殺す百頭」

――ナインライフス・ブレイドワークス是・射殺す百頭――

シューイン ザンザンザンザンザンザンザン

そして、放たれる神速の九連撃。

「ぐはあああ?!」

「クロノ君?!」

「クロノ!!」

二人の少女が少年の名を叫んでいる。しかし、さきほどまでの魔法のダメージが抜け切れていないようで動けない。

「終いだ。ラステル・マ・スキルマギステル、契約により 我に従え高殿の王 来たれ 雷神を滅ぼす 燃ゆる雷霆 百重千重と重なり「待つてください!!」……」

突然、空中にモニターが開き、緑色の髪の中の女性が姿を表す

「なんだね？」

「お願いします、その子を殺さないでください！-！」

「ハッ、さきにこちらに拘束を仕掛けたのはそちらのお嬢さんなんだが？」

「それは……」

「……まあいい。どちらにしろ、ダメージで当分戦闘はできないだろうしな」

「っ！それはどういうことですか！？」

「なに、ただ殴っただけだよ。そら、早くしないと内出血が酷いぞ？」

ブオン

返事はなく、ただ吹き飛ばされ気を失っているクロノが転送されるだけ

「さて……」

『ビクッ！』

「君達はどつするね？」

「……」

気丈にデバイスを構えてはいるものの、ガタガタと震えてしまっている

「……まあ、いいさ。っと、思ったより早いな」

ブオン

ここに誰かが転送してくる

「やりすぎだよ、悠くん。」

「なに、気にすることはない」

転送してきたのはバリアジャケットに着替えたさくらだった。

「貴方はっ!？」

「初めまして、僕は芳乃さくらだよ。監理局の魔導師さん達」

「……貴方だって監理局ではないのですか？」

「っ!？」

知らなかったみたいで驚愕するなのは。

さくらはすこし苦笑を漏らすと

「……君達を派遣したのはリンディちゃんだね？」

「はい」

「そつか…。でも、悪いけど悠くんを連れていかせるわけには行かないよ」

「っ！どうしてですか！？」

さくらの言葉に反発するフェイト

「君達、管理局が信じられないからだよ」

『っ！』

再び、絶句する二人。

「やはり、変わりませんね。さくらさん」

「やあ、久しぶりだね。リンディちゃん」

「はい」

「やはり、彼はあなたの関係者でしたか。」

「うん。だから、退いてくれないかな？」

「……それは出来ません。すこし話が聞きたいので一度、アースラに来ていただけませんか？」

「残念だけど」「ああ。行つてやるよ」「悠くん！？」

アースラ……つまり敵陣の中央に越させようとしているのだ

当然、さくらは断ろうとするが悠二は了承する

(大丈夫だよ。いざとなれば、アースラにぐらい叩き潰してやれる)

(……無茶はしないでね?)

(ああ)

心配するさくらに答える。

「……よろしいですか?」

「ああ」

そうして、悠二はアースラへと転送したのだった。

十二話 管理局との邂逅（後書き）

やっと更新できました。

悠二「またずいぶん空いたな」

・いろいろな見直していてな。それに学校も始まっちゃったし

さくら「いろいろ大変だね」

ええ。

さくら「竜様　さまよう人様　龍賀様　毬藻様　感想ありがとうございます」
ざいます」

粗品ですが、うちの朝倉姉妹特製の重箱を送ります。

悠二「前に言ったかもしれないが、うちの由夢は炭なんか作らないから安心して食ってくれ」

では、次回のD・C・？　孤独な転生者と孤独だった魔法使い

悠二「対話・・・和解・・・そして、現れる修正者」

さくら「第十三話　対話」

三人『見届けろ、すべてののはじまりを』

十三話 対話

あれから、悠二にボツコボコにされたクロノに変わり、なのはとフエイトに案内され、悠二とさくらはアースラへと訪れていた。

「……………」

今、リンディ・ハラオウンの艦長室と思われる部屋に來ている。そこまでまるで茶室と日本庭園をミックスしたようなそんな感じだった。

そんな力オスな部屋になぜかデジャヴを感じている悠二。

そして雰囲気というかそんなもので正座している。悠二とさくらそしてそれに向かい合うようにアースラ勢（なのは フェイト リンディ クロノ）が座っている。

「私は時空管理局提督のリンディ・ハラオウンです」

「僕は時空管理局執務官クロノ・ハラオウンだ」

「高町なのはです」

「フェイト・テストロッサです」

「僕は芳乃さくら……よろしくね」

「……………」

全員が自己紹介をする中、悠二は黙秘する。

悠二は自分の情報はあまり与えたくないというのが本音だった

「単刀直入に聞くけど、あなたは何者？」

「ただの一般人・・・じゃ、通用しないよな？」

「・・・」

（じよ、冗談なのに全員の視線が痛い・・・まあ、隠し通せるとは思っていないけどね）

しかし、本人も隠しとおせるとは思っていなかった。

リンディたちが見たのは、おそらく固有結界　アルターシステム。
そして、熾天覆う七つの円環。
ロー・アイアス

それらすべてを見ているなら、一般人で通せるはずもない。

悠二は「はぁ」と溜息を付くと来ていたバリアジャケットを解除する。

「・・・それは、敵意がない・・・と受け取ってもいいの？」

「ああ。元よりそう言っている」

（まあ、そっちの出方次第だけど）

そう呟く中で魔術回路にはいくつもの設計図を乗せている悠二。

「・・・貴方は一体」

「悠くん」

（やれやれ、ある程度は言っておくか）

心配そうなさくらに眼で答えると

「僕は水無月悠二。魔術師さ」

そう名乗った。

「魔術？・魔法ではなくて？」

「ああ。“そっちの魔法”とは根本的に違う。」

「そうですか。ならあの結界のようなもの・そして、なのはさんを護った花のようなシールドも魔術・ということですか？」

「まあ、そうだな。」

ズズと茶をすする悠二。

「そんなモノが管理外世界にあるわけがないだろう！！・いい加減本当のことを往いたらどうなんだ！！」

そんなのんきな様子の悠二についてクロノがキレた。

「——決め付けるなよ。それともなにか？・お前はこの世の全てを知っているともいうのか？」

「貴様ッ！！！！」

（——おいおい、そんな低い沸点でよく執務官なんてやってられたな・・・ある意味尊敬すらするよ。）

激昂するクロノを軽くあしらい、再び茶を啜り出す。
すると

「クロノ！！・・・それでは、悠二くん。貴方はどこでそのデバイスを手に入れたのですか？」

「さあな。」

（まさか、神様から貰いました・・・なんて、口が裂けてもいえないからな）

コトッ

内心、苦笑しつつ茶を御茶請けへと戻す。

「貴様ツ！！」

その態度がさらにクロノを激昂させる。どうやら、悠二の“似非”八極拳に叩き潰されたのがよほど悔しいらしい。

「いい加減黙れ、トレース オン 投影開始・・・メリ・メ・タンゲレ 我に触れ得ぬ」

「ぐっ！？」

いい加減、我慢の限界を迎えた悠二は即座に設計図に用意してあったマグダラの聖骸布を投影し、それでクロノを縛り上げる。

「フィツシュ」

——掛け声も忘れずに……。

「なんだ、これはっ!!」

「マグダラの聖骸布・女性にとってはただの布だが、ご覧のとおり男には天敵とも言える代物だ。・・続いて」

ウイン

左手を王の財宝に突っ込むと中々とあるものを取り出す。

「っ!・・悠くん!？」

「えっ!？」

「うつ・・!？」

悠二が取り出したもの・・それは皿一杯に盛られた毒々しいまでに赤いどろどろとした物体。

カチャ

それを蓮華で掬い上げると

「やめ・・」

パクッ

食わせるのとほぼ同時に布で口をふさぐ

「~~~~~!!!!!!!!!!!!!?!」

布で口をふさがれたクロノは声にならない絶叫を上げる。

シュル

「まだまだ」

すでに気絶しているクロノの口に残った“ソレ”を流し込む。

「これでよしと」

清しいまでの笑みをうかべ、正座に座りなおす。

流し込まれたクロノはというと・・

ビクッ

なにやら危なげに痙攣を起していた・・。

「な、なにをたべさせたのですか?!」

「ただの麻婆豆腐ですよ。ただ、ラー油と唐辛子を百年間ぐらい煮込んだ拳句、合体事故の拳句、オレ外道マーボー今後トモヨロシク・
・という感じだな」

クククッと心底愉快そうに口を歪める悠二。

どこかその表情はマーボー神父を連想させるものだったと後にシャルティエは語る。

「は、はあ・・・」

「悠くん・・・」

ちなみにもうお分かりだと思うが、悠二が流し込んだのは泰山麻婆だ。

それも言峰さんの食べるソレ。

あとは語る必要はあるまい？

——それから、とりあえず屍とかしたクロノをエイミィが運び出す。それから大体、悠二の魔術についての説明だった。

特にばれても良い情報・・・例を挙げるなら魔術回路や代表的な魔術・ルーン魔術や宝石魔術など。

ロー・アイアス

熾天覆う七つの円環についてはただの強力な盾を呼び出しただけ・・・と説明した。本当は前にも書いたとおり、伝説級の概念武装なのだが

「——わかりました。」

「それで、僕はもういいかな？・・・正直、かえって晩飯の仕込をしたいのだけれど」

「——ところで、悠二くん。あなた、管理局に入る気はありませんか？」

「断る」

「なぜですか？」

「まず、現状、僕は働く気はない、それに僕には僕のやるべき事がある。」

「やるべきこととは？」

「——答えるとおもつか？」

悠二のやるべきこと・・・。

それは初音島のかれないさくら。

もとより、不完全とはいえ願望機のソレを・・・まして、“この世界のソレは世界へのアクセス端末にもなっている。”

悠二としては管理局に関わらせる気はない。

「だが、それが終わったときは囑託ぐらいなら考えてやろう」

「本当ですか？」

「ああ。」

悠二の提案・・・これには二つほど、理由がある。

とりあえず、これから起こるJS事件・・・それに対して動ける立場に居ること。これにはある程度の行動権がある。

その為には『協力している』・・・と言う立場ではなく、『協力してやって居る』という、こちらが上位の立場にいる事が好ましい。

（それなら、嫌な仕事や過剰な仕事は突っ返せるしな。）

そして、二つ目。それはアインストについてだ。

クノツヘン・尖兵が出てきたのだ。“奴”が居ないとは限らない。それについての情報をえる機会を得るため・

「それでいいか？・リンディ提督」

「・・・ええ。」

なにか、釈然としない顔でうなずく提督。

それはそうだろう。とりあえず管理局に関わらせることは出来たが、自分たちの立場が僕より下になってしまっているうえにいつ悠二の“やるべきこと”が終わるのか彼女たちは知れないのだから。

——それからとりあえずは型どおりの説明だった。

試験があること・それが三部構成になっていること・・・・その三つが筆記 儀式魔法 模擬戦の三部ということだ。

それが終わると、書類の手続きがすこしあるということで、まだすこしアースラにいないといけないようだ。

ひと段落したところで悠二とさくらは一休み・・・・ということで部屋を後にしたのだった。

—— 食堂 ——

悠二が去った後、なのはとフェイトは食堂で相談をし合っていた。

「・・・なんであんなことしちゃったんだろうね。私たち」

「なのは・・・」

彼女たちがしずんでいる理由・・・それは先ほど自分たちのしたことだった。

助けてくれた悠二にデバイスを向け、バインドで拘束してしまったこと。

それは・・・ひょっとしたら管理局の囑託魔導師としては正しいのかもしれない。でも・・・それは恩を仇で返す・・・人としてあるまじき行為でしかなかった。

それが分かっている二人はこれまでになく落ち込んでいるのだった。

「やっぱり、謝ろう。赦してくれないかもしれないけど・・・」

「うん。」

実のところ、もう結論は出ていた。

しかし、とある事が二人を邪魔をしていた。

（・・・私は“あの時”・・・あの蒼い瞳が・・・とても怖かった。・・・だから、咄嗟にデバイスを向けてしまった・・・なんでだろう、なんであんな怖そうで、でもとても寂しそうな眼をしていたんだろう）

（あの子・・・フェイトちゃん・・・ううん、フェイトちゃん以上に悲しそうだった。・・・なんで、あんな眼をしているんだろう・・・。・・・一体、何があったんだろう？）

二人とも、悠二のまるで海のように蒼い瞳を見て、そう感じていたから。

そして異常なほどにデジャヴを覚える艦長室をでた悠二は食堂に居た。

さくらはなにやらリンディとのO H A N A S I があるそう
だ。

おそらく・・・いや、確実にリンディ茶についてだろう。
さくらの日本文化への愛着は以上に大きい。

なぜあるのか？と激しくツツコミを淹れたいざる蕎麦を注文し、受け取ると適当な席に座る。

ワイン

トポトポトポ

ゲートオブバビロン
王の財宝から取り出した自家製の汁を注ぐと、割り箸を割って食べだす。

「あ、あの・・・」

「ん・・・」

そんな時、消え入りそうな声が悠二に向けられる。

口に蕎麦を含んだまま、そちらの法に視線を向けるとそこには申し訳なさそうに顔をうつむかせた高町なのはとフェイト・テストアロツサが居た。

——艦長室——

「で、これはどういうことかな？・・・リンディちゃん」

「これは・・・と申されますと？」

悠二が蕎麦をすすっている頃、艦長室ではとてつもなく良い笑顔を浮かべたさくらと冷や汗をかきまくっているリンディ提督がいた。

「な・ん・で、お茶に砂糖なんかを入れているのかな？かな？」

「お、おいしいからですよ・・・さくらさんもどうですか？」

「・・・（ピキッ）」

リンディとしては怒りを抑えるつもりで行っただろう。しかし、それはいまとなっては逆効果でしかない。

「ふう、どうやら行っても聞いてくれないようだね。」「じゃあ！・・・うん、今度はO H A N A S I しようか？」

「えっ？」

ズルズルズルズル

「ぎゃあああああああああああ！？」

「さあ、逝こうか」

—— 食堂 ——

艦長室にて、リンディの叫びがこだましてる頃。

ズルズルズルズル

こちらではただ悠二の蕎麦をすすする音が響いていた。

それと対するようになのはとフェイトが座っている。

「・・・あの、さっきはごめなさい!」

「ごめんなさい!」

ツルツ

「——いいよ。」

「えっ?」

悠二はここに至って箸を置くと

「いいか?・・・今回はばくだったから良いものの。今度こんなことをしたら、きつと裏切られるのは君たちだ。」

『っ！！』

「——君たちが助けた・・・そう思った人たちから刺されるんだ。そんなことは嫌だろ？」

フルフル

「なら、こんなことはするなよ？」

ナデナデ

「は、はい」／／／／／／／／

「コクン」／／／／／／／／

二人の頭に手を置き、撫でる。そして、二人は顔を真っ赤にする。しかし、鈍感差に定評のアル悠二は気付かない。

「そういえば、高町と・・・テストロッサでいいのか？」

思い出したように呟く。

「あ、あの出来ればなのはって呼んでください」

「わたしも、フェイトで」

「じゃあ、僕も悠二でいい。それと、敬悟は要らん。僕だって10歳だ」

二人「えっ！？」「」

「そこまで驚くことはないんじゃないのか？」

——二十分後——

すっかり悠二とフェイト なのはは打ち解け、悠二は新たに掛け蕎麦を注文し、それを食べながら二人と雑談をしていた。

すると

「そういえばあの結界みたいな技って何なの？」

「リンディさんには結界の一種みたいに行っていたけど・・・なんか違う気がしたの・・・」

（やっぱり、見ているのと感じているのは違う・・・か）

ズルズル

蕎麦をすすりながら静かに考える。そして、

「・・・あれは、リアリティ・マープアルリミテッド・フレイド・ワークス固有結界無限の剣製だ」

「固有結界？」

「それ、私も気になったわ」

「あ、はやて」

あらたに茶色の髪をショートカットにした少女が話しに入ってくる。

「八神はやてです。よろしゅう」

「ああ・・・さて、シャル」

『了解・・・結界形成』

「なんで結界を張るの？」

なのはが不振そうに聞く。

「これから、話すことは一切口外しないと誓ってくれ」

（いろいろとばれると面倒だからな）

そう、前置きすると悠二は語りだした。

「まず、固有結界・・・というのは、お前らの結界とは根本的に違う」

「どう違うの？」

「まあ待て。なのは、お前らの結界はあるものを加工するだろう？」

「うん」

「固有結界・・・ってのは違うんか？」

はやてが疑問顔で呟く。

「大きく違うよ。・・僕の固有結界は世界そのものを塗りつぶす。見ただろ?・・あの荒野を」

『っ!!!』

「き、規格外すぎるやろ・・。」

「今更だな。・・そこで、僕の固有結界の無限の剣製。アンリミテッド・ブレイド・ワークスその能力は見た武器を解析 記録し贋作として結界内に蓄える事が出来る」

「えっ!?!」

「ああ、だからあんなに剣があつたんだ」

「そうそう」

フエイトの理解が早いことにすこし喜ぶ悠二。

「なら、神話の武器なんかもだせるんか?」

「はやてちゃん・・それはさす「ああ、出来るぞ」ふえええ!?!」

「ほんまか!?!」

それを聞いたとたん、顔を輝かせるはやて。

「本当だとも、なにか見たい剣でもあるか?」

「エクスカリバーが見たい!!」

(なるほど、エクスカリバーか。たしかに有名だな。・・・)

クスッ

「な、なにが可笑しいんや!!」

「いやなに、八神は可愛いなと思っただけさ」

「か、可愛いから・・・」／／／／／／／

さきほどの二人のように顔を真っ赤にするはやて。

「ハハハ、風邪には気をつけろよ」

まったく気付いていない悠二を見て

(悠二くん・・・まさか天然!?)

(むう・・・)

二人はそんなことを思っていた。

「んじゃ、行くぞ・・・投影^{トレス}『ワインワインワインワインワイン
ン!!』・・・なんだ!?!」

そんな時、突然として警報が鳴り響くのだった。

十三話 対話（後書き）

悠二「やっと更新できたな」

ああ…、なんかスランプ気味でさ
なにが書きたいのかわからなくなった

さくら「にやはは…」

さて、それはさておきさまよう人さま グラムサイト2さま 龍賀
さま 毬藻さま 竜さま 感想ありがとうございます

悠二「さて、早速だが次回のD・C・？ 孤独な転生者と孤独だった魔法使い」

さくら「遂に姿を表した異形の軍勢 それは生まれることはないはずの歪み そしてそれを討つ蒼き魔神」

第十四話 招かれざる異邦人

3人『見届けろ、すべての始まりを』

十四話 招かれざる異邦人（前書き）

龍賀さまからのご指摘を受けて修正しました。

十四話 招かれざる異邦人

——ブリッジ——

悠二やなのは達がブリッジ上がると

「本艦を包囲するようにアンノウン出現！……その数、測定可能！？」

「なんですって！？」

ブリッジのスクリーンに写っているのはアースラを囲むように布陣する異形。

さきほどのクノッヘンだけではなく、ゲミュートやグリードまでもが、姿を表していた

「……つち」

陸海空、全方位での包囲網。通常では考えられないが、相手は常識の通用する相手じゃない

『坊っちゃん！！』

「ああ」

シャルティエに答え、転移魔法を起動させる悠二

「悠二くん！？」

「……僕に任せろ」

彼女たちでは対処できない。

なぜなら、彼らは……この世界の住人ではないのだから……

アースラから転移した悠二はバリアジャケットを装備し、目の前の
アインストを見据える

「
■ ■ ■ ■ ! ! ! !」

「
■ ! !」

突然現れた存在に驚くアインスト。しかし、すぐに臨戦態勢へと変わる。

地上には砲撃型のグリッド 前衛にはゲミュート その後ろにはク
ノッヘンと所狭い市に並んでいる。

その風景に人知れず舌打ちすると

「シャル、アルター起動」

『了解。コードは?』

シャルティエの問いに妖しく口を歪めると、呼び出すモノを告げる

「蒼き魔神」

『コード・グランゾン』

発動に必要なコードを入力すると悠二を中心に虹色の光が覆う。中では周囲の魔力を物質へと変換し、擬似的なバリアジャケットとして悠二に装着されていく。

そして、光が止んだとき彼の姿は変わっていた

元から来ていた黒いバリアジャケットの上に一部分を除き、青黒い装甲が付いている。

背中と肩にはスラスターのようなひととき大きな突起。

スウ

胸の前で掌を合わせると

「悪いが、これで終わりにさせてもらおう!」

バチバチバチバチバチバチ

悠二の声を皮切りにどんどん魔力が集結していく。
それはやがて空間を歪め、ひとつの虚無への門となる。

「虚無へとかえるが良いっ!」

「――『ブラックホールクラスター』――」

ブオン　　ブウウウウン

それは文字通り、小さなブラックホールとなりアインストを飲み込

んでいく。

グランゾン最大兵装 ブラックホールクラスター
シュバルツシルト半径が量子サイズのマイクロブラックホールを重
力フィールド内に生成し、発射する武器だ。

しかし、これはあくまで魔力で発生させた模造。

本家のそれとは比べるまでも無いが、それでも十分な威力を発して
る。

「ふう・・・」

役目を終えた装甲は魔力素へと還元されていく。

『上空の約半数消滅を確認しました。陸のグリッド、砲撃体制への
シフトを確認』

「了解！・・・ラス・テル マ・スキル マギステル・・・契約に
より、我に従え高殿の王 来たれ雷神を滅ぼす 燃える雷霆 百重
千重と重なりて 走れよ稲妻あ！！！」

シャルティエの報告にうなずき、広範囲殲滅魔法の詠唱を始める。

魔力の集結に伴い、悠二の左手が黄色に放電を始める。

「千の雷！！！！！」

――千の雷――

ドゴオオオオオオオオン

その名のとおり、千本の雷が地面で魔力を収束していたグリッドたちを一瞬で地理すら残さずに消去する。

しかし、断続的に転移してきているためにまだまだ数は減ったようには見えない。

「まだまだ！！ラス・テル マ・スキル マギステル・契約に従い、我に従え炎の霸王 来たれ、浄化の炎 燃え盛る大剣 ほとぼしれよ ソドムを焼きし火と硫黄 罪在りしものには死の塵を！！・・・焼き尽くせ、燃える天空！！！」

――燃える天空――

今度はそれこそ何千万度というほどの高熱の炎がアースラを中心に展開し、アインストを塵へと帰る。

しかし、まだまだぞろぞろと出てくる。

「つたく、きりがねえ」

『アインスト、継続的に使用中。時空転移反応検出・・・術式に綻びを発見しました。”あちら”とこちらをつないでいる空間を切り裂ければ発生は抑えられるかと』

「・・・空間を切り裂くほどの一撃となると・・・」

『しかし、あれを使うとなると・・・』

「背に腹は変えられん・・・起きろ、エア」

そして、悠二は自身の切り札の一枚を切ることを決めた

——ブリッジ——

「これは・・・一体」

アースラのブリッジは騒然となっていた。

一瞬で包囲されたことにも恐怖したが、いま目の前では中学生の少年が規格外の魔法でそれらを圧倒的な力によって排除している。

「・・・すごい」

「・・・なんちゅう魔法や」

「・・・悠くん」

その様子に三人娘も驚嘆する。

——悠二は炎で敵を焼くと、詠唱すらせずに空中に浮かんでいる。そして、やがて虚空に手を翳すと

「起きろ、エア」

ウィン

『っ!?!?』

悠二の声に呼応するかのように空間が波紋のように歪み、一つの柄を吐き出す。

それを迷いなく引き抜く悠二。

それをみて、アースラの全員が圧倒された。

それは・・・恐怖

「あの剣は・・・一体なんなんや？」

「・・・怖い」

「・・・これは・・・なに？」

それもそのはずだ。彼が引き抜いたその剣というにはあまりに異常なソレの名は乖離剣エア。

円筒状の三つの黒い刀身に血のような赤い線が走っている剣・・・それがエアの形状だ。

——それはすべての死の国の原典であり、天地開闢以前、星があらゆる生命の存在を許さなかった原初の姿、地獄そのもの。

語り継がれることはない、だが細胞一つ一つにそれは刻まれ、それに恐怖する。

まさに根源的な恐怖

「行くぞエア。お前も不本意だろうが、世界を修正するなどとぼざく輩は排除しなければいけないからな。故に力を貸せ」

ギューイイイイイイイイイイイ

「そうか・・・ならば。往くぞー!!」

悠二の問いかけに答えるように魔力を吸収し、その異常な刀身を回転させていくエア

「■■■■！？」

「■■■■■■■■！？」

「・・・さあ、黄泉路は開く。迷うことなく旅立つが良い。」

ギューイイイイイイイイイイイイイイイイイ

「じ、次元震反応！？・・・発生源は・・・悠二くんです！！！」

「なんだと！？」

「正確には悠二くんの持つているあの槍のようなから発生しています・・・嘘、時空断裂現象！？」

「・・・その剣は・・・一体なんなの！？」

「エヌマ・エリシュ天地乖離す開闢の星！！」

ギューイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ
イイイイイ

悠二はエアを突き出す形で、まもっていた暴風のような魔力の塊を打ち出す。

それは瞬く間に広がり、さきほどの魔法によって生き残ったアイン

ストたちを切り裂いていく。

「・・・」

静かにエアを蔵へと戻すと、自分の起した惨状に目をやる。

千の雷や燃える天空で削られ、炭になった大地はさきほどの天地乖^{エヌ}離^{マ・エリシュ}す開闢の星で相当不覚まで抉られてしまっている。

（さすがに、無人世界でもこれはヤバいかな？）

『でしょうね』

「・・・まあ、自分が起したことだしな・・・っ！」

『坊ちゃん!!』

「転移反応確認・・・大きいです!!」

「またなの!・・・魔力反応は!？」

「それが・・・」

エイミイが言いよどむ。

やがてあきらめたように

「まったく・・・無いんです」

『っ!?!?』

「計器の故障じゃないのか!?!」

クロノがそう疑うのも仕方ないこと。しかし

「計器は正常だよ!?!。目の前で起こっている転移は魔法じゃないナニカが使われている。」

「ノ・・・セカイ。・・・シュ・・・サ・・・バ・・・イ」

「これは・・・」

「念話かな?」

「それにしても、変やな」

三人娘がなにやら意味不明な念話を感知する。

「?・・・三人とも、どうしたんだ?」

「クロノ君、きこえんのか?」

「なにがだ?」

「念話」

「念話?・・・そんなものは聞こえないが」

三人娘が行っていることに首をかしげるクロノ。
しかし、それと同時に悠二は表情を歪めると

「アースラは下がれ!!..」

「えっ!?!..それはどういう..」

「話は後だ。死にたくなかったら下がれ!!」

そう一方的に言い放つと、悠二は険しい表情のまま、展開された巨大な魔法陣をにらむ。

バチ バチ バチ

(来るか・・レジセイア)

『坊ちゃん?』

バチバチバチバチ

魔法陣は紫に怪しく脈動し、時々火花を散らしている。
すこし前にアースラは後退してくれている。

『魔力残量は約60%。やはり、広範囲殲滅魔法の二連続と天地乖
離^{マ・エリシュ}す開闢の星は現在の魔力量ではきつかったですね』

「ああ。だが、ここからが本番だ」

「セカイ・・シュ・・サレ・・ナケレバ・・・」

「——やっとうご到着か。」

バチバチバチバチ

それは魔法陣から雷鳴と共に姿を現した。青紫の外甲に左右に触手と爪を備え、尻尾に小さな翼を供えている異形。それを悠二は知っていた。

「——ノゾマレヌセカイ・・シュウセイサレナケレバイケナイ
「!!」

「・・・来いよ。アインストレジセイア」

アインストゲミュート、アインストグリッドそしてアインストクノッヘンの姿を併せ持つ三メートル以上の巨体。

悠二が知るアインストの中でも上位にあたる存在だ。

「——さあ、開幕だ!!!」

「ワレラガシュウセイシナケレバ・・」

戯言のようにそれだけ繰り返すレジセイア。そのようすに舌打ちすると

「・・・つち、トレスオン投影開始」

投影するのは手に馴染んだ夫婦剣。すでに何千回と投影しているため、特にリスクはない。

「.....」

「はっ！！・・・参る！！！」

ドゴン

魔力を感じたのかどうか？・それは分からないが、緑色の触手に向けてレジセイア。それを難なく双剣で切り払うと足元で魔力を炸裂させる。

それと、瞬歩　そして強化の三重による加速で瞬時に間合いを詰める

「入った！！」

ザンザンザンザンザンザンザンザンザンザン！！！！

放たれる神速の斬撃の嵐。

しかし、切ったそばから事故修復を始めているので、あまり効果は無い。

「つち、
壊れた幻想」

それを悠二も気付いたようで、双剣を突き刺すと爆破する。

タツ

「ロールアウト
工程完了
全投影待機
・
」

そして、自分の頭上に無数の剣群を投影していく。
どうやら、数で叩き潰す気らしい。

「フリーズアウト停止解凍・・ソードバレルフルオープン全投影連続層写！！！！」

ダダダダダダダダダダダダダダダダ

悠二の号令によって、それはまるで雨のように目標に振り注ぎ、その身を削る。

「■■■■・・！！！！！」

ウィイイイイイン

「つち・I a m t h e b o r n o f m y s w o r d
(我が骨子は振れ狂う)」

ソードバレルフルオープン全投影連続層写による傷が修復中だというのに、砲撃体勢に入るレジセイア。悠二も弓を投影すると干将と莫耶と同じくらい使い慣れた宝具の振くれた剣を投影する。

「■■■■！！！」

「カラドボルグ偽・螺旋剣？！！！」

ビュン ドゴン

偽・螺旋剣？（カラドボルグ）とレジセイアの砲撃。それらは同時に放たれ、相殺しあう。

「つち・・・」

再び、弓に矢を番えると

「喰らえ！！・・・悪竜滅ぼす神なる稲妻！！！」
ヴァジュラ

「・・・悪竜滅ぼす神なる稲妻・・・」
ヴァジュラ

ドゴオオオオオン

さきほどの千の雷ほどではないけれど、それでも十分の威力を持った雷撃がレジセイアを襲う。

ちなみにヴァジュラとはインドラの遣いし雷を操る宝具だ。

本来は投擲するのだが、今回は例の如く骨子を捻じ曲げることで矢としてはなっている。

余談ではあるが、悠二のもっている弓・・・外見こそただのハンドガン
フェルノーイのついた黒い洋弓だが、実はこれも無駄なしの弓を変革させたもの。

そして

「リク・ラク ラ・ラック・ライラック・・・契約により、我に従え
氷の女王 来たれ とこしえのやみ えいえんのひょうが！！！」

「・・・えいえんのひょうが・・・」

ピキッ

（成功か・・・だが・・・）

氷の上級魔法によって凍るレジセイア。しかし、これで終わる相手ではないことは悠二はよく分かっている。

ピキッ ピキィ

そうしている間にもレジセイアを拘束している氷にひびが入り始める。

トレース・オン
「投影開始」

そうして、悠二も奥の手を出すことを決めるのだった。

——ブリッジー——

「リンディさん!!」

「ダメよ!!……」

「なんでや!?!?…あないや化け物、悠二くんがいくら強いから……」

「そうです!!……私たちだってすこしは「黙りなよ」……芳乃さん!?!?」

悠二の救援に行くと騒ぐ三人娘を止めたのはさくらだった。

「さつきから聞いていれば君たちは自分たちの力を過大評価しすぎだよ？・・もし、行つてごらんよ。君たちを庇つてきつと悠くんは命を落とすよ？」

『っ！？』

さくらの宣告に三人娘は絶句する。
しかし、すぐに再起動して

「そんなの！・・やってみなくちゃわからないじゃないですか！！」

「せや！！」

「・・君たち・・悠くん、御免ね・・鎖よ！！」

ジャラ

『っ！！』

さくらは悠二に対して謝ると同時に自身の希少能力レアスキルを発動し、鎖でなのはたちを縛る。

「——君たちはもうすこし、“魔法”がどんなものかって、考え直したほうが良いよ」

ピキイイイイン

サーチャーの撮影している画像では悠二の放った魔法によって氷付けになっているレジセイアが移っている。

「終わった……の？」

「うん、まだだよ。リンディちゃん、これは多分、時間稼ぎ」

「時間稼ぎ！？……これがか！？」

「うん。」

（悠くん……）

クロノの驚愕に答えるとなんともいえない表情でモニターを見上げる。

——そして、この誰一人として気付いていなかった。
さくらのそのまるで人形のような小さな手からは強く握りすぎたために血を流していたことに

十四話 招かれざる異邦人（後書き）

更新です。

悠二「今回は早かったな。どうした」

いやね、プロットなるものを作成したらどんどん指が暴走してしま
ってな・・・

悠二「ちょ！お前いままでプロットかいてなかったのかよ！！」

うん！！！！

悠二「だめだ、こいつ。」

と、いうわけなのですこしは更新が早くなると思います。

万に一つもないと思われませんが、期待してくださっている方に御報
告いたします。

シンさま 竜さま そして、龍賀さま。感想ありがとうございます。

感想は作者の励みになりますのでどんなものでもよいのでよろしく
お願いします。

それでは次回のD・C？ 孤独な転生者と孤独だった魔法使い

放たれる悠二の奥の手 黄金の片翼 そして煌く旭光

十五話 旭光纏う騎士王

見届けろ、すべての始まりを

十五話 旭光纏う騎士王

無人世界の荒野。もとより荒れていたそこはもはやその姿すら保っていない。

所々炭化し、凍り、なにか竜巻のようなもので抉られている。

そんなまるで戦争でもあったかのような荒野で悠二とレジセイアは対峙していた。

ピキッ ピキッ

半分近くまでその身を縛る氷の戒めを解いたレジセイアを見据え、片目をつぶる悠二。

そして

「トレース・オン
投影開始」 a

今回は時間は無いが、一つ一つちゃんと工程を獲て剣を投影する。

創造の理念を鑑定し、基本となる骨子を想定し、構成された材質を複製し、製作に及ぶ技術を模倣し、成長に至る経験に共感し、蓄積された年月を再現し、幻想を束ねいまここに剣と成す

「トレース・オフ
投影完了」

そして、悠二の手に握られているのは華やかな青と黄金に彩られた聖剣。

騎士王の象徴にして星が鍛え上げた最後の幻想
ラスト・ファンタズム

その銘を・・・エクスカリバー。

しかし、これだけではレジセイアは完全には殺せない。

ザクッ

悠二は剣を地面にさす。いまだにその片目は閉じられている。

「・・・分解・・・術式固定・・・掌握」

すると、目の前の黄金の剣はやがて輪郭を失い、希薄に成っていく。その理由は単純だ。宝具を純粹な魔力へと還元した。それだけだ。しかし宝具は大小はあれど、莫大な魔力と人の幻想によって生まれたもの。それには想像を絶するほどの魔力が込められている。

その総量は人間の持てる寮を遥かに凌駕する。

「魔力充填・・・」

それを身のうちに取り込む。

（ぐっ！？）

——いくら悠二でも、ただで済むはずがない。

現に体内ではいまにも魔術回路が焼ききれそうだ。

「術式兵装・・・アルトリア極光纏う騎士王」

騎士王の真名を冠したその術式兵装をかるうじて、それを制御下においた悠二。

体からはありえない密度の魔力。それが体内には収まりきれず、ま

るで片翼のように展開している。

余波で髪を結んでいたゴムは莫大過ぎる魔力で切れ、長い金髪はそのままになってしまっているため、同じ片翼でもセフィロスなどとは違い、神々しさまで感じる。

『坊ちゃん、もって五分です。それまでにご決着を』

「——ああ」

まるで、感情を押し殺したようなシャルティエの声に答え、悠二は氷の戒めを解きつつあるレジセイアを見据える。

主人思いの彼は酷な事にも悠二のしていることぐらいしか、奴を消せないことは分かっている。でも、できればコレを使って欲しくなかったのだろう。

——この魔法は自分の現界を遥かに越えた魔力を一時的にでも保有する。それで術者……つまり、悠二が無事で住むわけがない。

（……五分か。……問題はないな。）

思いのほか、活動時間が短いことに驚いたが溢れる魔力と予想以上の活性を感じて、問題ないと判断する。

（……あとでどうなることやら）

これだけの無茶だ。あとでどうなるかは想像さえ出来ないが、今はそれを捨て置く。

いまは目の前の敵を滅殺することだけに意識を集中させる。

トレース・オン
「投影開始」

両手に干将と莫耶を投影する。そして、異変を感じる

(・・・これは・・・！)

手に出した干将と莫耶。本来ならB?の宝具なのだが、Aまで上がっている。

どうやら、旭光の片翼が良い方向に作用しているらしい。

それに全体に黄金のオーラを纏い、それ自体も幾分か大きくなっている。

(・・・ゆっくり解析したいところだが、それは後回しだ。なにせ、あと五分だからな)

タッ

そう思い返した悠二は地面を蹴り碎き、レジセイアへと肉薄する。
莫大な魔力・・・その一部を全身の強化に回しているため、その速度は光速に近いものとなっている。

ビュン シュイン

すでにほとんど戒めは解けていたようで触手やらビームやらをいくつも放つが、それらすべては悠二を捕らえることはない。

トレース フラクトル
「投影・・・重奏・・・はあ！！！！！」

斬！！

さらに両手の夫婦剣に強化して、レジセイアを切り裂く。
やはり自己修復を始めるが・

（やはり、遅い！！）

完全に細胞が蘇生していない様で直りは目に見えて遅い。

「オラオラオラオラオラオラオラ！！！！」

どこぞのスタンドのラッシュのように目に見えないほどの速度で切り刻む悠二。

自己修復能力の所為で殺しきれないが、それでも十分。

ザシュ

「トレース・オン
投影開始！！」

最後に双剣をどてつばらに突き刺し、手に新たな武器を投影する。
それは二本の槍だった。

それも旭光纏う騎士王の作用のおかげで宝具としてのランクは上昇している。
アルトリア

しかし、さすがに危険だったのか、衝撃波を飛ばし同時に回りに歪曲フィールドをはり、防除を姿勢をとるレジセイア。

しかし、悠二はニヤリと笑うと左手に持つ朱槍を突き出す。

「ゲイ・ジャルグ
破魔の紅薔薇！！！！」

パリン

それはまるで硝子を割るかのように歪曲フィールドごと、レジセイアを貫く。

悠二の突き出した朱槍の名は破魔の紅薔薇。ゲイ・ジャルゲ

能力は触れた対象の魔力的効果を打ち消すこと。この場合、どうやら歪曲フィールドの形成に多少なりとも空気中の魔力素が使用されたために無効化できたのだ。

「はあああ！！！！・・・必滅の黄薔薇！！！」ゲイ・ボウ

ザンザンザンザンザン！！！！

今度は二本の槍による刺突の嵐。

——しかし、すこし違った。

必滅の黄薔薇に傷つけられた部分・・そこだけは自己修復しないのだ。ゲイ・ボウ

それこそが必滅の黄薔薇の能力。ゲイ・ボウ

これによって付けられた傷はコレを壊すか、担い手を殺さない限り、どんな手段を用いても治癒することはない。

ちなみに破魔の紅薔薇も必滅の黄薔薇もランクは本来ならBだが、ゲイ・ジャルゲ
投影魔術によつランクダウンは存在しないのとあわせ、旭光纏う騎ゲイ・ボウ
士王の恩恵のためランクAの宝具となっている。アルト

破魔の紅薔薇と必滅の黄薔薇を再び、突き刺す。ゲイ・ジャルゲ
ゲイ・ボウ

「■■■■■■！！！！」

ダダダダダダダ

悠二が破魔の紅薔薇と必滅の黄薔薇から手を離す瞬間、レジセイア
ゲイ・ジャルグ は空中から魔力弾を雨のように放つ。
ゲイ・ボウ

「くっ、織天覆う七つの円環！！！」

ウィン

投影に必要なプロセス・・・そのすべてを破棄し、かざした左手に
ローアイアスを展開する。

ズキン

（ぐっ・・・）

プロセスをすべてを破棄したせいで悠二の魔術回路が悲鳴を上げる。
もともと、術式兵装の展開でかなり負担がかかっていたうえに宝具
の連続投影。

そこにプロセス無視のアイアスの投影・・・もう悠二の魔術回路は
臨海寸前

（だが・・・負けられんのだよ。オレは！！！！）

すでに1000のうち、かなりが焼ききれているなか旭光纏う騎士
リァ 王によって得られた莫大な魔力・・・それらすべてを用い再度、聖剣
アルト を投影する。

ジセイア。

悠二はただ、その姿を静かに見続けていた。

——ブリッジー——

「・・・勝っちゃった・・・」

「すごい・・・」

「・・・悠くん」

みんなが驚愕に突付かれている中、さくらは一人、悠二のみを案じていた。

悠二の使った『旭光纏う騎士王』
アルトリア

その本質をなんとなくだが、掴んでいたためだ。

そして

バタッ

『えっ？』

悠二が唐突に倒れた。

「——悠くん!!!!!!!!!!」

これを予想していたさくらは瞬時に転移したのだった。

「悠くん！！悠くん！！」

さくらが転移し、悠二を抱き起こすと

「・・・さくらか。・・・ちよつと無理しすぎた・・・」

『坊ちゃん、しゃべらないください。予想以上に体のダメージが大きいんですから、最悪“鞘”でも埋め込まなければ・・・』

「それは・・・ダメだ。・・・」

シャルティエの提案を拒否する悠二。

「鞘？」

『はい、アーサー王の使う聖剣 エクスカリバー。その鞘には不老不死の概念があります・・・』

「えっ！そんなものであるの！？」

思わぬカミングアウトに驚愕するさくら。

「ただ・・・それは・・・奥の手だ。・・・トレースオン解析開始」

すずめの涙ほどもないであろう魔力を振り絞り、体に解析に魔術をかける悠二。

身体 余剰魔力によるダメージ大。戦闘不可能 休眠推奨
魔術回路 1000本中950本にエラー発生 魔術行使に支障アリ。

投影 不可能

解析 可能

強化 不可能

固有結界 不可能 暴走率100%

王の財宝 アクセス可能 宝具の取り出し および射出に支障アリ。

「・・・ひでえや。」

痛む体とその結果に顔を歪ませる悠二。

「やべ・・・意識が・・・」

「悠くん!?!?」

ガクッ

「悠くん!!!!?・・・シャルさん、悠くんは!?!?」

『大丈夫です。意識を失っただけ、命に別状はありません。ですが・
・当分の間は絶対安静でしょうね』

「うん・・・よかった」

自分の心配が杞憂に終わったことに安堵するさくら。
そして、さくらは意識を失った悠二をアースラに転移させ、自分も
転移するのだった。

十五話 旭光纏う騎士王（後書き）

連続投稿のため、次回予告のみです。

次回のD・C・？ 孤独な転生者と孤独だった魔法使い

悠二によって語られる異邦人の正体 そして、新しい家族

十六話 会談。

見届けろ、すべての始まりを

十六話 会談（前書き）

一人称をいれてみました。どうですかね？

あと、設定捏造あります

十六話 会談

悠二がレジセイアを旭光纏う騎士王アルトリアで倒して、体のダメージにそれから、悠二は即座にアースラに運びこまれ集中的に治療が行われた。原因は言わずもが過剰魔力の行使。

術式兵装『旭光纏う騎士王』アルトリア使用での活動時間を過ぎてしまったために魔力が行き場をなくし、彼の体にダメージを与え始めたのだ。体中のいたるところにダメージが蓄積し、魔術回路にもそれなりにダメージはあるだろう。

「リンディちゃん、悠くんの容態は？」

「体に魔力によるダメージによる気絶だそうよ。私達がわかりうる限りは・・・ね」

いま意識を失っている理由、そこはアースラでも図りかねていた。なにせ、神経系や体の調子は万全なのだ。なら、もう意識を回復してもおかしくは無い。

（となると、やっぱり魔術回路のほうかな？）

なら、とさくらは見当をつける。彼の奥の手旭光纏う騎士王はまず、投影した約束された勝利の剣を分解し、その体に魔力として吸収する。エクスカリバー

その際、おそらく魔力の受け皿になるのは悠二のもつ魔術回路。

「——あ、あの」

「・・・なに？」

いつになく、険しい表情を向けるさきには怯えたようすの三人娘。

「悠二くんは・・・？」

「大丈夫だよ、体に異常はないしそのうち目覚めるよ」

「よかったあ」

さくらの言葉に安心したように胸をなでおろすなのは達。

（・・・それにしても、なんでこんな子供が働かされているの？
やっぱり、管理局は嫌いだ）

『抑えてください、マスター。いまは悠二くんのこと为先決です』

（わかっているよ、ルナちゃん。）

露骨に嫌悪感を漏らすさくらをいさめるルナ。

「さくらさん」

「どうしたの？リンディちゃん」

「いますぐ医務室に言ってください。手」

リンディが指し示すさくらの手はいまだ、血でぬれていた。

「あつ！大丈夫だよ、こんな傷」

リンディは誰よりもはやく気付いていた。
彼女が悠二の無茶をする姿を見て、自分の無力を痛いぐらいに嘆いていたことに。

「いいから、行って下さい。お願いします」

「うん・・・」

リンディのゴリ押しが功を奏したようで、渋々ながらも医務室へと歩き出す。
すると「はぁ」と溜息を漏らすリンディ。

「リンディさん？」

不思議そうなのはが聞く。すると

「さくらさんのこと、同思っつ？」

「——正直、怖いなって思いました。私達と歳はかわら」あらあら、さくらさんも羨ましいわね」・・・？」

なのはが『歳が変わらない』というとしたら、リンディがそれを苦笑でさえぎる。

「さくらさんはアレでも私より年上よ？」

「嘘やろ！？」

「あれですか!？」

「信じられないの・・・」

なのは達の反応にさらに苦笑を強めるリンディ。そして、真剣な表情に戻ると

「——さくらはね、悠二くんが戦っている間、ずっと耐えて痛んだと思うよ」

「えっ？」

「それって、どういうことですか？」

「さくらはさんは、きっと自分に力が合ったならすぐにでもあそこに行きたかったんだと思うの。でも、そうしなかったのは自分に力が無いから、君たちにも言った言葉は、きつとに自分にも言い聞かせる言葉だったんじゃないかしら？」

『・・・』

実の所、リンディとさくらは割りと親しかったりする。

リンディの元夫のクライドとも面識はあったし、小さい頃のクロノも知っている。

ただ、あつちは覚えていないようだが・・・

「だから、あまりあの人のことを誤解しないでちょうだい。」

「はい・・・」

「もつとも、早くしないとさくらさんに悠二くんを取られちゃうかもしれないけどね」

『っ！？』／／／／／／／

リンディの一言で真っ赤になる三人娘。そして、同時にさっきまでのシリアスな雰囲気はどこかへいつてしまった。

（あらあら、悠二くんも罪な人ね）

リンディはそんな様子をみながら、楽しそうに微笑むのだった。

—— 医務室 ——

それから、さくらは医務室の先生から包帯を貰い手に巻きつけると、いまもベッドで眠ったままの悠二のところへと来ていた。

（・・・悠くん）

『さくらさん、大丈夫ですよ。』

「うん、そうだよね」

さくらだって、悠二のことは知っている。でもどうしても心配になっってしまう。

それは家族としての思いもあるかも知れ無いが、やっぱり大切な人

には元気でいて欲しい。その思いが強かったのかもしれない。

そんな時

「う、うう」

悠二は目を覚ました

悠二Side

・・・知らない天井だ

「悠くん!!!!!!」

うわっ!?!さくら!?

「お、おい。さくら!」////////

「心配したんだからねえ(泣)」

やれやれ、泣かせてしまったみたいだな。やっぱり、旭光纏う騎士王・・・改良の余地有りだな。

まあ、そんなことはさておき

「ごめんな・・・さくら」

とりあえず、まずはこいつらに心配をかけちゃったみたいだからな。さくらの頭に手を置くと、謝る。

「・・・もうこんな無茶はしないでね?」

「――善処する」

すまん・・・それはきつと出来ない。

「その間はなに？」

「ナンノコトデスカ？」

「はあ、もういいよ。それで、もう体の傷は治っているけど、魔術回路のほうはどう？」

さくらは呆れたように溜息を吐くとそういう。

言われてみればな・・・そういえば、倒れる前の状況は酷かったな。

倒れる前の結果を考え、すこし顔を引きつらせながら、魔術回路を起し魔術を発動させる。

うん、感覚的には異常はないな。

身体能力に以上はなし。

多少疲労はあるがそれほどではないだろう

魔術回路・・・それにすこし問題がある。

現在解放している500のうち、100本は焼ききれていて、回復に時間が掛かる・・・か。

とりあえず、四百本は使えるんだったら問題はないな・・・

「まあ、大丈夫だろう」

僕はさくらを安心させるためにもそう勤めて明るくそういった。

「そう。よかった、はい」

「ありがとう」

ムシャムシャ

さくらから貰った林檎を口に含む。うん、うまい。

プシュー

「起きたみたいね。大丈夫？」

「ええ」

林檎の二つ目に手をかけようとしたところでリンディさんが姿を現す。その後ろには若干、不機嫌そうなクロノ達が続く。

「さっそくですが、すこしあの化け物について聞かせてもらえないかしら？」

「・・・」

どうでしょうか？

僕はアインストのことをこの人達に話すべきかどうかどうするか、すこし逡巡する。

「話す前に言っておくが、これはあくまで僕の推測であって事実と

は違う可能性がある、それでも構わないか？」

「ええ」

「なら、話そう。まずあいつらの名称は“アインスト”これは固体名ではなく、あいつら全てをさす」

「アインスト？・・・聞いたことも無いわ」

まあ、当然だな。

・・・アインストは僕がこの世界に来たことで生まれた歪みだろうから

「リンディさん達が知らないのも無理はない。なぜなら、アレは異世界・・・いや、こことは異なる次元から着ているのだから」

リンディ Side

「リンディさん達が知らないのも無理はない。なぜなら、アレは異世界・・・いや、こことは異なる次元から着ているのだから」

『っ！?』

悠二くんの言葉に全員が固まる。

それもそのはずだ、彼はあの化け物・・・アインストはほかの次元世界の存在だといったのだから

「いや、正確には異なる次元ではないな。僕が知っているアインス

トなら、次元の狭間に存在する固有空間から・・・だな」

「っ！そんなことが！！」

出鱈目だ・・・そう否定するのは簡単だ。しかし、逆にそれを出鱈目だ・・・と否定するほどの材料を私達が持つていない、それどころか私達は^{アレ}アインストについてなんの情報も持ち合わせては居ない。

「・・・」

さすがにクロノもそれが分かったらしく、不機嫌そうながら黙っている。

『・・・』

なのはさんたちは話が飛躍しすぎて理解が追いついていないようだ。しかたないわね、なんせまだ中学生なんだから

「重ねていうが、これはあくまで僕の推論だ。事実なことなるかもしれない」

そういう悠二くんの表情は暗い。おそらく、アレが自分の知っているものだった場合のことを考えているのだろう。

あれほどの自己修復能力を持ち、大量を異形の軍勢を従えるモノ。

しかも、アレだけとは思えない。恐らく・・・あの巨体が複数いるのかもしれないわね・・・

「ねえねえ、アインスト・・・だっけ？それってさ、転移してくるんだよね？」

「ああ」

「じゃあさ、なんで魔力反応がかけらも無かったの？」

そういえばそうだ。

私達の魔法でも転送魔法はある。・・・だが、あの化け物が転移してくる際、魔力は一切検知されることは無かった。

「これも推論に過ぎないが、あれは空間を歪めているんだ。性格には転送じゃない、こちらへと空間を捻じ曲げ、『門』を作るんだ」

「っ！そんなことをしたら次元が！！」

「崩壊しないさ。なぜなら、あいつらは次元の流れにそって空間を捻じ曲げている」

次元の・・・流れ？

「次元の流れとは、過去から未来へと流れる時間の流れだ。それに逆らうとすれば次元震だつて起こし、次元断層が暴走するんだ」

「そんなものが・・・」

「まあ、現代の科学じゃその発見は無理だろうな」

そこでふと、私は思った。

「——ところで、なんで貴方は次元流次元流のことを知っているんですか？」

「黙秘する」

—— ああ、やっぱりそう来ると思ったわ。

まあ、いいわ。いまはそれよりアインストのことを聞くほうが先決よ。

あとでいくらでも情報は引き出せる……かもしれない。

なんか、成功確立は限りなくゼロに近い気がするのだけれど……

「ゴホン、話が脱線したな。次にあいつらの目的だが、それ自体はいたって簡単だ」

「どんな目的で動いているの？」

再起動したなのはちゃんが聞く。

「なに、お前たちもそうなって欲しいと思っていることだよ。いや、誰もが思っていることさ」

誰もが思っていること？

割と多いわよ……。

でも……

「世界平和……ですか？」

私はなぜか、この答えが正解のような気がした。

「ビンゴ、そう争いの根絶さ。だが、その方法に無理があった」

ああ・・・なるほど。

そこで私にもようやく合点がいった。

「絶対的な力による平和かしら？」

「ああ、そのとおり。徹底した管理と支配による恒久的平和・・・それがあいつらの目的だ」

「・・・酷い」

「そんなのって、生きてるとは言えへんや無いか・・・」

はやてさんの言うとおりだ。恒久的平和・・・そういうと聞こえは良いかもしれないが、そこに待っているのは自由無き人生だ。決められたことを決められた時間で実行する・・・機械と同じだ。

「それにはむかう奴は・・・修正されるんだね」・・・ああ。ただ、安心して良いのはまだあいつらの本隊には気付かれていないと思う」

「・・・それはどういことですか？」

「僕の消した化け物・・・アインストレジセイアは例えるなら幹部のようなものだ。それを中心にして成り立っている。そして、レジセイアには意識が存在し、個としてなりたっているため、本隊の大元とはリンクしているわけじゃない」

・・・なるほど、結節点というわけね。

「とりあえずは安心・・・というわけね」

「ああ」

『ふう……』

悠二くんがそうつなずくと目に見えて全員が安堵する。それはそうよね、あんな化け物が襲ってくるなんて考えたくないものね。

「さて、ほかに質問は？」

——とりあえず必要なことは聞いた。
ここからが本番だ

悠二Side

みんなにアインストのことを一通り話し終えると

「あの“剣”は一体なんなんですか？・・・」

唐突にリンディさんがそう言ってきた。恐らく・・・というか確実にリンディさんの言っている剣とは乖離剣エアのことだろう。

どうするかな？

話すこと自体は吝かじゃないんだけど、あちらさんにしてみれば確実にロストログアなわけだ。

ん・・・大丈夫か。

「——アレの名は乖離剣エア。あらゆる死の国の原典と呼ばれているモノだ」

「渡していただけませんか？・・あれはあきらかにロストロギアです」

まあ、やっぱりそうくるわな。

だが・・まあ

「いいぜ？ただ、これに耐えられたらな」

ウイン

そう言って、王の財宝から一本柄を現出させる。
ゲートオブバビロン

まあ、当然エアだが

それを手に掴み、引き抜くと

ゾワアアアアアア

『っ！？』

エアの禍々しい刀身が出た瞬間、突然ここにいる全員の顔が青くなる。

足も震えているし、脂汗も出ているようだ。

まあ、当然だな

「こいつは天地開闢以前、星があらゆる生命の存在を許さなかった原初の姿であり地獄そのもの。それは語り継がれる記憶には無いが、遺伝子に刻まれている。だからさ、遺伝子単位でこいつに無意識の恐怖しているのさ。最も、普段は王の財宝の中ゲートオブバビロンにあり、現出させる時も抑えてはいるがね」

最初はなれるのに大変だった。僕ですら、恐怖は消えなかったからね。

とりあえず、いまはなれた。

いや、慣れた・・・というよりは、エアが僕を認めてくれたってほうがいいかな？

なんか、こいつ意思みたいなのがあるみたいだし

ウイン

とりあえず、このままでは話もままならないのでエアを納める。

『ホッ』

すると、全員の表情も回復する。

だが、本番はここからだぜ？

「まあ、そういうことだ。ちなみに今回のこと全てを上部に報告した場合、僕はエアをこの艦に向けることを約束しよう」

『っ！！！』

さきほどのエアから放たれる天地乖離エヌマ・エリシュす開闢の星の威力を知ってい

るアースラ勢は再び驚愕と一緒に顔を青くする。

「そ、それはどういことですかっ!!」

焦った様子のリンディさんが叫ぶ。

「簡単だよ。僕の存在・そして、アインストの存在をお前たちじゃない・・管理局に知られたくないだけだ。」

そう、下手をするとOGでのザパトのような奴が管理局に居て、レジセイアを捕獲しようと化する愚か者がいるかもしれないからな。そうなってからではもう遅い。

「ぐっ・・わかりました。」

苦虫を噛み潰したような表情で嫌々応じるリンディさん。彼女には悪いが、このほうが良いのだ。

「そうそう、淨ってくれとみんな円満に解決なんだ」

ふう、これでなんとかひと段落か・・

シャリシャリ

そう言って、またりんごを口に運ぶのだった。

十六話 会談（後書き）

とりあえず、あとひとつかふたつくらいアースラでの話を書くつもりです

感想をくださった皆様に感謝を捧げます

以上、リオンでした

十七話 激突 クロノVS悠二

あれから、悠二がデバイスの登録手続きなどの諸雑務でアースラに滞在して、3日目。

突然、リンディに悠二は呼び出されていた。なんのようかな？とすこし気になりつつ、艦長室へと向かうとそこには妙に真剣な顔をしたクロノと普段とあまり変わらないリンディさんが居た。

「すみません、突然呼び出してしまって」

「いえいえ、それで、用件は？」

「はい、それが・・・「僕と模擬戦をしてくれないか？」・・・というわけなんです」

リンディの変わりに横のクロノが答える。あれから、なにかと話す機会の多かった二人は最初の剣呑な雰囲気はどこへやら、親友とも呼べるぐらいの信頼関係を気付いていた。その理由としては、お互い、女性に苦勞しているということが上げられるだろう。

「藪から棒にどうしたんだ？クロノ」

「いや、ふと今の僕で君にどこまで食い下がるかと思ってね」

「なるほど」

クロノに勝つことは悠二にとって造作もない。それはおそらく、クロノもわかっているだろう。三日前の戦闘でそれはわかりきっていた。

「それで、頼めるか？」

「ああ、全力でお相手しよう」

「ハハハ、お手柔らかに」

「ごめんなさいね、こんなことを頼んで」

リンディがすこし申し訳なさのうに微笑む。それに大して悠二はすこし微笑み

「別に、模擬戦の一回や二回なんて、どうということはありませんよ」

と、答えるのだった。

それから、悠二とクロノが模擬戦をするという情報は瞬く間にアースラ中に広まった。そして、二人が模擬戦をする訓練質には大勢のギャラリーが押しかけていた。
当然、そこには三人娘の姿もあった。

「さて、それじゃそろそろ始めようか」

「だな」

訓練室の中央・・・そこにはバリアジャケットを身にまとったクロノと悠二がたっていた。

クロノの手にはデバイスのSZU　悠二の手には干将と莫耶。

「二人とも、準備はいいわね？」

「はい！」 「ああ」

リンディの言葉に二人とも、同時に獲物を構え答える。

「では、はじめー！」

その宣言によって、模擬戦は始まった。

クロノSide

「先手必勝ー！」

『ステインガレー』

悠二に向け、貫通性をもつ魔力段を複数、放つ。

「甘いぜ？」

ガキイン ガキイン

やっぱり、そうなるよな・・・

悠二は僕のステインガレーを当然のようにその手に持った白と黒の双剣・・・干将と莫耶で魔力弾を受け止める。

「今度はこっちから行くぜ！」

ダッ

「ぐっ！」

ガキイイイン

一瞬、地面の碎けるような音と一緒に迫り来る斬撃。それをかろうじて、SZUで受け止める。

さっき、悠二がたっていた場所はここから50m ぐらいはある、それをこの一瞬でつめるなんて・・・

「ほら、考えごとをしている暇はないぜ!!」

『シャドウ・スター』

「まだまだ!!」

『ステインガーレイ』

悠二の放った黒い魔力弾を同数のステインガーレイで相殺する。

「そこだっ!!」

『ブレイズ・キャノン』

相殺した瞬間、僕の砲撃を叩き込む。

「トレスオン
投影開始」

っ?!

まずい。この語句が聞こえたとき・・・それは

「破魔の紅薔薇!!」
ゲイ・ジャルグ

ブオン

悠二が宝具を放つとき!!

案の定、僕に向かって赤い槍を投擲する。

その槍は僕のブレイズ・キャノンをかき消し、迫る。

しかし、この程度をよけられない僕じゃない!

「ステインガーレイ!!」

『ステインガーレイ』

お返しに、10発ほど魔力弾を叩き込む。

「この程度の攻撃!」

『シャドウ・スター』

さきほどと同じように相殺される。・・・が、これも予想通り

「まだまだ!!」

『ステインガーレイ』

まだまだ、まだ終わらせるわけには行かない!

僕は次々と魔力弾を撃ち込んでいく。

「くそ！シャル！」

『了解、ディアボリック・フィールド』

ブオン

悠二の周りに攻撃性をもった結界が張られる。

はやてのディアボリック・エミツションを圧縮、縮小した魔法だ。

当然、スティンガーレイは防がれる・・・だが！

「もらった！デュランダル！」

その隙を待っていた僕はすぐにデバイスをSZUからデュランダルへと持ち替える。

「悠久なる凍土・・・氷の棺にて永久の眠りつけ！」

『エターナル・コフィン』

ガキイイイイン

エターナルコフィンによって一瞬にして、凍りつく悠二。しかし、もってあと数秒！

その証拠にいまにもその戒めは解かれつつある。

「行くぞ！デュランダル！」

『イエス ボス』

僕だって、こののために努力したんだ！！

「受けてみる！僕の全力を！！！」

『フリージングジャベリン エクスキュージョンシフト』

空気中の水分が表決し、大きな氷の槍へと変わる。

さらにそれに結界破壊の術式を付与したものが、凍り付いている悠二を囲むように配置される。

「行け！！」

『ファイア』

ダダダダダダダダダダダダ

それはいつせいに悠二へと注がれる。

だが

「上出来だ。クロノ」

氷の棺のなか、悠二はたしかに満足そうに微笑んでいた。

クロノside out

「クロノくん・・・すごい・・・」

「クロノくんって、こんなにつよかったんか?!」

クロノと悠二が闘っている中、そこにいる全員が驚愕していた。
いや、一人だけ当然のように微笑むリンディさんを除いて

「ううん、あのコは悠二君にすこしでも近づくためにこの三日間、
それこそ死ぬ気で努力したんだよ」

「っ！それは本当なんですか？」

「ええ」

リンディのいうとおりだった。悠二に徹底的につぶされ、その後に
その力が努力によって得たものだと思ったクロノは悠二に激しくあ
こがれた。

それと同時に不振に思った。

自分とこうも年の離れているかがこれほどの力を得るためにどれ
ほどの努力をしただろうか？

なら、自分はどうかだろうと

それから、クロノはありとあらゆることを調べ、それこそ死ぬ気の
努力を三日間、続けた。

その成果が・・・これだった。

「すごい・・・」

全員、クロノの強さに驚愕している。

しかし

「上出来だ。クロノ」

『っ!?!?』

そこにきて、一気に雰囲気が変わる。

そして、強大な魔力が重圧となって全員に襲い掛かる。

「よくぞ、三日間でここまで強くなった。投影開始」
トレースオン

「っ!」

トレースオン
投影開始 その語句を聞いて、クロノの表情に緊張が走る。

「災厄振りまく獄炎の剣」
レーヴァテイン

ボオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

悠二がその真名を唱えた瞬間、風景は一変する。

「えっ!?!」

「な、なにが起こったんや!?!」

さきほどまで、ところどころ凍りついていた訓練場はいつぱん、――

瞬で炎が支配していた。

当然、さきほどはなつた氷の槍も一瞬にして解けるどころか、蒸発してしまっている

「レーヴァテイン・・・最悪だ」

ひとり、もしやと思い調べていたクロノひとり冷や汗を流す。

レーヴァテイン・・・レヴァテインとも呼ばれ、ケルト神話の神スルトの持っていたとされる杖とも剣とも呼ばれている宝具で、それは一説には世界すべてを焼き滅ぼす魔剣とも呼ばれるものだ。

悠二の能力に見当をつけ、それについて調べていたクロノは自身の最悪の予想があたってしまったことに思わず舌打ちする。

「やれやれ、まさかこいつを出させられることになるとはね、いやはや」

悠二side

いやはや、まったく予想外だ。

まさか、クロノがここまで化けるとは・・・

エターナルコフィンで凍られた上に、ぶつとい氷の槍で包囲・・・そこからの殲滅。

おそらく、相手が僕じゃ泣いて、なのはだったらあの時点で勝っていたな・・・

だが、まあ僕には災厄レーヴァテイン振りまく獄炎の剣があったから助かったけど。

「やれやれ、まさかこいつを出させられることになるとはね、いやは」

タッ

地面に降り立ち、手にもつ真つ赤な西洋剣・・・レーヴァテインを破棄する。

これはすこし強すぎる。

「んじゃ、今度はこっちから行くぜ!!」

ダッ

地面を書け、走り出すと同時に両手に黒鍵を投影する。

「ハッ!!」

投擲。

「ぐっ!!」

『ステインガーレイ』

同数の魔力弾によって防がれる。術式発動からの機動が遅い。どうやら、さきほどの連携で相当、魔力を食ってしまったようだ。

では、もう幕引きといっつ。

「トレースオン
投影開始」

手に弓を投影し、壁を蹴りジャンプする。

飛んでも買ったのだが、こっちのほうはこれにはあっている。

「I am the born of my sword（我が骨子は振れ狂う）」

「っ!？」

魔力の収束を感じたのか、とっさに何十ものプロテクションをはるクロノ。

展開速度や強度も文句ない。

さすが、執務官か・・・だが、それではこれは防げない。

「さあ、これが君へと手向けだ。受け取るといい！カラドボルグ偽・螺旋剣?!」

僕の手にある振くれた剣・・・カラドボルグ偽・螺旋剣?を引きしぼり、放つ!!

ガキイイイイイイイン

「ぐわっ!？」

偽・螺旋剣（カラドボルグIE）はあつというまにクロノのプロテクションを貫き、それを食らったクロノは吹き飛ばされる。

非殺傷設定のうえではなっているから大丈夫だろう。

『さすがに、あれは怪しそうですね・・・』

「まあな・・・」

すこし、魔力を込めすぎたか・・・そう思った瞬間だった。

悠二side out

あれから、念のために検査したが、クロノには魔力ダメージなどし
かなく大事には至らなかった。

悠二のほうは、あれから全員の質問攻め、

レーヴァテインのことや、カラドボルグのことを差し支えない程度
で話した。

「そうか、君は君で大変だったんだな」

「ああ、すこし調子に乗りすぎたのが悪かった・・・」

と、いま悠二はクロノの病室でクロノに愚痴っていた。
それをクロノは苦笑しながら、聞いている。

「それにしても、クロノ。お前ほんとに強くなったな」

「——それでも、君には追いつけない」

「そういうなよ、クロノ。じゃあ、すこしだけ僕の話をしてやる」

そういつて、悠二は語りだした。

自身の過去・・・そのほんのすこしだけを

「なっ!?!じゃあ君は」

「ああ」

「そうか・・・なら、管理局は・・・」

クロノは少なからず、ショックを受けていた。この三日で、悠二の説得を受けたクロノには多少なりとも管理局に解する懐疑心は芽生えていた。

それが悠二の過去をきいたことで加速したのだ。

「——だからよ、僕と比べるな。僕と比べちゃいけない。クロノはクロノの道を行け」

「ああ。すまなかったな。こんな話をさせて」

「いやいや、あと、このことは誰にも話すなよ?」

「ああ、当然だ」

そういつて、悠二は席を立つとまたくるといって、病室を後にするのだった

クロノSide

「・・・正義・・・か」

悠二が病室をでたあと、ひとり考える。

悠二の過去・・・ほんのさわりだけだったが、あれが本当なら、悠二は凄惨・・・なんて言葉も生ぬるいほどの前世を背負っている。

だが、すこし納得した自分が居たこともたしかだった。

悠二のアレほどの力・・・その年ではありえない。

それなら、納得がいく。

だが・・・だが

「お前は・・・それでよかったのか？」

どうしても、そう聞きたくなってしまう。悠二の過去・・・それはあまりにも報われなさ過ぎたから・・・

クロノSide out

そのご、任務から帰還していたヴォルケンリッターの烈火の将は主のはやてから悠二の話を聞き、悠二の模擬戦を申し込んだ。その直後、フェイトからも同じことを申し込まれ、すこしクロノと模擬戦をしたことを後悔した悠二だったとさ。

十七話 激突 クロノVS悠二（後書き）

あとがきです

悠二「・・・作者、お前・・・」

わかってるって!!

龍賀さまとのコラボはもうすこし後になってしまいます。申し訳ありません!!

悠二「さて、今回はクロノが輝いたな」

まあね、思い出したら数少ない男キャラなんだよな・・・

悠二「今更だな」

なにか、変なところがありましたら教えてください。修正しますので

悠二「さて、紅の殲滅王さま 毬藻さま。感想をありがとうございます」

今回はほのぼの・・・といか、フラグ回です。

第十八話 苦悩と答え

見届けろ、すべてのはじまりを

十八話 雷光の葛藤（前書き）

ご都合主義 超強引展開ですが、それでいいという方はどうぞ

十八話 雷光の葛藤

悠二とクロノが模擬戦をしてから、さすがに泊まり・・・ということとはなくなったが、なのはたちの願いで冬休みの間はアースラへと遊びに来ていた。

アースラはアースラで、いろいろ仕事があるようだが悠二は手伝いこそすれ、邪魔にはならないので、すでにクロノすら了承している。時々、音姫や由夢も行きたいといっている（とはいっても、さくらのさんの知り合いのところとしかいっていない）ために、毎度説得には苦労している悠二だったが、数少ない男友達のクロノや武装局員の面々とも合えるので、結構な頻度で着ている。

しかし

「はゝ、冬休みもあと二日かゝ」

そうなのだ。すでに冬休みもあと残すところ二日となってし待っている。すでに宿題などは終わらせているため、あせる必要はないのだが、やはり名残惜しいものだ。

「ねえ、悠二」

「どうしたんだ？フエイト」

悠二のとなりに座っているフエイトはいつになく浮かない顔をしている。目の前にあるスパゲッティもさきほどから一切、減っていない。

「なにか悩み事でもあんのか？」

「うん、ちょっとね」

（はて？なにかあったかな・・・）

そういつて、頭のなかを穿り返すが見つかる気配すらない。
悠二はもうほとんどの原作知識を失ってしまっているのだ。

——といっても、それも無理やり詰め込んだものだったのだけ
れど・・・

「私ね、リンディさんから養女にならないかって、言われているの」

「ああ、なるほど・・・」

それか・・・と悠二は納得する。

フェイトはどうやら、自分になっていいのかわからなくなっている
ようだ。

「どうして、そんなことで悩む必要があるんだ？」

「うん・・・」

フェイトの反応を見て、悠二は自分が地雷を踏んでしまったことに
気付く。

「あゝ、すまん。話したくなかったらいいぞ？」

「ううん、せつかくだから悠二にも聞いてほしい、私のこと」

悠二Side

「ううん、せつかだから悠二にも聞いてほしい、私のこと」

そういつて、フェイトは語りだした。自身がアリシア・テストロッサのクローンであること。

そして、ジュエルシード事件のことも。

・・・無印か

内心、罪悪感にさいなまれる。なぜなら、その物語に僕が介入していたなら、もつとより良い形でエンディングを迎えられたのだからでも、僕はそれをしなかった。

——彼女たちの成長のためと雖いつつも、自身が必要以上に他人にかかわるのを拒絶してしまっていた。

その結果がいまのフェイトの苦悩につながってしまっているんだ・・・。結局、僕は何もできないのかな・・・。

「・・・それでね、ふと思っちゃうんだよ。アリシアのクローンである私に、果たして幸せになる資格があるのかって」

「っ!」

僕はその一言で理性が振り切れるのを感じた。

パシン

「えっ?」

気付くと、僕は左手でフェイトの頬を張っていた。

「——お前、本気で走っているのか？」

「え？」

突然の僕の行動にまだ再起動できていないフェイト。

「自分が幸せになる資格などない！？」——「冗談も体外にしろ！！」

「っ！」

「じゃあ聞くんが、お前はアリシア・テストロッサか！？」

フルフル

僕に言葉に首を横に振って否定するフェイト。

「違うだろ？お前はフェイト・テストロッサだ。たしかに、お前にはアリシアの記憶があるかもしれない、だがなのはやはやてにあったのはフェイト・テストロッサだろうが！！！」

「っ！」

「誰だって命はひとつなんだよ！だから、その命はお前のだ、彼女じゃない！！！」

「ヒグッ・・・ヒック」

気付くと、フェイトの目じりには涙がたまり、顔も真っ赤になっていた。

「だからよ、幸せになれないなんて、悲しいことを言うな。お前には幸せになる資格は十分にある。むしろ、幸せになってやらねえと、あの世にいるお前の母さんや姉は納得しないぜ？」

「うん、うん！」

僕は自分でも不思議なくらい、穏やかな声でフェイトに語りかけている。

「だからよ、今は泣け。じゃねえと、笑いたいときに笑えないぞ？」

[illegible]

それから、フェイトは僕の胸で泣き続けた。

気を利かせてくれたシャルが、防音と人払いを結界を張ってくれている。

ほんと、僕にはもったいないデバイスだよ

「光荣ですね」

数分後

それから、フェイトを落ち着かせると

「——とりあえず、リンディさんたちに迷惑がかかるのがいやなら、家に来い。さくらのことだ、一人や二人ぐらい簡単にOKして

くれるさ」

と、提案してみた。

「えっ！？いいの？」

想像したよりも大きな反応を返してくれるフェイト。

「好きにしる。リンディさんのところへ行くか、家へ来るか。好きなほうを選べ、僕たちにできるのは道を指し示すことぐらいで、結局選ぶのはフェイト・テストロッサ。お前だ」

「うん！！」

そういうフェイトの表情は、どこか晴れ晴れしていたのだった。

悠二 aide aut

フェイト aide aut

悠二は私のことを叱り、励ますとさっさと出て行ってしまった。

「はぁ・・・」

悠二の行ってくれたことは、とてもうれしかった。

『誰だって命はひとつなんだよ！だから、その命はお前のだ、彼女じゃない！！』

そう怒鳴る悠二は本当に怒っていた。

自分のためにあそこまで怒ってくれたのはとてもうれしかった。

そして、なぜか胸が温かい・・・

「ねえ、バルディッシュ。私はどっちにいったほうがいいのかね？」

『私にはわかりかねます。それをお決めになるのはサー自身です』

「ハハハ、そう・・・だよね」

『それに、すでに答えは決まっているのではないですか？』

「?・・・フフ、そうだね」

不思議といまの私は迷っていなかった。せつかく提案してくれたりンディさんには悪いけれど・・・ね。

「じゃあ、悠二がお兄ちゃんになるのかな？」

『それはわかりません。もしやすると、サーが姉かもしれませんよ?』

「ハハハ、それもいいかもね」

そんな風にバルディッシュと他愛のない話をしていると

「あ、フェイトちゃん!」

「フェイトちゃんもお昼なんか？」

「あ、うん」

そこになのはとはやてが来る。

「そういえば、フエイトちゃん。リンディさんに養子にしてみらうって聞いたけど、どうするの？」

「うん、もう決めてるよ」

「なら、クロノ君に義妹ができるわけやな」

「ううん、違うよ」

私の言葉を聴いて、へっ？という顔になる二人。

「せっかくだけど、断らせてもらうことにしたよ」

「せ、せやけどそうなるかどうかするん？」

心配してくれているようで、はやてもなのはもう少し顔が悪い。心配してくれるのはうれしいけど・・・ね

「大丈夫だよ、二人ともとってもいいところからお誘いがあったから」

『？』

私の言葉に頭に疑問視を浮かべる二人。

知った二人がどんな顔をするか・・・すこし楽しみだな♪

フ
エ
イ
ト
S
i
d
e

o
u
t

十八話 雷光の葛藤（後書き）

幻想殺しさま 龍賀さま 毬藻さま 感想ありがとうございます。

それと、フェイトファンのみなさまに深くお詫び申し上げます。

次回は、はやてのターン！ww

次回 夜天の苦悩

十九話 夜天の苦悩（前書き）

またもや、ご都合主義 超強引展開です！

十九話 夜天の苦悩

それから、フェイトはリンディさんに養女の申し出を断るとともに、新たな受け入れ先が見つかったことを説明すると「あら、悠二君にしゃてられたわね」と完全に見透かされていた。悠二のほうはフェイトから了承の返事をもらえるとさくらに連絡、二つ返事で了承を得た。

「さやか・・・まさか、芳乃さんのいえだったとはな、思いもせんかったわ」

「うん、私も悠二から言われたときは驚いたよ」

「にやはは、クロノくんご愁傷さまなの」

ある意味、一番の被害者はクロノであろう。彼はフェイトが義妹になるかもしれないと、かなり期待していたからだ。決定直後、悠二に奇襲をかけたが結果は何の上、マグダラの聖骸布に捕まり、外道マーボーに沈んだ。

「ありや、食べ物じゃあらへん。すでに兵器の部類や」

『うん・・・』

作った悠二も『コレは食えたもんじゃない』と苦笑しながら、ビクビクと怪しく痙攣するクロノの口に流し込んでいたことを思い出し、苦笑を深める。悠二いわく、アレを食えるのは人の不幸を最大の幸福とする性格の捩れ曲がった外道神父だけとのこと。

ちなみに悠二も作るときは自己暗示で嗅覚をカットしていたのは余談だ。

「それにしても、うらやましいな」

「せやな・・・」

二人とも、この一週間で悠二ともかなり距離を縮めていた。若干、根暗で無愛想なところもある悠二だったが、接してみると三人の予想以上に明るいことを知った三人は見る見るうちに仲良くなっていた。

「せやけど・・・」

「どうしたの？はやてちゃん」

「やっぱ、隠し通すわけにはいかんやろな」

その分、はやての表情は浮かない。なぜなら、彼女はいまだに小学四年のときに起こった『闇の書事件』のことを悠二に話せないで居たからだ。下している分、嫌われたらどうしよう・・・という不安も生まれてきたのだろう。

「何の話してんだ？」

「ビクッ!？」

そこに折り悪く、悠二が顔を出す。

「い、いやなんでもあら変よ？」

「・・・」

あきらかに動揺するはやて。これではなにかあるといっているようなものだ。

悠二は「はあ」とため息をひとつ吐くと

「なにか悩み事か？」

「・・・えっ？」

はやての目の前の席に座り、いつになく真剣な表情ではやてをみる悠二。そして、それに思わず驚いてしまうはやて。

「悩み事なら相談に乗るぞ？」

「う、うん・・・」

はやてSide

「悩み事なら相談に乗るぞ？」

私はその瞳をみて、おもわず動揺してしもつた・・・

「う、うん・・・」

ポーカーフフェイスにも演技にも多少の自身はある・・・でも、なぜだがいま、彼を前にして隠しとおせるきがせんかった。いままで、見たこともない真剣な悠二君の青い瞳にすべてを見透かされているような気すらしたんや。

「・・・悠二くんは、私のことどうおもってるん？」

「はやてのこと？僕が？」

「せや」

「・・・そうだな、腹黒い子狸・・・かな？」

「フフツ、酷い言い方だな」

悠二くんの答えに思わず笑ってしまう。

「——だが、いつだって人を気遣える優しい子だとも思っている」

えっ？

「——」

それだけいうと、雄二君は恥ずかしそうに鼻の頭を書きながら、明後日の方向を見取る・・・。
もしかして・・・照れとるんか？

「ありがとう」

「お、おう」

なら、私も腹わないかな。

「——突然やけど、私から悠二君に話したいことがあるんや」

「話したいこと？」

「せや」

もうこの際、嫌われるか嫌われないかはもうどうでもええ。
ただ、私はうそをつきたくなかった。

大切な友達にうそをつくのだけは嫌や。

「じゃあ、私たちは行くね」

「うん」

そういつて、休憩所をでるのはちゃんとフェイトちゃん。
——ありがとう、気を使ってくれたんやな。

「?・・・どうしたんだ？なのはもフェイトも」

「ええか？」

「あ、ああ。で、話って何だ？」

「それやけどな。——いまから五年くらい前や・・・」

そうして、うちは悠二君にすべてを打ち明けた。
五年前に起こった・・・『闇の書事件』と呼ばれとる事件の真相に
ついて。

そして、私は話し終わると

「——そっか」

「改めて、私のこと、胴思う？」

正直、私は悠二君がどうおもつとるのか・・・そう聞くのがつらい。ひよっとしたら、私のことを嫌ってしまいかも知れへん・・・そう思うと、胸が痛くなつてまう。

せやけど、聞かないでは居られへんかった。

「そうだな。訂正しよう、自分のことを蔑ろにする馬鹿なお人よしさんだ」

「ふえ？」

ポッフ

そんな私の心配とは裏腹に悠二君は笑顔で私の頭の上に手をおくと

「もしかして、僕がお前のことを嫌うとも思っただのか？」

「せ、せやけど・・・」

「あのな、はやて。人間、間違いのひとつやふたつは犯して当たり前なんだよ。それに、お前はその罪を償うどころか、償う必要のない罪まで背負って生きている。だから、僕は自分のことをないがしろにする場かな御人好しと言っただ」

「悠二君・・・」

ああ、なんか妙に胸の奥のほうで暖かくなってくる気がする・・・
不思議やな

「それに、お前のことを犯罪者とか抜かすやからはこの僕が直々に私刑に処してやるよ。だから、胸を張って生きろ、世界中がお前を認めなくても、少なくとも俺はお前の味方だ」

「えっ！」／／／／／／／／／／／／／／／／

あ、あかん！なんてこというんや、悠二君は！！
そんな子といわれたら・・・

「だからよ、お前は笑っていてくれ。な？」

「う、うん」／／／／／／／／／／／／／／／／

そんな子といわれたら・・・惚れてまうやろ？

悠二Side

「やれやれ、どいつもこいつも気にしすぎなんだよ」

顔を真っ赤にしたはやてを置いて、気恥ずかしさから食堂を出た僕は、あてもなくアースラの艦内を歩き回っていた。

まったく、どうしてこの世界の女の子ってのはここまで責任感過多なのかね、もうすこし気楽に生きられないもんかね・・・

『それはともかく、フラグを立てるのはすこし自重したほうがよろ

しいかと』

「フラグ？そんなもん、いつ立てたよ？」

『——はあ、だめだこの人・・・早く何とかしないと（ボソツ）』

なぜかシャルがフラグが胴とかいった後、ブツブツとなにやらつぶやいている。

僕にフラグ？

・・・寝言は寝てから言っしてほしいものだ。

悠二 side out

はやてのために一回、食堂を離れて近くの休憩所で時間をつぶしていると、食堂から悠二が出てきたのを見つけたのはとフェイトの二人は

「終わったのかな？」

「うん、行こう？」

「うん！」

二人とも、悠二がそんなことで彼女を否定するような人間でないことはよくわかってるし、信じてる。

彼なら、おそらく笑っているだけだろう・・・

しかし、それでも二人ははやてが心配だった。
すこし急ぎ足で食堂のほうへ行ってみると・・・

「・・・」／／／／／／／／／／／／／／／／

そこには顔をまるで熟しきったトマトのように真っ赤に染めたはやてが佇んでいた。

「はやてちゃん？」 「はやて？」

「ふえ！？あ、なのはちゃんにフェイトちゃんどうしたんや？」

不振がり、声をかけてみると、心ここにあらずといった感じの反応。

「どうだった？」

「そ、それがな・・・」／／／／／／／／／／／／／／／／

はやては顔を真っ赤にして言いよどむ。

「はやてちゃん？」

さすがのなのはも不振顔だ

「な、なんでもあるへんよ。なんでも」／／／／／／／／／／／／／／／／

「そんな赤くなっても説得力無いの」

「うん」

二人とも、はやてがこんなになった理由がわかったので、さっきとは打って変わり、ジト眼ではやてをみる。

（ここにもライバルが・・・）

（悠二君・・・フラグ立てすぎなの・・・）

それぞれ、内心で深いため息をつく。

「くしゅん！」

そのころ、悠二は用事がありクロノの立会いのもと、デバイスルームを訪れていた。

「どうした、なぜか？」

「いや、なんか誰かがうわさをしているようなかんじがしてな・・・」

「

「・・・？」

そんな悠二の様子にただクロノは首をかしげるだけだった。

十九話 夜天の苦悩（後書き）

どうでしたかね？

すこしでも感想をいただくと自分のテンションが天元突破しますw w

次回 シリアス・・・かな？

二十話 覚悟

二十話 覚悟（前書き）

ふう、やっとここまでできたぜ・・

二十話 覚悟

フエイトside

「二人とも、準備は良い？」

「はい」「ああ」

いま、私はお兄ちゃんになった悠二とさくらさんと一緒に無人世界に來てる。理由は模擬戦のため、今回は珍しくお兄ちゃんのほうから誘ってきた。普段なら、私が誘うのに、なにかいやな予感がするけど、気にしない。

お兄ちゃんの両手にはいつものように干将莫耶が握られている。

当然、私もバルディッシュを持っていくわけだけど・・・。

「それじゃ、はじめ！」

さくらさんの号令とともに模擬戦は始まる

「まずは小手調べだ！」

『シャドウ・スター』

クロノから魔法のことを教わったお兄ちゃんが考案した魔力弾。性能はなのはのアクセル・シューターとあまり変わらない。

「プラズマランサー！」

『プラズマランサー』

それを同数の魔力弾で迎撃する。

「——行く！」

『ソニックムーブ』

魔法で高速化し、その隙に接近する。

「闇に沈め」

「っ!？」

——読まれてた!？

『ディアボリック・フィールド』

「ぐっ！」

急転換し、お兄ちゃんの空間攻撃から逃れる。さっきのはお兄ちゃんがはやてのディアボリック・エミッションの範囲を圧縮、攻撃性を高めた魔法。

範囲は狭いけど、任意の空間に発現可能で、威力も高い。

「なら！」

『アーク・セイバー』

バルディッシュの魔力刃を射出する。速度 威力ともにプラズマ

ンサーよりは上だ。

「爆散せしめん！」

『バレッテーズ・フレア』

「えっ！？」

突然、なにかの結界がアークセイバーと私を包み込む。
・・・この結界は危険だ！

『サー！』

「はあ！！」

ガキイン

バルディッシュを振りかぶり、この結界を破壊しようとする。しかし、弾かれてしまう。

「爆ぜろ」

ドゴオオオン

「・・・っち、外したか」

「はあ・・・はあ」

危なかった。・・・あの一瞬で逃げられなかったから、あの爆発が直撃してた。

『結界爆破・・・厄介ですね』

「うん・・・」

まさか、爆発する結界なんてね・・・。

「―――そんなじゃ、行くぜ！」

『クロック・アップ』

「くっ!?!」

『ソニック・ムーブ』

お兄ちゃんも私も移動高速化の魔法を発動。切りかかるおにいちゃんを迎え撃つ。

そして、お兄ちゃんの持っている剣をみて、驚愕した

干将莫耶じゃ・・・ない!?

お兄ちゃんが持っていたのは、盾と剣が合体したような形の機械質のロングソード。いつも使っている干将と莫耶じゃない

「驚いたか?これが今回の模擬戦の目的さ!」

「―――どおりで、お兄ちゃんから誘ってくると思ったら!」

お兄ちゃんの剣を弾き返す。

「いけえ!」

『プラズマランサー』

そこに瞬時に生成した十発のプラズマランサーを打ち込む。

「シャル！」

『了解！』

ウィン

お兄ちゃん持っていた剣が緑色の粒子になって消え、今度は黒と銀色の銃になる。

そんなものまでデバイスに組み込んでたんだ・・・

「イア イタクア！！！」

銀色の銃から放たれた一発の魔力段が分裂 それぞれ細いレーザーのようになり、プラズマランサーを撃墜する。

「イア クトウグア！！！」

「くっ・・・！」

『プラズマスマッシュ』

今度は黒い銃から放たれた砲撃を同じく砲撃で迎撃する。

「はあああ、落ちよ稲妻！！！！」

『サンダーレイジ』

その生まれた一瞬の空白・・・そこに広範囲での魔法を・・・放つ！！

ドゴオオオオオオン

「・・・やったかな？」

『・・・』

「やれやれ、アブねえか・・・おい」

しかし、そこには体中を覆うような緑色のフィールドに包まれた無傷のお兄ちゃんが居た。

「・・・あちゃあ、やっぱり魔力の収束が甘かったかな？」

『・・・訓練あるのみです。サー』

バルディッシュの言葉に苦笑しつつ、再び強く握りこむ。

*

「はあ・・・また負けちゃった・・・」

「にやはは」

「アホが、そんな簡単に僕に勝てるわけがないだろうが」

あのあと、切り込んだ隙を利用したカウンターで、悠二の勝利に終わった。ちなみに、いまはさきほどまでいた無人世界をあとにして、全員芳乃家へと戻っている。

「それにしても、どうしてデバイスに武装を組み込んだの？」

「ああ、その理由は簡単。僕の魔術の隠蔽」

——悠二のもつ魔術は強力だ。鈍から、果ては伝説の武具さえ投影という形で呼び出せる魔術。

それこそ、人間ロストログアあつかいされてもおかしくないほどにだから、悠二はサポート用に神から送られてきたシャルティエにある機関を組み込み、それを行かせる武装も組み込んだのだ。

「それはさておき、バルディッシュをすこし借りて良いか？」

「え？どうして？」

「すこし調整まかいそしたくてね」

「絶対、魔改造する気でしょ？」

「ナンノコトデスカ？」

ジト眼でにらんでくるフェイトに返答が思わず片言になってしまう悠二。しかし、当たり前といえはあたりまえか。

なぜなら、悠二はあれから芳乃家の地下に増設（悠二がさくらの許

可を貰ってやった）された悠二の工房でフェイトは悠二によって魔改造の施されたものを嫌というくらいに見ている。

例をあげるなら、魔力で起動するように改造されたフェンリル デバイスに搭載できるように改良されたGNDドライブ「T」とGND ライブなどなど、おそらく管理局がソレを発見したらロストロギア 認定されるようなものがごろごろある。

「いいよ。はい」

「ほいよ。よろしくな、バルディッシュ」

『お手柔らかにお願いします』

もし、デバイスに顔があるならいま、バルディッシュは苦笑しているだろう。しかし、フェイトもバルディッシュも悠二を信用している。

といっても、悠二の魔改造は改悪ではないから・・・と、その点は安心していいだろう。

（——帰ってきたらバルディッシュがロストロギア並みになっちゃうんだろうな。）

フェイトの心配事——それはさきほど言ったように悠二の魔改造品がすべてロストロギアなみになってしまうことだけだった。

しかし、相手はフェイトのデバイス——さすがの悠二も

（フッフ、どんな規格外にしようかな）。ま、どのみちロストロギア並みにはするのは確定だよな。）

自重していなかった。すでにフェイトたちも知っているが、我等が主人公 水無月悠二の辞書に『自重』の二文字は存在しないのだった。すでに悠二はフェイトと雑談しながらも並列思考マルチタスクによって脳内にバルディッシュ魔改造計画が絶賛進行している。

（そうだ……ついだから……）

悠二の頭にいやな閃きが光る。

「なあ、さくら。」

「うにゅ？」

お昼の準備に取り掛かろうとしていたさくらが猫のような声を上げて振り向く。

「ルナ、すこし調整まかいぞうしたいから貸してくれねえか？」

「悠くん、絶対魔改造する気でしょ？」

さくらもフェイト同様にジト眼でにらんでくる。

「まあね〜」

しかし、すでに開き直りつつある悠二には無駄だった。その様子に苦笑半分 呆れ半分といった様子で腰に手を当てると観念したように

「はあー。すこしは自重してね？」

「だが断る!!!」

「ちょ、断っちゃダメでしょ！」

フェイトの突っ込みなど何のその、悠二はさくらから待機状態である青い宝石のあしらわれたネックレスを受け取るとそれをシャルテイエの格納領域に入れる。

「じゃあ、僕はちよつと工房に籠るわ〜」

「夕飯には出てきてよ？」

「ああ」

いまにもスキップでもしだしそんな雰囲気ですくらのに答えるとそのまま、工房へとつながる隠し階段を歩いていった。

「まったく、悠くんにも困ったもんだね」

「そうですね。でも、なんかおにいちゃんらしいですよ」

「そうだね」と答え、さくらも笑う。でも、さくらはすこし心配だった。悠二は優しいことはさくらも知ってる。だが、時々不安になることがあった。

彼がひとりで居る時、そして時折音姫たちをみる表情が妙に・・・なにか、悲しみすら感じたことを。

それを彼が必死に見せまいと隠していることも。

(・・・悠くん、僕は・・・待っているからね。君が、話してくれるまで)

だから、さくらは待っている。いつか、悠二はじぶんの意志で自分の闇を話してくれるまで。

「さくらさん・・・？」

「ん、どうしたの？フェイトちゃん？」

「ううん、なんでもないですよ。・・・そういえば、義之たちはどこに言ったかな？」

フェイトはさくらから、なにかを感じたが話題をそらす。なにか、触ってはいけない気がしたから。

「ううん、きっとどこかに遊びに行っているんじゃないかな？」

「そうですか。じゃあ、私達はお菓子でも食べてお兄ちゃんが出てくるのを待ちましょうか」

「賛成〜♪」

そう言って、フェイトとさくらは居間へと移動したのだった。

*

「一体、ここはどこなんだろっ」

「さあ、私も知らないよ。この家にこんなところがあったなんて」

「私もですよ」

一方、音姫たち三人は薄暗い階段を下りていた。

そのころさくらとフェイトは義之たちがどこかに遊びに行っていた・

・とおもっているが、実は違っていた。事実、三人は芳乃家を出ていない。

ことの発端は義之が見慣れない階段が隠してあるのを見つけてしまったためだ。それに義之は好奇心を書き立てられ、音姫や由夢は反対しながらもやっぱり興味はあったみたいで、入ったのだが案の定、迷ってしまっていたのだ。

そんな時

「・・・足音？」

上の方から、たしかに足音が聞こえてくるのを義之が察知した。

「近づいてきますね」

「うん、だれかな？」

そして、次第にその足音は大きくなっていく。どうやら、近づいて着ているようだ。

（さくらさんかな？）

とりあえず、家主の少女を思い浮かべる義之。

「とりあえず、身を隠そう」

「うん（はい）」

ふと、義之はそう思ったが、三人に言っ取りあえず、物陰に姿を隠しそこから様子をみる。やがて、足音は間近に来てその人物が姿を現す。

『っ！？』

その人物に一同は驚愕する。その人物とは彼らの良く知る人物・・・水無月悠二だったのだから。

「ゆ、悠二っ！？」

「なんで、弟くんが・・・」

驚愕する三人をよそに悠二はどこか嬉しそうに階段を下りていく。そして、行き止まりのところで止まるとなにかを壁のくぼみに埋め込む。

ウイン パッ

「えっ？！」

「ここって、いったいなんなんだよ・・・」

「兄さん！？」

その瞬間、暗かった階段などは明るく照らされ、悠二の立っていたところには自動ドアが見えていた。悠二はしばらく、指紋認証や網

膜認証やらをしているとドアが開き、中に入ってしまった。

しかし、なぜだが開けられたドアは閉まることはない。

そこにはなにやら大排気量バイクやら緑色の粒子をだすコーン状の機械や、青色の機械狸やらなにからやばそうなものがいくつも置かれていた。悠二はその中心にある機械に黄色と青の宝石の付いたネックレスの二つをセットすると、手元のパソコンでなにやら弄りだす。

「ふむ・・まずOSをアップロードして・・あれをこして・・」

なにやら、義之たちの理解できない単語を並べ立てながら、キーを打っていく。

そんな時

チャラン

義之のポケットに入っていた小銭が落っこちてしまう。

「あっ!？」

「ん？」

さすがにその高い音には悠二も気付いたのか、パソコンから手を離し義之たちの法を見る。

しばらく、周りに眼をめぐらすが無も見つからないのか、腕を組んで考えるような仕草をしていると

「シャル」

『はい』

どこからか、声がしてなにかの光が走る。そうすること四半秒、悠二は呆れたようにため息を大きくつくと、義之達の隠れているところを向き

「はあ、なんでお前たちがここにいるんだ？義之、音姉、由夢」

そう、呆れたようにつぶやくのだった。

どうやら、さきほどの光はセンサーの類だったのか・・・と独り義之は納得しているのだった

*

義之 side

——芳乃家 居間——

あれから、オレたちはあそこ・・・悠二の工房をあとにしてさくらさんたちのところへと連れて行かれた。なにやら、悠二がぼそぼそと告げると、さくらさんは悲しそうな表情をし、

「——じゃあ、視ちゃったんだね」

そうつぶやいた。

「安心しろ、さくら。まだなにを話していないから」

「うん・・・」

さっきから二人・・・いや、フェイトを入れて三人の様子が可笑しい。さくらさんはさっきから暗くうつむいて、迷っている感じでフェイトと悠二もなにかを悩んでいるように悠二は壁に背を預け、目を閉じていて、フェイトは心配そうにさくらを見ている。

この三人が俺たちになにかを隠しているということはいくら俺でもわかった。

すると

「——さくらさん、いったい、俺たちが見た悠二の工房って、なんなんですか？」

思い切って、聞いてみることにした。

「っ!」

「——やはり、知る運命・・・ということか」

「・・・お兄ちゃん？」

悠二は意味深なことというと、不意に自分の指にはまっている蒼い水晶の飾られた豪華な指輪を抜き去ると。

「シャル」

そういつて、投げた。当然、オレや音姉たちはそれが当然のように

地面に落ちて、音を立てることを予想した・・・しかし

『はい』

その予想はみごとに覆された。優しげな男性の声が響くと、投げられ空中を浮いていた指輪が光る。

「うわっ!？」 「えっ!？」 「うそ!！」

光がやむと、そこには灰色の変わった服を着た銀色の青年が立っていた。

「紹介しよう。こいつが僕のデバイス『シャルティエ』だ」

「どうも、始めまして。みなさん」

そついつて、人のよさそうな微笑を浮かべるシャルティエさん。

「———そんなじゃ、離すとしますか・・・魔法のことを・・・ね」

『っ—』

魔法・・・その単語にオレと音姉が激しく反応する。

由夢もそこまでではないにしろ、反応する。

それから、悠二は語りだした。俺達の知らない魔法について。

悠二たちのいう魔法とは、超科学により産物らしい。発達した科学は魔法に近い・・・どっかの本で読んだとおりだった。

それは、人体に先天的に存在する『リンカーコア』と呼ばれる器官

から魔力を汲み上げ、デバイスと呼ばれる機器を用いて、魔法としての術式を与えるものらしい。

俺たちがみた工房は悠二が作ったそのデバイスの研究工房だったみたいだ。

「——三人とも、わかったな？」

「うん」「ああ」「はい」

悠二の説明は言葉だけではなく、指輪・・・待機状態に戻ったシャルティエさんが投影した映像も含んでいて、わかりやすかった。

「——それで、なんでいままでそのことを俺たちを隠していたんだ？」

「・・・それは「危険・・・だからだよ」・・・さくら・・・」

そこで、ようやくさくらさんが口を開いた。

「どうしてですか？非殺傷設定というものがあるのでしょうか？」

たしかにそうだ。説明によると、デバイスには肉体的なダメージではなく、魔力への直接ダメージを与える非殺傷設定というものがあるはずだ。なら・・・

「それでも、危険なのは変わらない。だって、そうでしょ？ひよつとしたら、それによるショック死だってありえるんだから」

そついうさくらさんの表情はいままでの彼女のとは考えられないく

らいに冷たい表情だった。

「・・・それだけじゃない。トレースオン 投影開始」

悠二がなにかの呪文を唱えた瞬間

ガゴン ガゴン

っ!?

突然、なにか鈍い音が聞こえた気がする。
そんなときが聞こえたと思った瞬間、

ザシュ ザシュ ザシュ

『っ!?!?』

突然、俺達の足元の数ミリのところに剣が突き刺さる。

『・・・』

冷や汗を流す俺たちを尻目に悠二は腕を組みながら、俺たちに選択を迫る。

「——それを知ったお前たちには二つの選択肢がある」

「二つの選択肢？」

「うん、今聞いたこと さっき見たこと全てを忘れていままでの生活に戻ることに。そして、この世界へと足を踏み入れること。僕とし

ても、当然さくらたち忘れてくれたほうが良い。でも・・・僕は君たちの選択を尊重する。」

さくらさんも、うつむいているけど、オレが視線を向けると小さくうなずいて見せた。

『・・・・・・・・』

——しばらく、場は沈黙に支配される。

おそらく、悠二やさくらさんは本当に俺達のことを心配して、魔法のことを隠していてくれたんだろう。

でも・・・いや、だからこそ

「・・・オレは忘れるなんてできない。もし、これで忘れてもさくらさんたちは戦い続けるんだろう?」

「必要があればな」

いつもとは違い、どこか氷のような雰囲気フレイムの悠二が答える。

「なら、俺も戦う。」

家族が戦っているのに、それを黙って見過ごせるわけがない。

「私も」

「私も・・・戦います」

俺の発言に触発され、音姉たちも魔法にかかわることを選んだ。

「……義之君」

「……なら」

さくらさんは苦虫を噛み潰したような表情を、そして悠二はどこか悲しそうな表情で壁から背を離すと

「……投影開始……全工程完了 全投影待機」
トレス オン ロールアウト バレットクリア

ブオン ブオン ブオン

『っ!?!?』

再び、悠二が呪文のようなものを唱えると、悠二を囲むように20本の剣が浮かぶ。その刃は俺達の方へ向いている。

「悠二!?!?」

「……さきほども言ったが、“魔法”はお前たちの考えているほど優しいものではない。現にこの剣群たちを放てば、お前たちはいとも簡単に命を落としてしまうのだから。この状況でも、お前はさつきと同じようなことが言えるか?」

「……それでも、オレはみんなと一緒に居たいんだ」

「……合格だ」

「え?」

そこで、いままで俺たちに刃を向けていた剣は消え、そこには笑顔の悠二がいた。あまりの変化に全員が同じような声を出してしまう。

「——合格だといったんだ。ようこそ、魔法の世界へ」

「っ！ああ！！」

「だが、コレだけは覚えておけ？力は使うものによって正義にも悪にもなる。ソレを決めるのは・・・お前らだ。他人に自分の正義を求めるな」

それだけいうと、悠二は居間を出ていつてしまった。

「——その二日後には俺達のデバイスも完成し、魔法の訓練・・・となったわけだが、俺たちはそこで地獄を見た。」

二十話 覚悟（後書き）

バッテリーゼフレア・・・元ネタはレイヴのダークブリングです。

悠二がデバイスに組み込んだのはあれです。わかりますよね？

次回は、悠二の救出劇ww

二十一話 海鳴へ

二十一話 海鳴へ（前書き）

なにかおかしいところがあったら教えてくください

二十一話 海鳴へ

義之や音姫に魔法のことがばれてから予定の一ヶ月がたった。結果から言えば大成功。

音姫は以外にもクロスレンジ アウトレンジともに万能な才能を見せ、由夢はクロスレンジはダメだが、それを補ってあまりあるほどにアウトレンジに特化していた。

そして、最も驚いたのは義之だ。

「^{トレース}投影・・・^{オン}開始！！」

悠二とおなじ呪文とともに義之の手には禍々しい雰囲気纏った朱槍が握られる。

（まだまだだな。これじゃあ、数合切り結んだだけで・・・いや、一合に耐えられるかすら危ういな）

自分の投影品の骨子の想定の甘さに嘆息する義之。

そうなのだ。義之にも魔術回路が存在しているのだ。

理由はおそらく枯れない桜だろうと、悠二は考えていた。“アレ”にも擬似的とはいえ、魔術回路が形成されていた。

それによって生まれた義之にも魔術回路が合ってもおかしくない。

しかも、何の因果か衛宮士郎にのみ許された大魔術 固有結界 ^{アンリ}無限の剣製をその身に宿して・・・だ。

それにはさすがの悠二も驚愕した。

『訓練あるのみだぞ。マスター』

「ああ、そうだな。アーチャー」

悠二の首に掛かったルビーのネックレス。そこから響く低い声。彼は義之のインテリジェンスデバイス『アーチャー』

人格は真正銘の錬鉄の英霊 エミヤシロウその人。わざわざそのためにサーヴァント召喚までしたのだ。ちなみに本人は思いがけず、抑止の輪から脱出できたことによるんでおり、時折デバイスを媒介に空気中の魔力で擬似的に肉体を作り、現界している。

悠二は感覚で投影を使いこなしているため、教えることにかんしては彼のほうが適任なのだ。

そのお陰で彼の実力もメキメキと伸びている。

ちなみに魔術回路の本数は108本。エミヤの実に4倍もの魔術回路をもっている。

「義之行くぞ、音姉たちが待っている」

義之が独り、自室で投影の訓練に汗を流していると、ノック無に入った悠二が時間を告げる。

「もうそんな時間か？」

『しかし悠二。あと五分あるはずだが？』

「音姉達・・・特にフェイトがな」

アーチャーの疑問にすこし呆れ気味に答える悠二。

『「納得」』

「だろ？」

その思わず義之たちも同意してしまう。女性陣・・・特にフェイトが早く行きたいとはしゃいでいるのだ。中学生にもなつて・・・といいたところだが、今回は仕方ないだろう。行くところがいくところだ。

「さて、行くぞ」

「ああ」

今日は三連休を利用した小さな小さな家族旅行。
行く場所はフェイトにとっては掛買いの無い友人の住む場所・・・
そう、海鳴市だ。

*

—— 港 ——

「やった突いたね」

「ああ」

家をでて二時間とすこし、一向は海鳴市へと到着していた。
すでにフェイトはなのは達に合えるとテンションは高い。

「で、これからどうするんだ？さくら？」

「うん、とりあえずみんなでわかれて見て回ろつと思っんだ」

「そっか、悪いけど僕はひとりで行動させてもらっつよ？」

「」「」「え〜〜〜〜！」「」「」

悠二の言葉に四人の少女が反対する。

「ダメだ。これは決定事項なんだから」

「・・・はあ、しょうがないか。・・・一緒じゃないのはみんな平等だし」

「うん・・・」

「そうですね・・・」

渋々といった感じだが、なんとか納得してくれたようだ。彼女たちとしては全員、平等に悠二といられないということでなんとか納得できたのだろう。

しかし、そんな心中を知らない悠二は

「じゃあ、なんかあつたら連絡してくれ」

と、さつさと歩いて行ってしまう。シャルティエも突いているので迷うことは無いだろうが……。

「じゃあ、僕たちも行こっか」

「はい」

「ああ」

さくらの声で悠二を欠いた一行も歩き出すのだった。

*

悠二 side

さくらたちと別れてから、僕はひとり海鳴市を気ままに散策している。

正直、すこしだけひとりになったんだ。

「やっぱり、たまには独りが良いよね」

『そうですね。たしかにさくらさん達と一緒に居るのも楽しいですけど……』

「なんか疲れるし……」

『それは坊ちゃんの自業自得です（ボソッ）』

この前、買い物にいったときは着せ替え人形みたいにされるし、
なにか奢らされるし・・・

それならまだいいが、腕を組んできたりしてまわりの視線がイタイタイ。

まったく・・・音姉もフェイトも由夢もさくらももうすこし自分の容姿を考えて行動してほしい・・・

じゃねえと・・・僕が勘違いしちまうからな

『坊ちゃん？』

「あ、いや、なんでもねえ。とりあえず商店街でもいくか？」

『そうですね。なにかおいしいお菓子でもあるといいですね』

「ああ」

実は僕は結構な甘党だね。一番好きなのは羊羹だ。

さて、なんかうまいものでも・・・ん？

『どうかしましたか？』

「話なさいよ!-!」

「やめてください!-!-!-!」

どこからか聞こえる特徴的な声の叫び

「・・・あ?」

ブルルルルル

それとすこしの時間差で通り過ぎていく黒塗りの車・・・怪しすぎ
だろ・・・

まさか、誘拐か？

なら、こんな白昼堂々とやるなよ・・・。

普通、誘拐は特別な理由ごんないしでもなければ実行されるのは夜つてのが定
石だろうが・・・

• までよ・・・相手だってそれくらいはわかってるはずだ。なら・・・

「・・・したくても出来ないのか」

なら、納得だな。となると・・・あの屋敷の娘か。

この海鳴市でひとときわ大きい洋館の娘だというのが妥当だな。あれ
ほどの屋敷だ、警戒は相当だろう。
なら、家の中より屋外のほうが実行しやすいわけだ。

『坊ちゃん！』

「シャル、追跡はできているな？」

『はい！車はここから北の港の倉庫外に向かっている模様です』

ウィン

ゲートオブバビロン
王の財宝から、義之や由夢のデバイスを作る片手間で作っておいたオリジナルの概念武装『七夜礼装』のトレンチコートを取り出し、着込む。

これはアーチャーの着ていた赤原礼装の投影品をもとに、僕の変革の能力で改良を加えたものを防弾 防刃仕様に加工した優れたものだ。
準備完了、さっさと救出しますか

トレス オン
「同調開始」

両足に強化の魔術をかけ、そこから飛び去ると、シャルの言っていた倉庫街へと走る。

——無事で居てくれよ

*

——倉庫——

「離しなさいよ！！！」

港周辺の倉庫街の一角にある倉庫。その鉄柱に金髪と紫色の髪の少女が捕まっていた。

「へへへ、まさか月村の餓鬼だけじゃなく、バニングスの餓鬼まで一緒に手に入るなんてな」

「ああ。俺たちはついてるぜ」

そして、彼女たちの前には黒い背広をきた男たちが下卑た笑いを浮かべている。

身代金目当ての誘拐だった。

「なあ、リーダー。」

「なんだ？」

「こいつ、どうするんですか？」

あきらかにその瞳には歪な欲望が光っている。

「なに、親から身代金を分捕ったあと、どこかの組織にでも売るさ。それがどうしたんだ？」

「いや、できな・・グへへへへ」

「そういえば、お前はそういう趣味だったな・・・そうだな、好きにしているぞ」

眼帯の男のことは聴いてさらに笑みを浮かべる男。

さすがに中学生にもなった二人にはそれだけでどんなことなのか容易に冊子がついた。

「近寄るんじゃないよ!!」

「アリサちゃん!!」

金髪の少女・・・アリサは精一杯抵抗するが、それは逆にデブの興味を引くだけ。

（ああ・・・私、こんな奴に犯されちゃんだ・・・）

二人を諦めにもた感情が支配した・・・そのとき

シュン

「ぐべっ!？」

なにかの空を切る音と一緒にデブは醜い悲鳴をあげ、悶絶した。そして、少女は後に知るがさきほどの軽い音は空気を切る音なんかじゃない、鋼鉄の壁を貫く音だったことを。

「これ・・・矢？」

「そ、そうみたいね・・・」

意識を失った男の近くにはまるで、剣を無理やり捻った、例えるならドリルのような形状をした矢が落ちていた。

どうやら、これが当たったらしい。鏃は潰してあるようで男は出欠はしていない。

「なにもんだ!?!」

男の一人が叫ぶ。すでに男たちの注意はこの矢を放った誰かに向いている。

「えっ？」

「・・・だれ？」

「君たちにそんな美少女は似合わない。早々に帰りたまえ」

（――綺麗）

さきほどまで閉じられていた倉庫の扉は開け放たれ、そこには黒いコートをはためかせる金髪の少女が立っていた。その場違いなほどに綺麗な姿に二人の少女はただ、見とれているのだった。

*

足を強化し、車を追っているとそれは港のはずれの倉庫に泊まっている。

様子見もかねて。すこしはなれた場所に屋上にのり、しばらく見ていると手足を縛られたさきほどの金髪の少女は連れ込まれていたのが見えた。

・・・やべえな。たしか、彼女も原作のキャラクターの一人だったはずだが・・・思い出せねえや。やっぱ、付け焼刃じゃきかねえな。

つと、そんなことを考えてみる暇はねえな。

トレスオン
「解析開始」

解析の魔術を走らせ、倉庫の扉の材質を調べると・・・鋼鉄と出る。まったく、面倒極まりないな。

やれやれ、鋼鉄じゃ生半可な矢は遠さねえぞ・

しゃあねえ、宝具を使いますか・

「やむ得ないか・・I am the born of my s
word （我が骨子は擦れ狂う）」

錬鉄の英雄の詩の一説を唱え、手に擦れくれたあたかもドリルのような形状をした剣を投影する。投影する際に、大幅にでもやり過ぎないように劣化させているがね
それで、貫くなら、この宝具は適切だ。

さらに投影した無駄なしの弓を^{フェルノイ}変革させて、作ったハンドガード付きの黒塗りの弓（アーチャーの弓）を投影すると、剣を当てる。この剣は性格には剣であったものだ。今はそう、ひとつの矢だ。

「・・・偽・螺旋剣？！！」
カランドボルグ

ブオン

魔力を込め、放つ。すると、それは空気どころか、空間すら貫き目標へと直進する。

ヒュン

まるで紙のように鋼鉄の扉を貫通する。この時、大体の貫通力をなくす。

これで当たった時は普通の矢ほどだろう。

まあ、すさまじく痛いだろうけどね・・・

気配がひとつ消えた・・・うん、命中したみたいだな。

『そもそも、あの程度で坊ちゃんがはずすとも思えませんか』

「ありがとう、シャル」

シャルの賛辞を受け取り、屋上をけり、扉に降り立つ。鍵はかかっていなかったので、開けると

「君たちにそんな美少女は似合わない。早々に帰りたまえ」

最終警告をおこなうのだった。

*

悠二の最終警告を受けた犯人たちは

「ハッ、だれかと思っただら餓鬼かよ。正義の味方きどりは早死にするぜ!!」

（危ない!!）

ドガッ

「ぐはッ!?!」

「・・・ジャック!？」

(えっ!?)

金髪の少女の隣、紫色の髪をした少女・・・月村すずかは信じられない光景を眼にした。

なぜなら、自分たちを誘拐した、鍛えられたと人目で分かる外見をした男を左胸へのパンチ（正確には掌底）一発で気絶させていたのだから

しかも、それを行ったのが、自分と同じくらいの黒いコートを着た少女（正確には少年だが・・・）だということだった。

「くそが!!」

(あっ!!)

男はそう吐き捨てると、懷に隠し持っていた銃を抜き去り、悠二に照準を向ける。

大して、悠二は静かに男を見据えるだけ

「逃げて!死んじゃうよ!!」

「逃げなさい!!銃よ!!」

すずかと隣の少女は叫ぶ。しかし、悠二は二人を安心させるように微笑む。

「大丈夫だよ」

「ハッ、死ねよ」

ダンドンダン

悠二がそう答えるのと同時に乾いた炸裂音が三つ、響く。

「ああ・・・」

彼は死んでしまう・・・そんな思いがずかを支配した。

しかし、彼はそのまるで鷹のような鋭い目でなにかをたしかに見据えていた。その眼に恐怖は無い。

「トレース オン
投影開始・・・」

徐になにか呪文のようなものを呟くと

ガキン ガキン ガキン

「嘘ッ！」

「えっ！？銃弾を弾いたの！？」

瞬間、彼の手には白と黒の剣が表れ、それでまるで弾丸が見えていくかのような無駄の無い動きで銃弾を弾き返す。

「銃弾を弾くだ！？・・・ぐはっ?!」

ドゴン

「二人」

(すごい・・・なんて早いんだろう)

悠二は一瞬で銃を持った男と距離を詰めると、両手を白と黒の剣・
・干将莫耶で気絶させる。
どうやら、刃は落としてあつたみたいだ。

「くそっ！？ こいつらがどうなってもいいのか!？」

(これ・・・黒鍵!?)

すずかは男が自分の首に押し当てているものを知っていた。黒鍵・
・夜の一族と敵対している組織のその尖兵たる存在の正式武装。
節理の概念武装。

「すずかを話さないよ!!!!」

アリサが叫ぶが、男は無視を決め込み、悠二の方に視線を向ける。

「ほらほら、その手に持った妙な剣を捨てやがれ。」

男の顔には明らかな勝利への確信があつた。しかし、どこかすずかは安心していた。

きっと、彼ならなんとかしてくれる・・・そんな、自分勝手だけでなくそんな確信がもてたから。

すると彼はにっこりと微笑んで

「大丈夫。君達は僕が助けるから、ただ目を閉じていて来れるかな

「？」

「っ！・・・うん」／／／／／／／／

「え、ええ」／／／／／／／／

すずかもアリサも真っ赤に成ってしまう。なぜなら、それだけ悠二の微笑がこんな殺伐とした空間に不釣り合いなほど・・・可愛かったから。

そして、再び眼を開けたら消えてしまいそうなくらい儚い笑顔だったから。

（（願うなら、眼が開いても彼がいますように））

そして、赤みが引くと彼に従い、眼を閉じた。二人とも、そんなことを考えながら。

*

悠二side

二人にできるだけ優しい微笑を向けると、二人の少女は悠二の言うとおり、眼を閉じてくれる。

よかった・・・これで、思う存分こいつらを倒せる。

「てめえ、きいてやが「黙れ」・・・ぎゃあああああああ！」

男のにらむ。それだけで男の体から黒い炎が発生し、男を焼く。彼女はずでに目を閉じた。

だからもう、僕は自重する必要もなければ気もない。

「ぎゃああ！？・・・なんだ？！・・・なにがおこったんだ？！・・・あちい、あちいよー！」

「ふん、貴様には過ぎた炎だよ」

苦しがる男を冷やかに見下す僕の瞳には赤い独特の紋様が浮かび上がっていた。魔眼 『万華鏡写輪眼』

そして、この黒焰はその左目に宿った瞳術 天照だ

天照によって発生させられた黒焰は僕が消えろと念じるか、対象を焼き尽くすまで消えることはない。

さすがに殺すのはまずいので、死ぬ一歩手前あたりで消火する。

「ひっ？！・・・化け物！！！！」

「・・・絶望を送ろう」

ジャキン

同じく万華鏡写輪眼の右目に宿る瞳術 月読を男にかける。

月読は対象を 時間 空間 質量その他全てを支配する精神空間に引きずり込む。

「——吾は面影糸を巣と張る蜘蛛・・・ようこそ、我がすばらしき惨殺空間へ」

「な、なんだ！？・なにが起こった！！！」

男は気付くと暗闇のなかに一人立っていた。そんななか、僕の声が全周囲から響く。

「さあ、どんな殺され方をしたい？」

「ひひひひひひ！！！」

再び響く声。ソレと同時に男を囲むように現れる黒ずくめの集団。全員、黒い骸骨のような仮面を被り、手にはダークと呼ばれる投擲用のナイフと刃渡りの短い刀。僕がイメージしたのはFateの真アサシン ハサン・サッバーハ。

「ククク、さあ開演だ」

グサグサグサグサグサ

「ぎゃああああああああ！！！」

無数のハサンたちがいつせいにダークを投げはなった。それらすべては男の体は貫き、致命傷を与える。しかし

「い、生きてるのか！？」

男が己の体を見直すと傷一つなかった。しかし、さきほどの貫かれた痛みの残滓はしっかりと残っていた。それがさらに男を混乱させる。

この世界は僕の支配化・・・悪いが、死なせるほど僕は優しくない。

「演目はひとつ。貴様の24時間の惨殺劇場、さあ観客はいないが・
・・せめて良い声で鳴いてくれよ?」

僕その一言でこれからわが身にかかることを男は察したのか、どんな顔が青ざめていく。逃げようと必死に体を動かそうとするが、まるでなにかに固定されているかのようにまるで動く気配すらない。

ジ
リ
ツ

「ひっ！！」

そんな男の事情など知らず、ハサンたちは短刀を構え、歩み寄る。

グサッグサッグサッグサッグサッグサッ

「やめぎゃあああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああ！！！」

男の絶叫が響き渡る。

「・・・まあ、良く持ったほうか？」

「あへ……アへへへへ」

さきほど、説明した月読による精神空間に引きずりこまれ、体を切り刻まれる激痛を24時間絶え間なく与え続けられる幻覚を見せられた男はあつと言つ間に発狂する。

「我に触れえぬ（メリ・メ・タンゲレ）」

その男をマグダラの聖骸布で巻き取ると、そこらへんに投げ捨てる。
こんな醜悪な存在は二人には見せられないからね

「終わったよ、お二人さん」

そうして、二人を誘拐したおろかな連中を片付けると、二人に声をかける。さて、どういつてさくらたちに言い訳しようか？

S i d e o u t

*

すずか s i d e

「終わったよ、お二人さん」

彼の声が聞こえ、ゆつくりと私たちは眼を開く。

「「えっ!?!」」

すると、そこには私たちを誘拐し、囲んでいた男が気絶した姿・・・
そして、なにやら赤い布でぐるぐる巻きにされ芋虫のようになって
しまっている存在がひとつあるだけだった。

——まさか、これを一人でやったの？

「たすかったのよね？」

「うん」

アリスちゃんの疑問に答えると、不意に彼は真剣な表情で

「そうだな。気をつけろよ？ふたりとも可愛いんだからさ」

「うつ・・」／／／／／／／

「か、可愛い・・・」／／／／／／／

そんな、性質の悪い難破師のようなことを言ったのだった。でも、私達は赤くなってしまうていた。おそらく、彼は冗談やお世辞ではなく、本気で私たちのことをそう思っているし、心配しているんだろう。

でも、もしそうだとしたら、彼って天然の・・・

キキィ

私が、そんなことを考えていると車が急停止する音がする。

「どうやら、お迎えが来たようだぞ？」

「「えっ？」」

彼が指差した先には見慣れた車。うちの車だ。

———ということは

「すずか！！！！！」

「お姉ちゃん！？」

そして、すさまじい速度で走ってくるお姉ちゃんの月村忍。

「お嬢様!!」

「鮫島!!」

アリサちゃんのところの鮫島さんも着てくれたみたいだった。それに・・・あ、恭也さんまで来てる。よかった・・・

でも、ふと助けてくれた彼女のほうをみるとどこか寂しそうな表情で私の体に怪我がないか障っているおねえちゃんや鮫島さんたちを見ていた。

私には、その表情がすごく印象的にみえた、なぜなら・・・広い世界で、たった一人、そんな感じの孤独を感じさせるような青い瞳をしていたから・・・

*

忍side

私が、妹のすずかが誘拐されたと聞いたのは数十分ほど前、ちょうど家に遊びにきていた恋人の恭也を捕まえ、現場へと急行した。しかし、突いてみるとそこはすでに解決していた

妹と同じとくぐらいの年で金髪をポニーテールにくくった少女によって

彼女の両手には黒と白の剣が握られている。刃渡りは小太刀よりすこし長い程度だろうか？

それぞれ対極図が描かれ白いほうには水波模様が、黒いほうには亀裂模様が描かれている剣。

私は、それを見たことはないけれど、文献で知っていた。

「干将と・・・莫耶？」

自分の知識のなかから、その外見を持つ剣を推測してみる。でも、ありえないわね。だって、妹と同じような年の少女がそんなものを持っているはずはないし、
なにより、本物の干将と莫耶はすでに失われているんだからね。

そんなことよりも、すずかのほうが心配だ。

「すずか、怪我は無い？」

「う、うん。あの子が助けてくれたから大丈夫」

そういつて、すずかはさきほどからどこか悲しげな瞳で私たちを見ている少女を見る。改めてみると、外見こそすずかたちと同じだが、まとっている空気はまったく違った。

大人びている・・・いや、そうではない。

なんともいえない寂しさのようなものをまとっている気がした。

「そう・・・」

怯えていると思い、急いで妹のすずかに駆け寄ったが、予想とは異

なり、すずかは怯えてすら居なかった。
それに、好意にちかい感情で少女を見ている。

「——要らぬおせっかいだったかな？」

不意に少女は口を開いた。外見によくあつたよく通る高い声。

「ううん、ありがとう。助けてくれて」

それにすずかは微笑で返す。

「いやいや、人として当たり前のことをしたただけだ」

そう言つて、彼女は着ている外套の下に持っている双剣を潜り込ませる。

形状からして、どうやら鞘に納めたようね……。

「あの、宜しければお礼がしたいのでうちのほうまでいらっしゃいませんか？」

私はそう提案する。不信感もあつたが、妙に氣になつて仕方がないのだ。なぜ、あのような悲しい瞳と雰囲気をしているのか？

何者なのか？そして、なぜ妹とそう変わらないその年でそこまでの雰囲気纏えるのか

ひよつとしたら、彼女は……

最悪の想像を振り切つて、彼女の答えを待つ。すると

「——礼を貰うほどのことはしていないつもりだ」

彼女の返答は予想外だった。しかし、それではすこし困ったことになる。

「しかし、それでは」

なんとか連れて行こうと食い下がる。

「だがまあ、たまには良いのかもしれないな」

「えっ？」

不意に少女は折れ、どこかさびしげな微笑をうかべ視線を天井へと流す。

不覚にも、私は戸惑ってしまった。

なぜなら、彼女の表情・・・それは悲痛なほど悲しい表情だったから

二十一話 海鳴へ（後書き）

アリサ　　すずかフラグ建築か？

さて、次回は月村家のお話ですね。たぶん、OHANASSIにはならないと思います。

二十二話 魔術と夜の一族。

二十二話 魔術と夜の一族

海鳴市へと到着しやつとのこととで単独行動の許可を得るが、そこで誘拐現場を目撃してしまいそれを救出した悠二は助けた少女 月村つきむらすずかの姉 月村忍つきむらのぶに礼がしたいということで屋敷へと招かれた。

海鳴市の中心よりすこしはなれた位置にある大きな洋館・・・そこが月村邸らしい。

そこにつくと、コートと干将と莫耶の収まった鞘（怪しまれないように咄嗟に投影した）を預け、客間に通されていた。

しかし、あいかわらず悠二の瞳にある警戒は止まない。

（やれやれ・・・）

『監視されていますね』

（ああ）

シャルティエの言葉に内心、嘆息する悠二。そう、監視されているのだ。監視カメラは巧妙にカモフラージュされているし、死角からの撮影だが“その手”のことはおそらく“この世界”で悠二の右にでるものなど居ないだろう。

（でもまあ、当面はスルーだな）

『どうしてですか？』

（こつちが動くにしても月村邸はあつちの本拠地だ。うかつに迂闊に動いて不利になるのは僕のほうだからな）

そついうと、出された紅茶に手をかける悠二だった。

――その頃

「気付かれているわね」

「ああ」

月村邸の中の一室。そこにある複数のモニターには風景を肴に紅茶を飲む悠二が移っていた。

しかし、ときおり警戒するようにカメラ目線になることがある。

「カモフラージュもしてあるし、あのソファから見たら死角になるところから撮影しているのに、入ってももの数分で気付くなんてほんとにありえるの？」

「・・・ありえない話じゃない。だが・・・」

「どうしたの？」

「父さんによると、よほどの腕利きに暗殺者でなくては出来ないらしい・・・あの年ではありえない」

たしかにと忍も納得する。モニターに移っているのは見た目は彼女の妹と同じ年ほどの少女。それで、腕利きの暗殺者・・・など、悪

い冗談でしかない。

それに、さきほど着ていた赤い線の入った黒いトレンチコートはすでに屋敷に入るときに拝借している。理由はふと触れた時にすこし嫌な感じがしたためだった。

その理由は現在検査中だが・・・

ボタン

そのとき、扉がひらきひとりのメイドが姿を現す。

「お嬢様、検査結果ができました」

「どう?」

「はい、検査結果としては概念武装と判定。材質はマルティーンの聖骸布と酷似していますが・・・」

「ちょっとまって!! なんであんな子供が概念武装なんて持っているのよ・・・それに、マルティーンの聖骸布ですって? まさか、“教会”の回し者?」

“聖骸布”と聞いて女性の頭に一気に血が上る。

「そうだとしたら、態々すずかを助けるか? それに、“奴ら”が態々コート一着分もの聖骸布を提供するはずが無い」

隣の黒髪の青年・・・高町恭也の意見に頭を冷やしながらうなづく。冷静に考えたらそれもそうだ。マルティーンの聖骸布とは忍の言うところの“教会”の連中にとってはまさに自身の存在を肯定してく

れているほどのもの。

こんな軽々に持ち出しが許可されるわけが無い。

「お嬢様、それにその聖骸布には独自の改良が施されているようなのです」

「改良ですって？」

メイドのことは思わず疑ってしまう忍。それもそうだ。儀式や積み重ねた歴史、語り継がれる伝承などにより付与された概念（すなわち魂魄の重み）に依って特定の能力を発揮する強力な武装のことだ。それを改良できるほどの技能は？と忍は自分に問いかける。

「はい。正確には聖骸布の喪っている“外界からの影響の遮断”という概念は強化された形跡があります」

「・・・」

メイドからの報告を受け、映像にうつつ悠二をまじまじと見つける。そうすること四半秒・・・

「まさか・・・彼女・・・魔術師なのかしらね・・・」

そう結論付けた。

「そんなバカな。すでに魔術師はほぼ教会の連中によって駆逐されている。いまは魔術を使う連中など、教会の埋葬機関のほんの数人ぐらいしか存在しない」

彼の批判も最もだということも彼女は分かっている。

「そう、それはわかっている。でも・・・」

しかし、それ以外の選択肢はあるだろうか？そう自問すると、答えはない。

*

悠二 side

カチャ バタン

ちょうど、紅茶を飲み終えた頃、客間の扉が開きさきほどの2人が姿を現した。金髪の少女や黒髪の男性が居ない。

いや、男性は控えているな。

となると・・・そっちの方面のことも考えている・・・ということか。とつさに解析の魔術を走らせ、隣を部屋に隠されているが、気配がするのを感じた。

まったく、下手に隠すとばれたときに余計に警戒されるとは、考えないのかね・・・

にしても、疑われてはいるようだな・・・

「お待たせしました。改めて、妹のすずかを助けていただき、ありがとうございます。私は姉の月村忍といいます」

「月村すずかです。助けていただいてあるがとつこざいます」

忍に続いてすずかも挨拶する。

「僕は水無月悠二です、ここには旅行で着ました」

「悠二？・・・男の子みたいな名前なんですね」

『ブッ！』

男の名前みたい・・・だと！？
シャルも噴出すなよ・・・

『（まあ、男の娘には違いありませんけど・・・）』

「あの、なにか勘違いされているようですが、僕は男です」

「「えっ！？」」

「・・・そんなに驚くことですか？」

さくらの時もそうだったが、改めて自分が女顔であることを（強制的に）認識させられたよ・・・はあ。

「ゴホン、それは置いて置きましょう。失礼ですが、あれほどの武術どこで習ったんですか？」

痛いところを突いてきたな・・・

正直、僕のあの技術は武術などと言う高尚なものではない。ただ、人を殺す・・・という一点のみに集約した戦場での技術だ。

多少、八極拳は師匠から習っていたが、いまはただの人体破壊術でしかない……

「すこし、八極拳を習っていたんですよ。それです」

「では、あの“剣”も？」

「はい、師匠から護身用にと貰いました」

魔術で出しました……なんて、口が裂けてもいえないな……

「そうですか、それではすこし質問を変えましょう。あなたはなにものですか？」

そこで忍さんの警戒心が急激に強くなる。やはり、コートのことや干将莫耶のことも調べられていたな。

この様子だと

「——なにものとは？」

「惚けても無駄です。貴方の着ていたあのコートが聖骸布で織られていたことはすでに解析してわかっています。もしかしたら、貴方は教会の「お姉ちゃん!」……すずか？」

「それは違うよ、お姉ちゃん。」。

教会?……キリスト教とかのアレか?

僕の知りえる限りで教会……その単語から連想させられるもの……

・宗教、キリスト教・・・そんなもんだ。
待てよ、ここはアニメに酷似した平行世界だ。常識の範囲ではダメだ。

アニメの知識やなにやらも検索の範囲に入れる。

教会・・・埋葬機関・・・聖堂教会！

シャル、さっきの僕が潰した男の映像・・・視神経に映せるか！？

『はい、出来ますが・・・どうしたんですか？』

どうも、嫌な予感がするんだよ

ウイン

僕の視界に直接モニターが展開し、そこには僕の視界での映像が映りだす。

一人・・・二人・・・っ！止める！

『はい』

こいつか・・・

映像にはすずかに刃物を突きつけた男、性格にはその男が持っている十字架に似た剣だ・・・

っち、嫌な予感ほど良く当たるってな。まさか、この世界に存在していたなんてな

『これは・・・黒鍵のようですね』

ああ、間違いない

そこには黒いカソックスを身に纏い、一本の黒鍵らしき剣をすずかの首に当てる男。黒鍵とは僕も良く遣う概念武装とある組織の代行者と呼ばれる存在の正式武装。

「どういうこと？すずか？」

「お姉ちゃん、彼の倒した男の服装や近くに落ちていたものを良く思い出してみて」

「・・・っ!」

思い当たったようで、忍さんの顔が驚愕に染まっていく。

「そう、私の近くに丸焦げになっていた男・・・そいつの服装はカソックス、そしてその近くには黒鍵が落ちていた。ということは・・・」

「すずかをさらったのが・・・聖堂教会だったのね・・・」

「うん、だから彼は違うよ」

凄いな・・・

内心、舌を巻く。誘拐されて、あそこまで冷静にものを見れるなんて普通ではないことだ。

「———そうとも言い切れないわ。なぜなら、彼は聖骸布を持っていたんですから」

「それはっ！」

さすがに、そこまで彼女ではわからないだろう。

聖堂教会があるってことは、魔術協会だってあるだろうし、まあある程度は大丈夫か

「そこは僕が説明しよう。トレースオン 投影開始」

もう一着、七夜礼装を投影する。

「っ！」

「たしかに、これはマルティーンの聖骸布・・・正確にはそのレプリカを改良した七夜礼装という魔術礼装です。とつても、僕オリジナルですけどね」

「レプリカ？・・・それに、貴方はやっぱり・・・」

「ええ。お察しのとおり、僕は魔術師・・・いえ、魔術使いですね」

「魔術使い？」

「ええ。魔術使いです」

僕は魔術師じゃない。

魔術師とは魔術を研究し、最終的には根源への到着を目的とするもの達。

しかし、僕は根源など興味は無い。というか、むしろもう根源に到着しているってでもいいかもしれない・・・。

まあ、それはさておきなんで僕が魔術使いとなる理由。それは簡単だ。魔術をどう見ているか？

その違いだ。僕にとっては魔術は銃や剣と同じ、目的を遂げるための道具でしかないんだからね

「それでは、私達のことはどこまで知っているのかしら？」

「良くは知りません。さきほど、解析させてもらっただけで・・・ね」

「結果は・・・聞くまでもありませんね」

「ええ」

解析して出たのは吸血種・・・というだけ。

「では、貴方の誠意に答え、私たちもお話しましょう。私たち、『夜の一族』のことを」

そして、忍さんはかたりだした。

夜の一族とはかつて高い文明を保持していたとされる吸血種の一族のこと。

高い身体能力 明晰な頭脳 魅惑的な容姿をもつが・・・そのかわりに体内の栄養製造機能に問題があり、定期的に人間の血液・・・正確にはそこから鉄分を吸収しなければ、貧血などの症状を起してしまうとのこと。

それに加え、不老長寿のため一族は外界の人間との接触を好まず真

実を知った人間は契約を結ぶ・もしくは記憶の消去。最悪の場合
は闇に葬られるということなどを話された。

「理解していただけましたか？」

「ああ、それでなんで魔術師がいるだけでそんなに驚いたんだ？ 聖
堂教会そうちを知っているなら魔術協会まじゅくけいだってしってるだろ？」

ふと、型月のことを思い出し、疑問に思った。

「魔術協会のことですか？ そちらはすでに聖堂協会によって壊滅さ
せられています」

「っ！ それは本当か！？」

「ええ」

忍のもたらした情報に驚愕する。

それから、彼女によると“この世界”の魔術師は元々、魔術回路の
衰退で相当まで力を失っていたらしい。そこを突いた聖堂教会によ
って全滅させられたらしい。

さすがに遠坂やアインツベルンといった有名なところは抵抗したら
しいが、当主は殺害。その子供は監視下に置かれているようだ。

「酷い現状だな」

「ええ、私の協力者の魔術師がいたのだけれど彼から得た情報・・・
それに、あとは数個の魔術兵装だけ」

たしかに、いまの現状としては無害・・・とはいえ、『夜の一族』

という吸血種の彼女たちには不利だろうね・・・。

魔術協会・・・という危険な存在がいなくなっただけ、聖堂教会は本格的に動き出す。

「なるほど・・・だから、魔術の使える僕を警戒したのか、そして僕を教会だと疑ったのもうなずける」

「その説は申し訳ありません。貴方を代行人のひとりかと・・・」

「なるほど」

すでにさきほどまでであった剣呑な空気は消え去り、包囲していたものは消え去っていた。

——やれやれ、やっとわかってくれのか

「——では、改めてなにかお礼がしたいのですが・・・」

「なら、すこし銃器の調達を頼めるか？」

思い出したように呟く悠二。

「銃？」

「ああ、魔術礼装用にな。出来るか？」

「はい、それぐらいでしたらお安い御用です」

そして、僕は懷からだすようにして王の財宝から紙を折りたたんだ物を取り出す。それを忍さんに手渡すと

「ここに集めて欲しい銃器 弾薬、そして僕個人の連絡先が書いてある。とりあえず、用意が出来たら連絡してくれ」

「わかりました。では、一週間後に」

「ああ、頼む」

ふう、これでコンテNDERやM5000なんかの銃は手に入ったな。どうにも、この体じゃあつちにいつても銃は買えんからな

精神年齢はともかく、肉体年齢はもう三十路を超えた僕だけれど、肉体はまだ成人していないからね。

それに銃も、前世でも仕事道具のひとつとして愛用してきた。

まあ、イタクアとクトウグアでも良いんだが如何せん、あつちだと強すぎるくらいがあるからな……。必要以上の火力は要らないし

当然、ゲイトオブバビロン王の財宝のなかにはイタクアとクトウグアという銃も存在するにはするが、強すぎるんだ
銃の形態を取っているが、その二つは曲がりなりにも人間を遥かに凌駕する旧支配者なのだから、まあ仕方ないのだけれど。

——話がずれたな。とりあえず、銃器調達の目処はついた。

「あのすこし良いかな？」

「ん・・」

「すずか？」

そんなときだった。さきほどまで押し黙っていたさすががようやく口を開いたのは。

「君から視たら、私達ってどう見えるのかな？やっぱり、ばけm「
黙れ」・・・っ！」

さすがの自分を化け物・・・そういう発言は許せなかった。
自分は化け物？ふざけるのも大概にしろ。

「お前は化け物なんかじゃない。誰がなんと言つと、お前は化け物
なんかじゃない」

「そんなことないよ、私はみんなとは違って、血を飲まなきゃ貧血
になっちゃうし体だつて強いし「だからなんだ？」・・・え？」

「じゃあ、「オレ」はなんだ？大の男を気絶させ、銃弾を弾き返す
“オレ”は」

お前が化け物だとしたら、「オレ」のほうがよっぽど化け物だ。

「なあ、月村。君は人を無意味に襲つたりするか？」

「そんなことしないよ！！」なら、お前は人間だ」・・・え？」

「化け物つてのはな？無意味に人を傷つける存在のことを言つんだ。
だから、お前は人間だ、人間で良いんだ」

まあ、僕の定義だけどね。

「ほんとに・・・いいの？」

うつむいて言うすずかをみて、思う。

きつと、この少女はことあるごとに自分が化け物なんだって、自分のことを信じてられなかったんだろう

それは『夜の一族』という閉鎖的な存在が生んだ弊害かもしれない。

だが、僕にとってすずかは一人のか弱い少女だった。

だって・・・いまにも、なきそうなんだから

とある半人半魔のデビルハンターは言った。涙を流せるのは人間の特権だ・・・と

ポフッ

「えっ？」

「ああ、たとえば世界が認めなかつたが、僕は認めてやる。お前、月村すずかは人間だ。この僕が認めてやる」

「っ!？」

「だから、そんなに悲しい顔するなよな？お前は笑っていたほうが可愛いと思うぞ？」

「か、可愛いなんて!!!／／／／／／／／／／」

「ククッ、やっぱりな」

顔を上げ、真っ赤になって悠二の言葉を否定するが、それが余計予

想を的中させる。

やっぱり、笑顔が一番だ。うん！

「あらあら、今夜はお赤飯かしら」

「お姉ちゃん！！！」

そんな様子を忍さんは微笑ましいとばかりに見守っていた。それにしても、なんで赤飯なんだ？
なにかめでたいことでもあったのか？

『坊ちゃん・・・ほんとに無自覚なんですネ・・・』

だから、なにがだよ・・・。

S i d e o u t

相変わらず、無自覚でフラグを立てる悠二でした。

二十二話 魔術と夜の一族（後書き）

・・・はい、やってしまいました。だが、公開も反省もしません！
↑おい

吸血鬼繋がりで型月の世界ともリンクさせました。ですが、もうわかったと思いますが、かなりオリジナル設定が入ります。

しかも、本格的登場はかなり後になります・・・

次回は・・・とあるシスコンさんとの決闘になる予定です。

二十三話 鶴翼と神速

二十三話 鶴翼と神速

それから、忍は用事が済み安心し様子で退出するとすずかと悠二は他愛のない雑談に興じていた。

ガチャ

「あ、アリサちゃん」

さきほどの金髪の少女・・・アリサ・バリングスが入ってきた。

「あ、あの時は助けてくれてあるがとう・・・」

「なに、気にすることはない。そんなことより、座ったらどうだ？
せつかく月村の当主が良いお茶と茶菓子を出してくれているんだ」

「え、ええ」

アリサはどこかぎこちない様子で悠二のむかいがわ・・・つまりすずかの隣に座る。
そして

「そついえば、あんた、名前は？」

「ふむ、名前を名乗るなら自分からではないのかな？」

いつもの意地悪な顔でそういう悠二。

「うつ！・・・それもそうだね、私はアリサ・バニングスよ」

皮肉だが、正論なんでアリサも従う。すると悠二は

カチャ

持っていたティーカップを置くと

「僕は水無月悠二。念のため言っておくが、れっきとした男だ」

「えっ！？嘘でしょ！？」

「嘘じゃないよ、アリサちゃん」

さきほどのすずかと同じような反応をするアリサ。
その様子に悠二は苦笑すると

「そういえば、水無月君はどうして海鳴市（うみなり）に？」

「悠二で構わないよ。旅行だよ、こっちに義妹の友人が住んでいる
のでね」

「義妹？」

「ああ「プルルル」・・・失礼」

そんなとき、悠二の携帯（クラウドのあの狼のようなレリーフの刻
まれたモノ）がなる。

液晶には『芳乃さくら』とある。

「もしもし？どうした、さくら」

『どうしたじゃないよ、どこにいるの？もう翠屋に着いちゃったよ？』

「すまんすまん、ちょっと誘拐犯から美少女二人を救出してた」

「「び、美少女」」／／／／／／／

悠二のさらつと美少女発言に顔を赤くする美少女二人。

『むう、なんか嫌な予感がするけど、いいや で、すぐ来れる？』

「むう、すこし掛かる。すまんな」

『いいよ、できるだけ早くね？なのはちゃん達も待っているから』

「ああ。フェイト達によろしくな」

パタン

携帯を閉じる。

「つと、すまん。すこし用事で・・・どうした、二人とも」

「さっき、フェイトって言ったわよね？」

「あ、ああ。それがどうした？」

二人が発する妙に黒いオーラに気圧され気味の悠二。

「じゃあ、フェイトの言ってた『お兄ちゃん』って……」

「まさか、悠二くん？」

「そ、そうだろうな。きっと」

「フフフ……」

「つ、月村？…バニングス？」

そんな空気のなか、ゆうじはただオロオロするしかなかった。

*

—— 翠屋 ——

「さくらさん、どうだった？」

「うん、なんでも誘拐犯から美少女二人を救出してた……だった」

さくらが悠二に連絡した頃、さくら達はすでに翠屋へと到着し、軽く自己紹介を済ましていた。

今回、どうしても都合が綱買ったために八神家は本日は欠席している。

「そっいえば、すずかたちもくるの？なの？」

「うん、来ると思うと・・・「キキイ」・・・来たみたいだね」

なのはが言っている最中、車のブレーキ音がする。
どうやら、到着したようだ。

ガチャ

「いらっしやい、すずかちゃん、アリサちゃん・・・悠二くん!？」

二人と腕を組む形で金髪の少年・・・悠二が姿を現す。

「お兄ちゃん!？・・・すずか!アリサ!？」

「ふえええ!？」

「実はな・・・」

——少年 説明中——

「と、いうわけだ」

「じゃあ、ちょっと救出してくるって月村さん達のことだったんだ」

「ああ、とりあえじ軽く三途の川を渡ってもらったよ」

「いや、渡らせちゃダメだろ・・・?」

義之のツッコミをスルーしつつ、さくらたちの自己紹介やことの顛末などを説明していると

「君が水無月悠二くんかい？」

「あ、はい・・・貴方は・・・」

「僕は高町士郎。なのはの父親だよ」

いつのまにか、悠二の席の近くには三人の子供を育てたとは思えないくらいに若いダンディーな男性が立っていた。

（・・・この人、出来るな）

その何気ない動作から、士郎の力量を見抜く悠二。動きに隙が一歳無いのだ。

「始めまして、水無月悠二です」

「どうやら、うちのなのはがお世話になったようだね」

「いえ、ただすこし助言をしただけですよ」

彼の口ぶりから、どうやらあの時のことをある程度は話している様子だった。彼が言っているのはそのときのことだろう。

「さて、なにか食べるかね？なのはの恩人だ、今回は私のおごりで構わない」

「フツ、今回はご好意に甘えましょう」

とりあえず、手近の席へと腰を下ろす悠二。すると

「隣は僕がすわ「させません!!」・・・っち」

ほかに先んじてアクションを起そうとしたさくらだったが、それを呼んでいた音姫たちにさえぎられる。

「なになに？なにしているの？」

「あ、お姉ちゃん」

おくの法からめがねをかけたお下げの綺麗な女性が出てきた。

「あゝ、あの子ね。このまえなのはがいつていた子って」

「お姉ちゃん!!」／／／／／／／

（まったく、高町家というのはどんだけ綺麗な人が多いんだよ・・・あの兄さんはイケメンだし、お父さんはダンディーだし、お母さんの桃子さん　なのはもそうだが姉のこの人まで・・・はあ）

人知れず、高町家の遺伝子の理不尽さに溜息を吐く悠二。

「へえゝ、ほんとに女の子みたいだね」

「——そんなにジロジロ視ないでください」

「あ、ごめんねゝ。私は高町美由希、もうわかっていると思うけど、なのはの姉だよ」

「こちらもすでにご存知と思いますが、水無月悠二です」

本日、何度目か分からない自己紹介を述べる悠二。

「ゴホン、じゃあ気を取り直して、公平にジャンケンはどう？」

『賛成！』

「つて、アリサちゃん！？」

「すずかまで！？」

「なのはたちも！？」

「負けないよ！！」

さくらの公平な提案に全員が了承し、そしてそれぞれがそれぞれの参戦に驚いている中

「隙あり！！」

『あつ！！』

全員が驚いている中、美由希がひとり悠二の左隣に潜り込む。

「注文は決まったかい？」

「あ、はい。カルボナーラとサンドイッチで」

「わかった、すこし待っていてくれ」

悠二のとなり争奪戦をなのは達が繰り広げているなか、メニューとにらめっこしていた悠二がようやく注文をする。
それを受け取った知ろうが厨房のほうに向かうと

「お姉ちゃん・・・ズルイ」

「フッフ、早い者勝ちだよ？なのは？」

全員が齒軋りしている中、一足先に席を勝ち取った美由希が微笑む。

「でも、まだもう一席あるよ!!」

「そうだよ!!」

「うん!!」

「そうなの!!」

と、残った右隣を駆けてジャンケンを始めるのだった。

*

結果からいうと、勝者はなのはだった。

「う~~~~」

「今度こそは〜」

負けた音姫達は悔しそうに席に座ってサンドイッチを食べている。しかし、翠屋の料理・・・その全般は規格外に旨いためにその顔はすでにほころんでしまっている。

悠二はさくら達がモキュモキュと忙しく口にサンドイッチを詰め込んでいる愛くるしい姿を眺めつつ、自身のカルボナーラを食べていた。

そんなとき

「ねえねえ、悠二くんってさ」

「なんですか？」

「付き合っている子とか要るの？」

「ブウウウウー!!」

美由希の予想外の質問に食べていたパスタを危うく吹きそうになる悠二。

「ゲフッ、ゲフッ、何てこと聞くんですか」

「だって、気になるじゃないね？」

「うん!!」

美由希の目配せに猛烈に食って掛かるなのは。その眼は輝いている。

どうやら、よほど気になっているらしい。

（・・・はあ、そういや、女子はコイバナが好物だって、師匠が言っていた気がする。まさか、実感する気が来るとはな・・・。あの時は思いもしなかったのに）

内心、どこから寂しそうに呟くが、表情にはおくびにも出さず

「いませんよ、僕なんかと付き合ってくれるような物好きなんていませんよ」

そうすまし顔で再びパスタを口に運ぶ。

「——なのは、もしかして彼・・・」

「うん、天然なの」

『はあ~~~~』

（ん？なんでみんな僕をみて溜息を突くんだ？）

鈍感・・・というか、そんな考えのいつぺんもない悠二はただ首をかしげるだけ。訂正しておく、彼は鈍感ではない。ただ、わからないだけなのだ。

愛や恋などといった感情が・・・

「じゃあ、私が貰っちゃおうかな・・・あ~~~~ん」

「お姉ちゃん!？」

「ちょ！？美由希さん！？」

悠二の左隣に座った美由希はどこか楽しそうに自分のパスタを適当に巻き取ると悠二の口元にもっていく。
俗に言うあゝんというやつだ。

「私だつて~~~~！！」

続いて、対抗心をだしたなのはも出す。

（・・・これをどうしろと？）

悠二は目の前に突き出された二つのフォークをみて困惑してしまう。

「ええい！男は度胸！！」

某ど饅頭の口癖を言いなはち、美由希　なのはの順で食べる悠二。
しかし、それがいけなかった。

ガタンと大きな音を立て、奥の扉が凄い勢いで開くと

「貴様・・・」

一瞬、背筋がぞつとするほどの殺気。

悠二も恐る恐る振り返ると、そこにはあきらかに殺気だった一人の青年。

（たしか・・・高町恭也だったかな？なのはの兄さんか）

「きくくさくくまくく、なのはのみならず・・・美由希まで!!!」

そこには小太刀（真剣）を構えた般若シスコンが立っていた。
その背後にはいまにも阿修羅が幻視で着そうな悠二だ。

「もう許さん!!すぐに道場へ来い!!その根性、叩きなおしてやる!!!」

彼は悠二に小太刀を突きつけるとそう一方的に告げると肩を怒らせて道場の方へ歩いていく恭也。

（シスコン・・・ってやつか。まあ、愛することは悪いことじゃないと思うがな・・・と言っても、愛するという感情がいまいち、ぴんと来ない僕が言うのは、おこがましいな）

再び、薄く自嘲の笑みを浮かべていると

「ごめんなさいね、悠二くん。うちの恭也が」

「いえいえ、たしかにこんなに可愛い妹さんだったら、悪い虫がつかないように警戒する気持ちも分かりますね。自分だったら、多分そうなるでしょうから」

「うにゃあ・・・////////////////」

「あらあら」

悠二のさりげない一言でなのは顔を真っ赤にしていたが、思考に埋没しだした悠二には分からない。

（・・・高町恭也）

ただ、彼の名をひとり呟くのだった

*

——道場——

それから、ほどなく全員は高町家の裏の道場に集まっていた。

「来たな！！」

「はあ・・・」

中央には相対するように立つ悠二と恭也。それを見守るように出口からさくらやなのはたちがそれぞれの表情を浮かべ、立っている。

「悠二くん・・・」

「ちょっと！大丈夫なの！？」

（悠二くん・・・）

悠二の実力を知らない、または恭也の凄さを知っている三人は悠二の身を案じていた。

大して、悠二の生身での実力をいやと言っただけ知っている皆さんはというと・・・

「彼、大丈夫かな・・・？」

「わかりませんね。彼の實力がどれほどなのかによりますけど・・・」

「うん、なのはの話だと、相当強いらしいですよ？」

「でも、弟くんだからね？」

「はい、兄さんですから」

日ごろから、悠二によるスパルタ修行を受けている三人と彼の力を身をもってい知っているさくらは反対に恭也の身を心配していた。

「さあ、好きな得物を選ぶと良い。そうでなくては正々堂々の勝負にならないからな」

そんなギャラリーの考えを知らず、道場の壁にいくつも立てかけてある木製の武器を指し示す恭也。

「いえ、僕は自分の得物でいかせて貰います。そっちのほうが楽しうなんで」

「フン、好きにするが良いさ」

パチン

悠二は七夜礼装のトレンチコートで隠れていた鞘のスナップをはずし中から、干将と莫耶を取り出す。

そして、ほぼ同時に構える悠二と恭也

「では、はじめ!!」

二人の中央の壁際に立っている士郎の合図で戦闘は始まった

「はっ!!」

先手は恭也だった。常人では目視すら適わない速度の踏み込み空の斬撃。

「フッ」

シュン

それを横に体をスライドさせることで難なく避ける悠二。さらに反撃に干将で横に薙ぐ。

ガン

「くっ」

しかし、それはもう一方の木刀に阻まれる。

「まだまだ!!」

ボコン ドゴン ダン

恭也が防ぐために一瞬だけ、動きを止めるとそこに悠二の容赦のない連撃が入る。

「ハッ!！」

しかし、それを捌きながらも的確にカウンターを放ってくる恭也。

「フンッ」

悠二も攻撃の手を緩めず、それを最低限の動きで避け、時には弾く。

ガキン ガン ガキン キン

「くっ・・・」

それから、幾度と泣く二人は打ち合う。

恭也が切り込み、悠二がソレを往なし、そこから飛んでくるカウンター！。

その無限の連鎖。

（くっ・・・硬い）

悠二の鉄壁の守りの前に恭也は責めあぐねていた。
そんなとき

スウ

「っ!」

一瞬、悠二にうまれるかすかな隙。

（貰った!!!）

そこに恭也は迷い泣く剣を降りぬくのだった。

「すごい・・・」

「うむ」

二人の打ち合いをみて、美由希と士郎がそれぞれ漏らす。

「まさか、あの歳で恭ちゃんと互角に打ち合える人がいるなんて・・・」

「互角・・・（いや、違う）」

美由希は互角と見たが、士郎の見解はすこし違った。

（・・・あの歳であの動き、同考えても以上だ）

「父さん、悠二くんって・・・」

「ああ」

どうやら、美由希も士郎と同じ見解に至ったようだ。

「彼のあの動きから、才能は一切感じられない」

「うん」

士郎と美由希のいうとおり、悠二に剣の才能はない。

「でも、なんであそこまで打ち合えるんだろう・・・？」

「おそらく、積み重ねてきたんだろう。血の滲むような努力を何年も何年も・・・っ!？」

「危ない!!」

二人が見ているなか、隙がない悠二にほんの小さな・・・だが、確実なすぎが生まれてしまう。

当然、恭也もそこを突く・・・が

「なっ!？」

ガキイン

「えっ!？」

それが悠二の体にヒットすることはなかった。

彼の左手に握られている干将で防がれていたのだ。

「なんて危険な戦い方をするんだ。あの子は!!」

「まさか・・・自分で隙を作ったの!？」

錬度の違いはあれど、二人も同じ剣士。悠二がしたことはわかった。これが、悠二の戦法。

悠二に才能はない。なら、真っ向から打ち合ってはかつことはできない。

だから、悠二は自ら、敵の攻撃を誘導することで戦闘を自分の思い通りに運ぶことを体に刻みこんだ。

その危険性はいまさら言う必要もあるまい。一つ間違えば、相手の一撃をクリーンヒットしてしまうのだから。

ガキインガキン

恭也の放つ怒涛の連撃を両手に握り締めた干将莫耶で捌きつつ思う。

（やはり・・・一流の剣士か）

その独白にはどこか、羨望的な感じが籠っていた。

さきほども言ったとおり、悠二には才能がない。だから

（・・・やっぱり、羨ましいな）

どうしても、そう思ってしまうのだ。

（もし・・・もし、僕にこの人の十分の一でも才能があれば・・・）

もしも・・・IFのことを詮無き事と分かっているとも思ってしまう。

（あれば・・・僕は“オレ”は、剣で居られたのかな？）

そんな、答えのない独白。

（相手が相手だ。そろそろ決めるか・・・トレースオン！！）

そう心の中で呟くが魔術は発動させない。これは一種の自己暗示。
彼はスイッチを入れただけ

普通の中学生から・・・戦士へのスイッチを

「っ！？（気配が変わった！？）」

さきほどとは比べ物にならないほどのスピードで双剣を振るう悠二。

「くう・・・」

ガキン ガキン ガキン

いきなりの速度変化・・・それもあろう。しかし、恭也がここまで防戦一方になるのには理由があった。

「くっ」

ガン

（怒涛の連撃・・・それだけでは防がれ、カウンターを貰うことになる。だから、僕はあえて隙を与える）

一瞬だけ、攻撃の手を緩める。

「そこ・・・っ！」

「させませんよ」

（隙を作り、余裕を与えることで反撃を誘発する。そこを呼び動作の時点で潰す。それが、“オレ”が生きるために作り上げた剣術）

恭也の予備動作・・・つまり、剣を振り威力が完全に乗り切る前に潰す。

（読まれている？・・・そんなバカな）

恭也はそう切り捨てるが、それは実際事実だった。

（読みどおりだ）

なぜ、こんなことが出来るのか？それは悠二がさきほどの剣戟の応酬で恭也の剣を振るタイミング 呼び動作、そしてそれに掛かる所要時間それらすべてを記憶しているからだ。

タッ

「高町恭也、あなたにひとつ聞きたい」

悠二はいったん、恭也と間合いを話すと、唐突に話しかけた。

「なんだ？」

「貴方は月村の当主から何処まで聞いた？」

「――忍からは大体のことは聞いている。君が魔術使いと呼ばれる存在だということも」

（なら、問題ないかな・・・）

「なら、僕の全力でお相手しよう・・・同調開始」
トレースオン

カチン

今度は自己暗示ではなく魔術の詠唱。頭のなかの撃鉄を落とし、魔術回路に魔力を流し込み、神秘をこの世に顕現させる。
その神秘・・・魔術によって全身を強化すると

ブン

力いっぱい、両手の夫婦剣を投擲する。

「っ!？」

ガキン

「鶴翼、欠落ヲ不ラズ（しんぎむけつにしてはんじゃく）」

パリイン

投擲した夫婦剣は弾かれるが、悠二は表情を変えず、さらに手には同じ夫婦剣が握られる。

「心技、泰山ニ至リ（ちからやまをぬき） 心技黄河ヲ渡ル（つる

ぎみずをわかつ）！」

ガキイン ガキイン

全身に強化の魔術を施し、虚空移動と併用することで信じられない速度で懐に入る悠二。

「ぐっ……」

異常なほどの速度の上昇に戸惑ったが、恭也とて一流の剣士。それぐらいではひるみはしない。
なんとか、悠二の剣戟に付いて行く。

「唯名別天二納メ（せいめいりきゅうにとどき）」

「がはあ！」

しかし、突然の背後からの奇襲に怯む。
それは最初に投擲した夫婦剣であった。

（なんだと！？）

「両雄、共二命ヲ別ツ（われらともにてんをいだかず）！！」

——鶴翼三連——

そこを見逃す悠二ではない。すぐさま、干将と莫耶でとどめに掛かる。

「くっ……（仕方ない……使つか！！）」

「なっ!？」

ドゴン

『えっ!？』

すぐそこまで夫婦剣が迫っていたというのにも関わらず、吹き飛ばされたのは・・・悠二。

突然の衝撃だったために、受身も取れずに道場の壁にぶつかる。

「・・・いまのは危なかった」

額の汗を拭う恭也。

この場の誰もが、恭也の勝利・・・そう思っているなか

「・・・」

当のふきとばされた悠二は怪しく口を笑みでゆがませるのだった。

二十三話 鶴翼と神速（後書き）

はい、悠二VSシスコンこと恭也さんでした。

決着は次回に持越しです。そして、悠二のチートに更なる磨きが！？

二十四話 トレースユニゾン
憑依投影

二十四話 憑依投影（トレースユニゾン）

場所は高町家の道場。そこでは、さきほどまで悠二と恭也が激しく打ち合っていた。

そして、悠二の鶴翼三連を破り、立つ恭也。

そのすこしはなれた位置にある入り口のひとつ。そこには彼の父親 高町士郎と彼の妹 高町美由希が立っていた。二人のまなざしは真剣そのもの。

そんな中

「お父さん、いま」

「ああ、使ったな。神速を」

美由希の言葉にうなづく士郎。

神速・・・それは恭也の使う御神流の秘奥義とも呼べる技だ。原理は簡単。脳のリミッターを解除することで通常では到達不可能領域の速度で移動するものだ。

しかし当然のことだが脳への負担だって大きい。

「しかし、なんで最初に投擲した剣が戻ってきたんだろう？」

「それはおそらく、あの剣の性質だろう」

美由希の疑問に、士郎が答える。

「性質？」

「ああ、剣が何かは分からないが、お互いを磁石のように引っ張り合う性質を持った剣なのだろう」

士郎の言葉は当たっている。悠二の愛用している干将莫耶とは、呉の名匠 干将が妻の莫耶の犠牲の上に作り上げた一対の宝剣である。白く水波模様が描かれているほうは莫耶、黒いほうには亀裂模様が描かれているほうが干将だ。

これらはお互いに引き合う性質を持っている。

それを利用し、投擲による背後からの奇襲と正面からの斬撃を喰らわせる・・・それが鶴翼三連と呼ばれる業である。

「しかし、彼はあの剣をどこから出したんだ？」

*

義之 side

悠二の十八番・・・鶴翼三連。それを初見で避けた？まったく、さくらさんでも在るまいに。

『マスター、気付いているか？』

ああ、あのなのはお兄さんのことだろ？

『ああ、どうやら・・・』

脳内のリミッターの一時解除・・・そんなところか？

『ああ、さすがだな。マスター』

なあと、常日頃からの悠二のスパルタ地獄のおかげだよ。

「悠くん・・・」

「弟くん、大丈夫かな？」

「ちょっと、わからないな。突然の奇襲だったからな、おそらく受身を取れていないだろう」

「それじゃー!!」

「ちょっと、まずいかもな」

悠二やオレも固有時制御っていう、魔術を使えばあれほどのスピードは出せるだろうか・・・

あれは如何せん、体への負担が大きい。

『マスター、それはあちらでも同じだと思っが?』

「・・・かもな」

さすがに心配そうな音姉や由夢も見て、すこし悠二のことを恨むと、再び悠二の飛ばされた道場のところへ視線を向ける。
どうするきだ？

悠二・・・

*

悠二side

「やれやれ・・・」

「っ!」

よっこらせとゆっくりとした動作で立ち上がる。

・・・決めたと思っていた恭也さんはそれに驚いている。まったく、あれぐらいで僕が意識を失うかよ・・・。

って、おいおい・・・マジかよ。

手元をみて、さらに落ち込む。

「——まさか、初見で鶴翼三連を避けるばかりか・・・」

はあと落ち込み気味に手を上げると、そこには

ピキ　　ピキピキ

「干将と莫耶に罅をいれるなんてな。まったく、どんだけだよ」

『っ!?!?』

僕の両手の罅の入った干将と莫耶をみて、約五名が固まる。

「嘘だろ！？悠二の投影品が！？」

「嘘・・・生身で悠くんの干将莫耶に罅を入れるなんて」

「——信じられない」

「嘘でしょ！？」

干将莫耶はC・とはいえ、人の幻想を骨子に作り上げた宝具だ。それに、投影の精度だつて一日だつて鍛錬は怠っていないから、ある程度の自身はある。

それに罅を入れる・・・デバイスを展開しなければ、さくらですら出来ない芸当だぜ、おいおい。

それを生身でやるなんて、恭也さんって本当に人間なんだろうか？

トレースオン
「投影開始」

そんなどうでもいいことを思いつつ、両手の干将と莫耶を破棄、こんどは僕の身長をこす位の長刀を投影する。

・・・イツツ、こりゃアバラが一本や二本は逝ったかな・・・

『ええ、それは確實でしょう』

・・・いやだ、いやだ。なんで旅行に着たのにアバラを折らなきゃいけないんだよ・・・。仕方ねえ、悪いが恭也さんにも実験台になつて貰う事にしよう

「トレース オン同調開始……完了……セット憑依投影」トレース・ユニゾン

僕の新しく開発した魔術……にしては異端過ぎるな。武器を投影すると、ある程度は憑依経験を読み取ることを使いこなすことのできる……という性質に目をつけた僕は完全に使いこなせるようにならないか？そう思っただけで開発したのが、この憑依投影。トレース・ユニゾンこれによって、僕は担い手の経験や技量などをこの身に反映させることができるわけだ

だが、これにはすこしだけ難点があつて……

ヒュン

「行くぞ、兵よ！」つわもの

……そう、若干性格や言動も変わってしまうんだ。

ダッ

「今度こそ……！」

シュン

再び、恭也の姿が消える。再び、神速によつて超高速移動にはいったようだ。

さきほどまでの悠二なら、決まっていたかもしれない……だが

「そこだ」

ガキイイイン

いまの悠二は、さきほどまでの悠二ではない。悠二の斜め後ろ、そこから来る恭也の斬撃を長刀で防ぐ。

防げないと踏んでいた恭也はその驕りから、一瞬だけ思考が泊まる。

これが予想外の恩恵・・・すでにわかっていると思うが、装備した英霊は佐々木小次郎。そこで、その恩恵というのは、彼のもつスキルだ。

Aランクの心眼（偽）・・・いわゆる第六感 虫の知らせと言われる天性の素質だ。

「嵐三連!!」

「ぐはあ!!」

ザンザンザン

神速の三連撃。

最初の一撃は直撃したが、それからの二発はうまいこと弾かれる。

やれやれ、あつちはまだ、“佐々木小次郎”と同じ天に愛された剣士・・・か。

・・・さて、決めるか。

「受けられよ、凡愚の極めし我が秘技を！」

基本、佐々木小次郎に構えはない。だが、これは例外。

かの剣豪が燕を切る。そんなことのために編み出した『魔法』の域にすら達する至高の剣技。

いまだからこそ、僕でも放てる。

「秘剣！・・・燕返し！！」

「ぐはあ！？」

Fateの世界でいうところの第二魔法・・・キシユア・ゼルレツチ多重次元屈折現象を用いたそれは、三種のまったく異なる軌道の斬撃を同時に発生させる業だ。

故に回避不能・・・

もつとも、燕を切るために編み出された技なのだから、それに劣る人間に避けられては本懐は遂げられないだろうがな・・・

「フツ、中々によい試合であつた。っと、僕の勝ちだな」

ヒュン・・・

投影した長刀・・・備前長船長光・・・通称『物干し竿』を一払いし、魔術を解く。

「ぐつ、一体なにが起こつたんだ・・・」

ボタン

反対に恭也さんは顔に困惑を浮かべながら気絶する。体には三つの斬撃の痕。刃は潰してあるとはいえ、打撲程度にはなっているだろう。正直に言って、罪悪感が酷い。

あとで、治療するなりしてあげますか・・・

＊

「・・・と、いうわけだ。理解してくれたか？」

「え、ええ。魔術なんて、合ったのね」

「魔法もあるんだ。不思議じゃないさ」

あれから、なにも知らないアリサに詰問された悠二は、魔術のことなどを説明していたのだ。魔法のことをすでに知っていたようなので、理解は思ったより早かったが。

そして、それが壱段落すると、今度は悠二のとなりに座った義之が疑問をぶつける。

「悠二、さっきのアレはなんだ？」

「——やっぱし、ばれてた？」

「当たり前だ」

あきらかに不機嫌な義之。どうやら、同じ投影を使う義之だけにはさきほどの悠二の使用した魔術がどれほど異常なものか、理解できたようだ。

「どういつこと？義之君」

「ああ。さっき、悠二の使った魔術の事です。そもそも、俺たち

の投影つてのは、武器を投影するだけじゃないんだ。その担い手の経験がある程度まで、自分に還元する事が出来る」

「うん、それは悠くんから聞いた事があるよ」

『だが、さきほどの悠二の燕返し、私が見た本物のソレと同等だった。それは通常の投影ではありえないことだ』

さらにアーチャーの駄目押し。

「どういうことなの？ 弟くん」

「さっき、口調が変わっていたことに関係があるんですか？」

由夢が鋭いところを突く。

「ああ、あの時僕が使ったのは憑依投影だ」

『憑依投影？』

義之やアーチャーも含めた全員が聞きなれない単語を鸚鵡返しする。

「投影憑依つてのはな、僕のオリジナル魔術で、投影した武器の担い手の力量 技量 スキル 経験すべてを僕に重ねるものだ、ただ人格まで多少変化するのと、体格さの大きい奴を憑依させると体への負担が大きいんだけどな」

「じゃ、じゃあ、それを使えば担い手になれるってのか？」

「まあな」

『き、規格外すぎるぞ・・・悠二』

「悠くん、やっぱり反則の塊だね」

義之とアーチャーやさくらはわかったようだが・・・

「ねえねえ、それってどういうことなの？」

「もうすこしわかりやすくいつてくれない？」

なのは達はいまいち、ぴんと来ないようだ。そんなのはたちのために悠二は噛み砕いて説明する。

「たとえば、そうだな。さっきの例でいうと、投影したあの長刀は物干し竿・・・備前長船長光で憑依させたのは佐々木小次郎だ。つまり、あの子の僕は佐々木小次郎と同じ能力を持っていたということだな」

「嘘でしょ？」

「な、なんでもありませんだね・・・」

「にやはははは・・・」

さすがに佐々木小次郎のことは知っていたようで、なのはたちも理解できたようで、啞然としている。

（まあ、実はもうひとつあるんだけどね・・・）

そんな様子をみながら、悠二は苦笑を深めるのであった。

*

悠二 side

その後、夕方になり日が落ち始めると解散。僕たちは事前に予約しておいた旅館へと向かい、それぞれの時間をすごしていた。

「――^{トレース}投影、^{オン}開始」

その中、ひとり旅館の中庭にたっていた。片手に投影するのはアゾット剣。

杖ともなる短剣だ。

「A n f a n g^{セツト}」

地面にそれを垂直に刺し、それを中心に結界を何十にも張る。さくらたちに知られるわけにはいかない。すこし危険を伴うからな。

「^{サーキット・オープン}魔術回路開放」

通常、封じている500の魔術回路を開放する。

「――^{サーキット・プレス}魔術回路、圧縮・・・ぐっ・・・」

作業に移ったとたん、すさまじいまでの頭痛に襲われる。頭が割れそうだ・・・

「魔術回路・・・再構成開始」

僕がやっているのは、魔術回路の再構成。初音島以上に、ここは霊脈と呼ばれる自然に流れるエネルギーの質量ともにいい。それをくみ上げ、補助とすることでこの作業の確実性を高めているんだ。

なぜ、僕がこんなことをする必要があるのか？理由は簡単だ。僕の魔術回路一つ一つの魔力総量を上げるためだ。

僕の体内の魔術回路はおよそ1000本。しかし、一本一本は普通の魔術回路より貯蔵魔力が少ないことが義之の魔術回路と比べてみてわかったんだ。

質より量・・・というわけだ。

「・・・ぐっ」

頭痛は引かない。なんでかというと、絶賛魔術回路を再構成 圧縮している最中だからだ。

僕の1000本もの魔術回路を圧縮し、太い魔術回路に組み直す・・・くそ、マジで頭が割れそうだ。

魔力はいくらあっても無駄にはならない。

「・・・ぐっ・・・サーキットクローズ魔術回路閉鎖・・・はあ」

ボタン

「はあ・・・はあ」

なんとか・・・成功したな。

1000本あった魔術回路を27本まで圧縮することに成功した。
いやはや、本気で死ぬかと思ったよ。

これによって、魔術回路一本あたり、通常の魔術回路37本弱の魔力を得られる。

「はあ・・・はあ・・・これで、アレの威力を上げることができる
やれやれ、なんとか成功か・・・」

『まったく、無茶はしないでくださいと、あれほど言っているのに・・・』

「すまんな、シャル」

心配性の相棒に謝りつつ、立ち上がると

「さて、始めるか。・・・サーキット・オープン魔術回路開放・・・トレースオン投影開始」

手に投影するのはかのケルト神話の英霊 クー・フリーンの父親にあたる光の神 ブリュナク ルーの持つ槍。
名を轟く五星

「・・・プレススタート圧縮開始・・・」

そこに魔力を圧縮し、詰め込んでいく。

圧縮し、詰め込むだけならば、千本の状態でもできるのではないか？

いいや、できなかった。なぜなら、魔力はあっても圧縮できるほど収束ができなかったからだ。だから、危険を冒してでも魔術回路を圧縮し、一本の魔術回路に莫大な魔力を収束させたんだ。

「……完了セツト……投影完了トレースオフ」

……成功。

これで、奥の手のひとつが完成した。これで、トレース・ユニゾン憑依投影とこれと、あともうひとつのオリジナルの魔術。

——吾ながら、とんでもないものを開発しちゃったもんだぜ。

「トレースアウト投影破棄……サーキット魔術回路閉鎖クローズ」

込めた魔力がものすごくもったいないけど、破棄する。あと、魔術回路を五本だけ残し、あとには封印を施す。

「……さて、もう寝るか」

そういつて、僕も旅館のほうへ戻るのだった。

二十四話 憑依投影（トレースユニゾン）（後書き）

われながらやりすぎましたww

ちなみに最後のアレは今後使う予定です。

次はやっとマジな戦闘に入ります。

次回 二十五話 悲痛

二十五話 悲痛

悠二と恭也が試合をした翌日、今度は八神家の面々も翠屋に集まっていた。

カランカラン

「いらっしやいま・・・あら、やっと来たのね。悠二君」

「ええ、すこし遅れました」

悠二は昨日の無茶がたたり、朝起きると頭痛に悩まされたため、登場がすこし遅れてしまったのだ。

「よう、悠二」

「ひさしぶりだな。ヴィータ、今日は八神家も勢ぞろいみたいだな」

「昨日はこれなくて、ごめんな？」

「気にするな。仕事だったんだろ？」

「管理局の仕事って、忙しいんですか？」

と、ふと気になったように言う由夢。

「せやな・・・。たしかにすごい忙しいで？」

どうやら、悠二登場の前に魔法関係者のことを話して会ったようだ。

「ハハ、じゃあはやてちゃんもなのはちゃんも、中学を卒業したら管理局にはいるの?」

「せやな・・・」

「そうなの」

「・・・」

二人の言葉に人知れず、マユを潜めるさくら。彼女としては、あまり管理局とはかわってほしくないようだ。

「フェイトちゃんはどつするの?」

「私?私はお兄ちゃんたちと一緒に高校かな?それと平行して、出来る範囲で管理局で嘱託として動くけど」

「そうなんだ」

「・・・」

悠二はなのはたちのやり取りをすこし離れたい位置で見守っていた。すると、奥から来た士郎が

「どうして、加わらないんだい?」

「・・・僕には、すこし彼女らはまぶしすぎますから」

「・・・そうかい」

そういう悠二の表情は中学生ではありえないほど、さびしげな表情だった。

（この子は・・・一体、なにを背負っているのだろうか？）

悠二のその表情を見ながら、士郎は考える。目の前の末娘と変わらない年齢の少年はいつたいどれほどの闇をうちに秘めているのだろうか？

ひょっとしたら、自分たちを超えてすらいるのではないか？と考えてしまうほどに

「——君はなんで、闘うんだい？」

「アレを・・・彼女たちのあの笑顔を護りたいからですよ。だから、僕は剣を取った」

そのためなら何でもしますよ。そういつて、悠二はなのはたちのところへ歩いていった。

「・・・」

「父さん」

悠二が行った後、恭也が士郎に話しかける。

「父さんは、昨日悠二君の戦いを見て、どんな風に思った？」

「・・・」

「オレは、彼が使っていたのは武術や剣道 剣術なんかではないと思った。あれは・・・」

戦場を鍛えられた剣だ・・・と、恭也は言う。

「一朝一夕で習得できる技術じゃない」

「・・・ああ、そうだろうな」

そこで、士郎はようやく口を開いた。

「——彼は、きっと私たち以上に戦場を巡ったのだろう」

士郎も恭也と同じ結論に至っていたのは言つまでも無い。しかし、その理由が、さっきの悠二の瞳を見たとき、なんとなくだがつかんだ気がしたのだ。

「才能のないことを悲観せず、絶望せず、ただひたすら愚直なまでに鍛え、経験し、積み重ねてきたんだろう」

「・・・」

士郎のいうとおり、悠二に剣の才能はそれこれっぽちも無い。唯一あつた才能は暗殺術だったのだから。それと、マシだったのは弓ぐらいだ。それ以外は、どんなに鍛えても一流にようやく届くか届かないか、というところどまりな人間だ。

それは悠二もわかっている。

「・・・でも、なんであんな子供が」

恭也もすこし悲しそうだ。それもそうだ、なんで妹と同じ年ほどしたない少年が、戦場をそれこそあれほどの技術を会得できるほどの経験しているのか？
そう思うだけで、遣り切れなくなる。

士郎も、ふと視線を流すと、そこには先ほどの悲しげな視線とは違い、年相応に笑う悠二が居た。

（あんな子が・・・どうしてあそこまでの悲しい瞳を出来るんだろ
うか・・・？）

*

それで、悠二がなのはたちと雑談に興じていると

『坊ちゃん、この近くに次元転移反応が』

（魔力反応は？）

『あります、特大のが』

（なるほど・・・）

すこしの間、悠二は逡巡する。このまま、放置するか この場を抜けて自分で処理をするか。
放置しても大丈夫な場合もある。しかし、もし魔力反応の対象が転生者だったとしたら？

・・・低いが、可能性がないわけではない。

もしそうだったら、取り返しがつかないことになるやも知れない・

（おし、行こう）

『了解しました。各デバイスへのジャミング 開始します』

シャルティエがなのはたちのデバイスに感知されないようにジャミングを施すと、悠二は気配を殺し、裏口から翠屋を後にするのだった。

しかし、悠二は気づいていなかった。

その背中を見ている一人の人間の存在に

『マスター、どうしますか？』

（・・・わからないよ、悠くんのことだからなにかあったんだろうけど・・・）

『はい、おそらく先ほど感じた魔力反応のところへ向かったのですよ』

その主・・・さくらは悠二の出て行った先を見つめ、すこし悲しそうに表情を揺らす。

（でもさ、僕たちって、そんな頼りないかな？）

『マスター』

さくらはうぬぼれに近いかもしれないが、あの中で悠二にもっとも実力が近いと思っている（越えられない壁はあるのだけれど）。だから、自分には知らせてもいいのではない貨と違ってしまふ。

ジャミングに気づき、レジストしたルナの反応を見る限り、悠二が向かっている先には自分を超える魔力量を保有している存在・・・

さくらはわかつてはいる。悠二が自分たちのことを心配して単独で動いていることに、でも、でもと思ってしまう。

（やっぱり、僕って我侭な嫌な子なんだね・・・）

『・・・』

その悲しそうな表情にデバイスのルナは何もいえなかった。

*

「ここか・・・？」

魔力反応の先、海鳴市の大きな公園に向かった悠二。

『はい、間違いはありません。この近くにいるはずですよ』

そのときだった。

ブオン

突然、結界のようなものが周囲に張り巡らせる。
境界には漆黒のように綺麗な黒ではなく、淀んだ醜い黒い炎が走っていた。

そのうえ、そのなかに取り込まれた人や噴水もそのまま停止している。

「これは・・・封絶か」

『はい、間違いないでしょう』

封絶とは、結界の一種で存在の力を行使し指定した空間に因果孤立空間を作り上げる自在法である。

これが来た・・・ということは、悠二の最悪の予想が当たってしまったことを意味する。

「うわあああああ」

「っ!」

呻き声にした声のほうをみてみれば、そこには銀色の神に紅い瞳をしている整った顔立ちの少年だった。しかし、眼の焦点はあつてなく、体にはどす黒く、地のように紅い線がいくつも走っている。

その上

（・・・禍々しい魔力だな）

悠二がこれほどの禍々しい魔力を発生させる根源を一つしか知らない

かった。

「この世^{アンリ・マユ}全ての悪・・・いや、聖杯の泥か」

『SET UP』

一瞬、悠二の周囲がひかり、光がやむとすでに悠二がバリアジャケットに包まれていた。

（・・・してくれ。・・・姿・い・・・が・い・殺して・・・くれ
！！）

（ぐっ・・・）

気づくと、悠二の眼はまるで深海のような深い青色に染まっていた。そして、悠二の頭になにかの叫びがダイレクトに来る。

（これは・・・奴の心の叫びか）

それは・・・目の前の男の心の声であった。悠二はそのあまりの内容に表情をゆがめると、一瞬逡巡する。

（また・・・殺してしまうのか？でも、ここで殺さなければ、あいつらを）

おそらく、男の意思とは関係なく、聖杯の泥はこのままなのはたちに襲い掛かるだろう。それは許してはいけない。
なら・・・

（・・・ころ・・・して・・・くれ！！・・・おね・・・がいだ！

！)

「・・・わかった。・・・トレースオン投影開始」

静かに決意すると、悠二は手に飛び出し式の短刀　七つ夜を投影し、逆手に構える。

「・・・恨んでくれてもかまわない。だが、オレはお前を殺す」

しずかに、死刑宣告をするのだった。

*

「ふん！」

——閃鞘・八穿

ザシュ

上空からの切り下ろす。それは襲い来る触手を斬り散らすだけに終わる。

すぐさま、地面に着地し身をかがめ

「はっ！」

——閃鞘・臥龍

男の首筋を狙い、切り上げる。

「まだだ!!」

——閃鞘・旋風

今度は左右への切り払い。

「こいつで!」

——閃鞘・連刃

さらに首 心臓 両腕 両足 両膝 両肘の九つを突く。

「うおおおおお!!」

「ぐっ」

——閃鞘・八点衝

襲い来る触手を斬撃の嵐で切り落としつつ、下がる。

「くそ、斬っても斬っても切がねえ」

『泥による再生能力ですね』

「ああ、残念ながら死の概念がない不老不死の能力も持っているのか『点』どころか『線』すら見えない」

（仕方がない、殺すという一点にのみ特化してるから、使いたくはないし、第一使えるかどうかすら危うい。・・・だか・・・）

悠二は静かに息を吸うと

「吾、死を刻むものなり」

『坊ちゃん・・・？』

「吾が目は万物の死を捉え、吾が手足は万物の命を刈り取る凶器」

悠二は静かに唱え続ける。

「ゆえに吾が手を逃れうる存在はあらず 吾に抗う存在もなし」

—— かつて自身を歌った詩を

「吾に触れるものすべてに死を振りまき、それは万物に等しい。故に吾に友も無く、理解すらされない」

ひたすら、殺すことしか出来なつたひとりの蜘蛛の詩

「—— 吾は面影糸を巣と張る蜘蛛。ようこそ、吾が悲しき惨殺空間へ」

そして、世界は塗り変わる。

「・・・」

そこは荒野だった。まるで、血のように紅い月が照らす荒野。

そこに経つのはその世界の主・・・水無月悠二

そして、その世界の生贄に選ばれた哀れな転生者

『これは・・・固有結界！？』

「——これから貴様を斬刑に処す。迷うことなく冥府へと落ちろ、故にその六銭は無用と思え」

荒野の中、悠二は静かに七つ夜を構えるのだった。

二十五話 悲痛（後書き）

出しました。オリジナルの固有結界

イメージは、すでにお分かりと思いますが『死』です。

感想を下されたみなさま、ありがとうございます。

次回、二十六話 アルカディア・オブ・ザ・デス 死の楽園

二十六話 死の樂園

「——これから貴様を斬刑に処す。迷うことなく冥府へと落ちろ、故にその六銭は無用と思え」

荒野の中、悠二は静かに七つ夜を構えるの。その瞳は青く輝き、普段以上に深い青色となっていた。

「ぐあああああああああ！！」

雄たけびをあげ、男・・・この世全ての悪に飲み込まれた哀れな転生者は魔力でできた触手を無数に飛ばしてくる。しかし、悠二はいたって自然体で、七つ夜を構えている。

——閃鞘 八点衝

触手が悠二に接触しようとした瞬間、そのすべてが斬撃の嵐によって切り刻まれる。

「いま・・・楽にしてやる」

そういうと、バリアジャケットを解除する。続けて、王の財宝から、いつも悠二が来ているのとは違うトレンチコートを取り出す。赤い線の入った黒いコート・・・しかし、背中には、幾何学的な文様が複雑に刻まれていた。

『それは・・・魔術刻印ですか？』

「ああ」

そう悠二は答え、視線を男のほうに戻すと静かに七つ夜を構え、見据える。

「ム・アルタイ——使い事も無いだろうと思ってたがな。刻印セット起動……時タイ間制御……10倍」

——固有時制御 十倍

『坊ちゃん！？』

悠二が刻印を介し、発動させた魔術は固有時制御。儀式が煩雑で大掛かりである時間操作を戦闘用に改造したもので、固有結界の体内展開を時間操作に応用、簡易儀式のみで自身の肉体のみに時間操作を施す。

自身の時間を早めて高速体術を、逆にゆるやかにして索敵を逃れるなどの用法を持つ。反面、解除した時の反動が大きく、解除時には自らの肉体を大きく傷つける諸刃の剣……。

いくら、肉体を鍛え、元の身体の雨量だって異常な悠二だが通常でも2倍……強化を施しても3倍が限度だ。それ以上は戦闘に支障が出てしまう可能性が高い。だから、悠二もあまり使わないようにしている魔術だ。そんな魔術を使い、それだけではなく通常の限界地を遥かに越える時間の設定にシャルティエは悲鳴をあげたのだ。

「……大丈夫だ」

『えっ？』

——閃鞘 七夜

「ぐわあああああああ!？」

しかし、悠二は魔術行使が終わったというのに、なにもない。問題なく、男に切り込んでいる。

——閃靱 旋風

——閃靱 臥龍

——閃靱 八穿

左右に切り払い、上下に切り抜く。

「せめて、来世では笑っていられるように・・・」

——閃走 六兎

瞬時に同じ場所に六回の蹴りを叩き込む。男を蹴り飛ばす。男はさきほどの連撃でひるんでいた為に直撃を暗い、悠二との間合いが離れる。

「・・・御免!」

ヒュン

ナイフを投擲する。男もナイフを迎撃しようと触手を伸ばす。しかし

——極死

ザシュ ゴキッ

——七夜

同時に上空へと上がっていた悠二によって首の骨を折られる。

『坊ちゃん!』

「大丈夫だよ。シャル、この世界では何人たりとも、死から逃れることはできない」

悠二のいうとおり、首の骨を折られた男は自己再生する気配は無い。なぜか？理由は簡単だ、それは悠二のこの固有結界にある。

『——それが、この固有結界の能力・・・ですか?』

「これが、この固有結界の能力だからさ。死の確定……それ以外にいくつかあるが、大本はそれだな」

『じゃ、じゃあ逆だつたら…』

「まあ、僕が死んでたな」

『ふざけないでください!! 貴方が死んだら、みんなどうすればいいんですか!?!』

悠二のあまりの軽い言葉にシャルティエが怒る。悠二はどこか悲しそうに

「もし、僕が死んだら」

ボゴボゴボゴ

死んだら……その続きの言葉を紡ごうとした瞬間、なにかの膨張する音に遮られる

「っち、往生際の悪いっ！」

不快感と共に吐き捨てる悠二。はたして、音の発生源は男の死体からであった

悠二が固有結界を解こうとした瞬間、息絶えたはずの男の体が動き出す。しかし、自己再生の類ではない。なぜなら、まるで人形のように立ち上がっただけなのだから。……そして、しばらくするとそれを起こした正体がその男の亡骸から這い出てくる。

「なるほど。さすがの僕の固有結界でも、魔力までは殺せないからな」

まるで、泡のように男の体からにじみ出ているのは、どす黒い怨念に染まった魔力。どうやら、宿主を失って暴走をしているようだ。

「っち、まだ帰れそうも無いな……っ！」

改めて、七つ夜を構える悠二。しかし、その瞬間彼は目を見張る。宿主を失った魔力の塊……それが一つの姿をとり始めたのだ。

「っち、そう来たか！^{トレスオン}投影開始」

今度は魔術刻印ではなく、自身の魔術回路を起こし、両手に剣を投

影し、

「壊れた幻想！」
ブローケン

瞬時に投擲、起爆する。

『どうしたんですか、坊ちゃん』

「まったく、なんで、よりにもよって！」

ヒュン

「っち！」

突然、壊れた幻想ブローケンによって生じた土煙を切り裂き、なにかが悠二に向かい剣を振るう。

「っち、悪趣味にも、ほどがあるぜ！壊れた幻想！」
ブローケン

とつさに投影した剣でそれを受け止め、再び起爆することで距離を置く。

「——っち、厄介なこった」

「・・・」

土煙が晴れ、そこに立っていたのは黒一色ではあったが、悠二そのものであった。

「まさか、僕をコピーするとはね・・・」

さすがの悠二も予想外だったのか、その頬には脂汗が伝う。

「愚痴ってもはじまらねえかぁ!!」

両手に干将と莫耶を投影すると、走り出す。

「・・・」

ガキイイン

相手も両手に同じようなシルエットの剣を具現化させ、悠二を迎撃する。

「猿真似でもなあ!」

——閃鞘・八点衝

「・・・」

——閃鞘八点衝

(っち)

放った斬撃の嵐・・・そのすべてが同じく斬撃の嵐によって防がれる。

「っ!ならぁ!」

——閃鞘 旋風

「・・・」

——閃鞘 旋風

旋風・・・左右への切り払いもまったく同じ切り払いによって相殺される。しかも、速度威力・・・それらすべて悠二と互角・・・

「っち、壊れた幻想！」
ブローケン

さすがに壊れた幻想までコピーできなかったようで、剣の爆発に巻き込まれる。

（っち、このままじゃジリ貧だぜ・・・。どうやって決める？・・・いや、待てよ）

悠二は、かつて自分の師匠に言われていたことを思い出し、すこし笑う。

「——まさか、あんな小言が役に立つなんてな」

そういつて薄く笑い、再び手に七つ夜を投影する。その瞬間、悠二のコピーは土煙を切り裂き、悠二に迫る。

——閃鞘 七夜

——閃鞘 七夜

神速とも呼べる切込みの突撃を同じ突撃で相殺し、悠二は自身の策への布石を展開する。

「まだまだ！」

「・・・」

——閃鞘 旋風

——閃鞘 旋風

ふたつの切り払いのぶつかり合い。しかし、悠二は笑う

「そこ！」

——閃鞘 臥龍

——閃鞘 臥龍

「チェックだ！」

「・・・っ！」

——閃鞘 八点衝

——閃鞘 八点衝

三度、同じ技の交差・・・するかに思われたが、悠二は途中で八点衝をやめてしまう。そして

キーセット
刻印起動
タイムアルター
時間制御・・・20倍っ！」

——固有時制御

「っ!？」

悠二は再び、時間制御による加速を行い、あるうことが斬撃の嵐をかいくぐることに成功する。

「悪いな。僕の技だ、弱点もわかってるんでね！」

——閃鞘 八点衝

斬撃の嵐を放ち、形作っていた姿を失う。しかし、再びどす黒い魔力に戻るだけ。このままでは、また何かの姿を形作るだろう。しかし、そんなことは悠二も解っている。

「・・・」

——万華鏡写輪眼

悠二の目に独特の文様が浮かび上がる。彼の所有する魔眼 万華鏡写輪眼だ。そして、やがて悠二の周りに赤い魔力が収束をし始める。それはやがて、悠二の背後にひとつの骸骨の巨人を顕現させる。さらに魔力の収束が強まるにいたり、肉が 皮膚が創造され、やがて鎧をまとった鬼のような巨人へと姿を変える。

これも万華鏡写輪眼の瞳術の一つ・・・名は、須佐能乎。

「終わりだ」

かの巨人の手に握られている一つの霊剣・・・それは、悠二の号令

によつて魔力の塊へと突き刺される。すると、魔力の塊はまるで吸い取られるかのようにその霊剣へと流れ込んでいくのだった。須佐能乎の持つこの霊剣の名前は、十拳の剣。

剣自体に封印の術式が刻まれており、突き刺した対象をこの世界とは異なる幻術空間へと封印することのできる最上級の霊剣のひとつだ。別名、酒刈^{さけがりのたち}太刀とも呼ばれている。

「・・・ふう」

『終わりましたね』

悠二のため息に反応するかのように、固有結界は解除され、通常の空間へと回歸する。男の張っていた封絶もとけているので、まさにふつつの空間だ。

（——はあ、やっぱり僕はオレなんだな・・・）

今回の戦闘・・・悠二は使わないようにしていたかつての技術・・・そのすべてを使用した。後悔はない。

（なら、せめてあいつらが笑っていられるように、僕は戦おうかね）

*

「あ、悠二くん！」

「どこいったんや!?!」

「探したんだよ！」

「ごめんごめん」

あのあと、転移で帰ってきた悠二はなのはたちからいろいろと文句を言われていた。今回は、自業自得ともいえるだろう。

それから、しばらく悠二は女性人のお説教を受け続けた。

「そういえば、悠二くんはどうするの？」

「どうするって？」

お説教を終わり、かろうじて復活した悠二になのはが聞く。当の悠二は脱力した様子でコーヒー（ブラック無糖）を飲んでいる。

「管理局に入るの？」

「——さあな。どちらにしろ、まだ僕にはやることがあるからな」

「・・・」

悠二の行っていること・・・それを知っているのは、この場でさくらのみ。

「そのやることって？」

「悪いが、答えられない。こればかりは離せないんだ。いや、話してはいけないことだ」

悠一の空気を悟ったのか、口をふさぐなのは。

（そう、ぼくには、まだやることが残っているんだ・・・）

二十六話 死の楽園（後書き）

遅くなって申し訳ありません。

悠二「まあ、お前の小説なんて、誰も楽しみにしてねえだろうけどな」

――Orz

悠二「竜様 こうり様 感想ありがとうございます」

さて、ベルワンさんからもらったアレ、どうしようかね？（黒笑）

――さて、それはともかく、今回はどうでしたか？

いろいろトラブルにあって完成にこんなにかかってしまいました。

今回は、やっと龍賀さんとのコラボになります。お待たせいたしました。

次回 龍斗と悠二です。

番外編 龍斗と悠二（前書き）

お待たせしました。龍賀さまとのコラボです。なにかおかしいところがありましたら、お知らせください

番外編 龍斗と悠二

「・・・」

『・・・』

時間は深夜。すでに日にちをまたいでいるような時間。悠二の部屋の一角にこしらえられていた魔法道具・・・ダイオラマ魔法球『通称 別荘』では、悠二とその相棒・・・シャルティエがなにか作業をしているようだった。

二人とも、額に汗がにじみ、結構な時間を作業に費やしていたことが解る。

「・・・完了^{セツト}」

『お疲れ様です。坊ちゃん』

———どうやら、おわったようだ。悠二の手元には黒塗りの鞘に収められた刀が一本 鰐の部分がなにかのシンダー状の者に帰られている片刃の大剣 そして、白と黒という対照的な色に塗装されたひと目でわかる大口径のオートマチック式の銃とそれとは反対にリボルバー式の拳銃が並べておかれていた。

「やれやれ、思った以上に時間を食ったな」

『はい、これらの完成だけならそこまで時間はかかりませんでしたけど、坊ちゃんが思いついた刻印の移動にほとんどの時間がかかりました』

「——そういな」

シャルティエに図星をつかれ、苦笑するしかない悠二。ちなみに刻印というのは、前回海鳴市に赴いた際に使用した魔術刻印のことだ。なぜ、悠二が魔術刻印をもっているのか？それは、いまたかるべきことではないので割愛させてもらう。

——話がずれてしまったな。あれから、悠二はその刻印の移動を試みていた。作業は難航を極めたが、ようやく先ほどの作業を経て、刻印の移動を完了させた。

「それに、移動というより、これは移植だけだな」

刻印は媒介であるロングコートに定着しすぎていたために、悠二の技術を持ってても無事に引き剥がすことは無理に近かった。だから、悠二はコートごと、移植の対象であるシャルティエのバリアジャケットに移植したのだ。思いついて実行したら案外うまく行ったようだ。

『しかし、すごいですね。この魔術刻印。擬似回路の形成に、いくつもの魔術が固定化されています。これを作った人の顔が見てみたいですね』

「——」

よほど感動したのか、すこし興奮気味にまくし立てるシャルティエに悠二はすこし自嘲めいた苦笑をもらす。

「——さて、それじゃこいつらの実験して、寝ますか」

『そうしましょう。・・・っと、坊ちゃん、お客様ですよ?』

ブイン

シャルティエがそう告げるや否や、別荘の施設の入り口付近に魔方阵が展開される。しかし悠二はその魔力光を見ると警戒するどころか、「ああ」とすこし微笑んでいた。しばらくして、魔方阵が少し発光して

「よつと」

『お邪魔します』

そこから姿を現したのは、悠二と同じ金髪で、碧と赤のヘテクロミアの瞳を持った美少女・・・じゃなかった、男の娘の森 龍斗だった。

「なにかむかつき紹介をされた気がする・・・」

——地の文に突っ込まないでほしいものだ。兎にも角にも、彼は悠二とおなじ転生者でひょんなことから悠二と出会い、まあそこそこ仲良くやっている数少ない男の友達でもある少年だ。転生先はリリカルだったはずだが、現在はネギまのほうへ転移してしまっているそうだ。

「よつ、龍斗。どうした?」

「いや、暇だからきたただけだ。・・・で、ここはダイオラマ球か?」

龍斗はあたりの魔力の豊富さなどから推察したようだ。隠しているわけでもないが、彼は人間であって人間ではない。ぶっちゃけた話吸血鬼だ。それも真祖。悠二も大概だが、経験や根本的な肉体のスペックでは、悠二では相手にならない。

まあ、あくまで“基本的な肉体のスペック”では・・・の話ではあるがな。

「ああ」

「よし、ならば模擬戦だ」
せんそう

悠二曰く『あいつは最近になって戦闘狂になった』とのことでもわかるように、ネギまの世界へ飛ばされてからというもの、以前より龍斗が好戦的になったと悠二は感じていた。まあ、実際その通りなのだろうけれど。

しかも、今回はすこしネタも入っている。まあ、それはともかく普段なら、露骨にいやな顔をする悠二だが、今回は手を口に当てて、黙考しているようだ。しばらくすると、なにかを思いついたようにパチンと指を鳴らすと

「——おし、乗った」

「珍しいな」

『本当ですね。普段なら、露骨に嫌がるのに』

「まあ、そういう時もあるさ」

龍斗はもちろん、彼のデバイスのブラッディクロス・・・クロスも今日の悠二の反応にはすこし驚いているようだ。

「ま、どうでもいいな」

しかし、龍斗はひさしぶりに手加減なく戦えるのでうきつき気分のようだ。

『——悠二さん、大丈夫なんでしょうか・・・』

クロスも悠二の実力は知っているが、妙に心配になってつぶやくほど、今の龍斗は上機嫌だった。

「こつちだ」

「ああ」

悠二の先導で、二人は施設の奥のほうへと入っていくのだった。

*

「じじは・・・?」

「ここは僕の使っている訓練場・・・まあ、解りやすく言えば、次元を捻じ曲げて擬似的な『精神と時の部屋』を作っている。超重力状態にもできるが、今回は要らんな」

悠二の先導で向かった先には、先の見えない広大な空間が広がって

いた。地面はかるうじてあるが、天井や壁といったものは一切存在しない訓練場だ。最近に悠二が作ったもので、次元をいくつにも湾曲させ、圧縮し一週間かけてこの空間を作り上げた。

——そのかいもあり、全力でのエヌマエリシュにすら耐えるような化け物な訓練場になっていた。

「すごいな・・・」

『ほんとうですね』

「ハハハ、驚いてくれたんなら作った甲斐があるってもんだ」

うれしそうに笑うと、訓練場の施設を出て、フィールドに入る。そこには本当に天井も壁も無い無限の空間が広がっていた。ちなみに余談ではあるが、迷子にならないように半径5キロの地点で無限ループするようになっている。

「さて、そんじゃ始めるか」

「ああ」

『『セット アップ』』

二人が相對すると、それぞれのデバイスが展開される。一瞬、光が二人を包み込み、光が消えたときにはそれぞれバリアジャケットに換装されていた。悠二は上下が別れ、左手にのみアーマーと袖の付いている黒い外套。以前は無かった、赤い複雑な文様が背中と片腕の袖に刻まれている。

対する龍斗は黒い学ランの上から、マントをまとっている。

「?・・・バリアジャケット変えたのか?」

「さあてね」

「まあいい」

悠二のバリアジャケットの変化に気づくが、おいおい解るだろうと捨て置き、ナイフ状態になったクロスを逆手に構える。悠二も龍斗を軽くはぐらかすと、さきほど、完成させた刀を構える。

「準備はいいな?」

「ああ」

「行くぞ!」

先手は龍斗。言うが早く、真祖の吸血鬼の身体能力・・・それに強化魔法をかけた上で悠二に迫る。

——閃鞘 七夜

突進の勢いをそのままに、悠二に切り込む。

「なめるなよっ!」

——閃鞘 七夜

悠二も同種・・・いや、まったく同じ技で迎撃する。しかし、同種

の技でも、まったく同じではなかったようだ。

ザクッ

「っち」

「悪いな。七夜これの体術に関しては、僕に一日の長があるんでね」

先ほどのなにかの切れる音・・・それは、龍斗のバリアジャケット・
・そのマントの端が切れる音だった。

「今度は、僕から行くぞ！」

——閃鞘 八点衝

「っ！」

——閃鞘 八点衝

今度は同種の技ですらなかった。悠二は斬撃の嵐を放つ、龍斗はそれをかるうじて、自分に当たる軌道のみ斬撃で叩き落とす。まただ・
・そう龍斗はこころのなかでつぶやく

（悠二のアレは、俺の知っている七夜の体術とはまったくの別物だ）
そこで龍斗は確信する。

「まだまだ！」

——閃鞘 連刃

「させるかつ！」

——閃鞘 八点衝

悠二の首 心臓 両腕 両足 両膝 両肘への斬撃を龍斗は再び切り払う。しかし、悠二にとって、それぐらいは予想済みのこと。

——閃鞘 八点衝

「そうは、させるかつ!!」

——閃鞘 三十二点衝

(つて、四倍でこれか・・・)

龍斗の知る八点衝の四倍もの斬撃を放つこの技でも、悠二の八点衝にはまだ足りない。

「キー セット 時間制御・・・ダブルアクセル 二倍速!!」

「固有時制御!？」

悠二のバリアジャケット・・・その背中と左腕に刻まれた刻印がわずかに光り、悠二が消える。

——閃鞘 九頭龍

「ucci!」

背後・・・それも死角からの攻撃に咄嗟に後ろへと跳躍し、避ける。
それがほんの一瞬でも遅かったなら、さきほどと同じ 首 両手
両足 両腕 両肘と膝を壊されていた。

なぜ防がなかったのか。理由は簡単だ、連刃とは違い、こっちは多^キ
重^シ次^ユ元^ア屈^ゼ折現象を利用してゐるため、いくら龍斗でも避けられても
防げない。

「——決まったと思ったんだがね」

「こつちこそ、驚いたぜ。固有時制御・・・まさか、使ってくるな
んてね」

龍斗も転生者だ・・・ゆえに固有時制御のことも知っている。しか
し、そこでおかしいと思った。そう、固有時制御のリスクに関して
だ。いくら、彼と同じ転生者とはいえ、彼は純粹な人間・・・時間
の修正を受けて、無傷で経っていられるほど、頑丈ではない。

そこで、悠二のバリアジャケットがわずかに光っていたことを思い
出す。

(・・・まさか、魔術刻印か?)

『その可能性は高いですね』

「考え事か?」

「っ!?!」

——閃鞘 八穿

ガキイイイン

龍斗でも一瞬ヒヤツとした。なぜなら、真祖の吸血鬼でもある龍斗をもつてしても、悠二の気配を感じられたのは、声をかけられた瞬間だったからだ。かろうじて、ナイフで斬撃を防ぐが、防がなければいまごろ悠二がその気なら、頸動脈を切り裂かれていただろう。

——非殺傷設定だろうから、それはないだろうが

(いまのは・・・気づかなかった。いや、気付けなかった)

龍斗も、悠二の気配遮断の凄さには、内心舌を巻く。

「あゝあ、やっぱり僕は暗殺^{これ}はあまり好きじゃないや」

「——どういうことだ？」

「さて・・・ね」

——牙閃壱式連牙

「っち」

——無極二式 雨

龍斗の問いをまたもやはぐらかすと龍斗に向かい、変幻自在に切り込む。それを龍斗は咄嗟にクロスを刀に変化させ突きの雨で打ち落としていく。牙閃とは、悠二が新しく組み込んだ技で、抜刀時に使用する技だ。龍斗の無極も彼独自の技だろう。

カチン

「——切捨て御免」

——居閃壺式 無明

「させるかつ！」

——無極一式 牙

壺式を終えた悠二は、すぐさま刀を納め、間髪要れずに居合いを放つ。しかし、それも龍斗の突きによって打ち落とされる。ちなみに居閃とは、牙閃が抜刀時なら、居閃は納刀時の業……つまり居合いである。

「これで終わりとでも？」

——牙閃壺式 鐵

「そう来るか……！」

——無極三式 烈火

居合い斬りからの切り替えしを、今度は龍斗が炎をまとった居合いではじき返す。きしくも、さきほどとは逆の構図になったわけだ。

「ハハハ！」

——牙閃三式 嵐

「フン！」

——無極四式 零

神速とよんでも差し支えない速度の三連突きを放つ悠二。しかし、龍斗のこれまた規格外な速度での連撃によって、はじかれる。当然といえば当然の結果だ。まあ、それはさておき、無極四式によってすこしとはいえ、怯んでしまった悠二。ここを見逃す龍斗ではない。

「食らえ！」

——無極四式 零

「っち」

——万華鏡写輪眼

完全に無防備になった悠二に容赦の無い斬撃を放つ龍斗・・・しかし、妙に手ごたえがないことに戸惑う。それは当然だろう。なぜなら・・・

「——残念」

——居閃零式 夢幻

「っち、イザナギか！」

咄嗟に危険を察知し、後ろに飛ぶ龍斗。その判断は正しく、コンマ一秒という差でその空間自体が切り裂かれた。

「？」名答」

龍斗からすこし離れた位置・・・そこには、無傷とはいえないまでも重症は追っていない悠二が右手に鞘に納まった刀を持ち、悠然と立っていた。さきほど切り刻まれた悠二はなんだったのか？理由は簡単だ。悠二は咄嗟に万華鏡写輪眼を発動させ、イザナギという瞳術を発動させたのだ。

イザナギの能力は説明は難しくない。自分に不利な事象は幻にし、有利な現象のみ現実とするチートな性能をもった瞳術だ。本来なら、一回使うごとに光を失いのだが、悠二の場合はそれは無い代わりに、一分のインターバルが必要になる。

「さて、そろそろ終わりにするか」

「フツ・・・そうだな」

お互いに薄く笑い、それぞれ獲物に手を駆ける。お互いにまだ戦えるが、これ以上やるという面倒だと判断したようで、決着をつけるつもりのようなのだ。

「ハッ！」

「ふん！」

——居閃極式 龍爪

——無極極式

悠二の真空波の嵐を生み出すほどの居合いと、龍斗の無極・・・その
れの壱式から四式まで全てをあわせた連携技が交錯する。その衝撃
はこの訓練場の次元すら揺らすほどのものだ。

「・・・引き分けだな」

「みたいだな」

お互いの技を潜り抜け、悠二は龍斗の首に龍斗は悠二の心臓に刀を
当てた状態で、静止していた。二人のいうとおり、この模擬戦の結
果は引き分けのようだ。

*

「相変わらず、勝てねえな・・・」

それから、別荘内の生活スペースに戻った二人はいろいろと雑談を
していた。テーブルには、食いかけの料理などがおかれていること
から、小さな宴会のようになっただろう。

「——なあ、悠二。七夜の体術・・・なんでいちばん最初から使
わなかったんだ？」

「・・・」

龍斗が要っているのは、いちばん最初の戦いのことだろう。あのと
き、悠二は当時の全力をかけたにもかかわらず龍斗に負けた。

「——決めたんだよ。たとえ、あいつらから嫌われても、あいつらだけは守るってな。そのためには、手段を選んでいる暇はなくなっただけだ」

「・・・フツ、どうやら俺もお前もよってるみたいだな」

「ああ、かもな」

悠二と龍斗はそれぞれ笑う。ちなみにテーブルには空になった一升瓶が三つほど置いてある。あとはご想像にお任せする。

「さてと、そろそろ帰るか」

龍斗は、そういつて立ち上がると着たときのように魔方陣が一瞬で展開される。

「——また来いよ」

「気が向いたらな」

そういつて、龍斗は転移で自分の世界へと帰っていった。龍斗が去っていったところをしばらく眺めていると

「さて、片付けたら僕も一眠りするか」

そういつて、悠二は散らかった部屋を片付けはじめるのだった。

番外編 龍斗と悠二（後書き）

さて、どうでしたかね？

すこし書き方を変えてみたんですが・・・

次回は・・・いまのところ未定ですね。日常か・・・それとも歪んでしまった撃墜事件か・・・

まあ、どっちにしろかなりあとだと思えますよ。

では、この辺で失礼いたします。

二十七話 この身、血に染めて

「――トレース
同調、開始」

それは夜の出来事だった。深夜、月が照らすなか、金色の髪をした少女……いや、少年静かに眼下に広がる光景を見下ろす。

――そこはまさに地獄だった

そこに生きるものはない、ただ居るのは死ぬことすらできず操られるあわれな亡者達

「――トレース オン
投影、開始」

短くとなえ、手に一对の夫婦剣を投影し、装備する

さらに

「エンチャント
付加」

付け足すように呟くと立っていた場所を蹴り、地面へと降り立つ

「――!!--!!--!」

すでに言葉すら失った亡者達は雪崩のような少年……悠二に襲いかかる

「無駄だよ」

それを流れるような動作で一人一人、切り捨てていく。悠二が与えているのは一太刀だけ……だが、それで十分だった

「っー」

——なんと、斬られた傷口からからだ崩壊し始めるからだ。よくみると、彼の手にある夫婦剣の刀身はなにやら血が付いたように赤くなっていた

「退け、きさまらに用はない。壊れた《ブローケン》幻想」
ファンタズム

血に染まった剣を投げ、壊れた幻想で爆破する。

「っち、死者の数が多い」

悠二は舌打ちし、直も数が減らない死者に辟易する。

どうして、悠二がここにいいのか？それは三時間前に遡る。

《さすがが死徒に誘拐された》、その情報が芳乃家の悠二にもたらされたのだった。

拉致したのは死徒、ゆえに恭也や美由希には連絡できなかった。

だから、魔術師……いや、魔術使いの悠二に連絡が回ったのだ。だから、悠二は単身、死徒の拠点へと、潜入していた

「——」

——いま、悠二はバリアジャケットを装備していない。なぜなら、

シャルティエを持っていないからだ

「I am the bone of my sword《我が骨
子は捻れ狂う》」

着ているのは聖骸布で織られたロングコート、それに魔術刻印のコ
ピーを刻み込んだものだ。

弓と捻れた剣を投影すると

「偽・螺旋剣」
カラドボルグ

放った

放たれた剣は瞬く間に死者達を貫いていく。

フロックンファンタズム
「壊れた幻想」

――仕上げに爆破する。

「トレース オン
投影、開始」

唱え、手に刀を投影する。それを低く構えると

「はっ！！」

――瞬鞘 八点斬

一瞬で、何体もの死者を八つに解体する。

瞬鞘とは、閃鞘を独自に昇華させた悠二のオリジナル技だ。

「っち、チマチマやってたんじゃ拉致が明かねえ！！」

チャキ

腰のホルスターから銃を抜き取ると

それを向ける。

「っ——く」

ダン

——激しくあり、そつとある根元の母よ！
ひびくは、朗々とした声

——エプシロンをも切り裂く。その力、今撃ち下せ！！

突然、発生した水の竜巻が死者諸とも、地面を抉る。

ガチャン

ピン

慣れたようすで銃身をおり、空の薬莢を捨てると弾を込め、ホルスターに戻る。

（死者、というよりゾンビだな）

死骸を踏みしめ、あるきだす。

《そつちはどう？》

《今のところは問題ないですよ。忍さん》

耳のインカムから通信が入る。

《そう》

《大丈夫ですよ。すずかは必ず僕が助け出します》

《——ごめんなさい、本来なら私達で片を付けなければいけないのに》

《言いつこなしですよ、とお迎えが来たみたいです。通信を終わります》

ブチン

「やれやれ」

通信を切ると、身構える。

「また、豪勢なお出迎えだぜ」

待ち構えていた死者達をまえにして、あきれたように呟く。

「トレース
投影、開始」

手に投影するのは、**「リ」**。

「——トリガー
投影、装填」

凄まじい魔力が矢を形成する。

「ナインライフスブレイドワークス
是・射殺す百頭」

——そして、放たれた

放たれたはそれは九つの閃光となり、死者を貫いていく。

「まだいるのかよ…」

げんなりしたようすで呟き、刀を投影する。とはいえ、綺麗な拵えのモノではなく、長ドス

銘は虎徹。

「さて、久しぶりに解体バラすか」

途端、殺気が満ちる。

——直死の魔眼

——直死 爪燕

流れるような動作で死者の間をすり抜け、正確に死の点を切り裂いていく。

「悪いが、今日は遠慮しない」

——直死 八点斬

今度は死の線に沿って八つに解体される。しかも一体ではない、八体同時に……だ

「まだまだ!!」

——直死 七夜

縦横無尽に線を切り裂き、地を駆ける。しかし、立ちふさがる死者の群れ

「ええい、めんどくさい。開け」

ウイン

背後に王の財宝をひらく。
ゲイトオブバビロン

その中から一本、剣を取り出す。

「出番だ、エア」

それは英雄王の剣、無銘にして至高の剣。

——乖離剣エア

ギューイイイイイイン

魔力を吸い取り、赤い光を放ちながら回転するエア。

「天地乖離する……」
エヌマ

さらに回転は強まる。

「^{エリシユ}開闢の星！！！！」

エアをつき出す形で力を解放する。

最低威力にしたにも関わらず、地面は抉れ、ゴミのように居た死者は肉片すらない。

「ふう」

ウィン

エアを王の財宝に戻し、一息つく。

ギィ

「っ！」

気配がして、銃を向けると…

「す、すずか…なのか？」

「——」

そこには歪な笑顔を浮かべ、服を血に染めた月村すずかがいた

二十八話 ミス

（なぜだろう、体が熱い）

——彼女——月村すずかは一人の化け物に誘拐され、なにか怪しげな儀式のようなものを施された

それからだった。

「——あああ」

妙に体が熱い。喉が渴く。

「な、なにをするつもりだ!？」

「——」

「やめろ!や、やめ」

グシャ

無言で誘拐しようとしたやつは殺す。

不思議と罪悪感はない。ただあるのは渴き

施設をでて、さ迷う。なにか生暖かい物を踏みしめ、前に進む

ドクン ドクン

心臓が跳ねる。体の熱がさらに上がる

なぜ？

「っ！」

ああ、このときばかりは神に祈れる。なんていいタイミングなんだろう。

そう、彼女は思う。

すこし離れた所にたつ黒いロングコートをきた金髪の少年、見間違えるはずがない

だって、だって

彼女が一番、欲しかったモノだから

「す、すずか…なのか？」

「ハハハハハ！」

すずかは悠二を確認した瞬間、信じられない速度で襲いかかった

「すずか！？くそ！」

手にした虎徹ですずかを迎撃する悠二、しかし

「悠二くん…！」

（ぐっ！？）

——やがて、虎徹が耐えきれなくなり、くだけちる。

「っち！」

——瞬走 六鹿

先ほどと同じ技を放ち、一旦距離を置く。

そして

「天の鎖よ！」

傷つくことの無いようにと王の財宝から、天の鎖エルキドゥを放つ。

——が

「無駄だよ！」

それすら容易く弾かれてしまう。

「トレース、オン投影、開始」

その隙に手に剣を投影する。

——瞬走 水仙

気配をすべて殺し、背後に忍び寄ると躊躇いなく降り下ろした。

「アハハハ！」

「ぐっ」

——否。

ほんの一秒にも満たない時間であったが悠二は一瞬、躊躇ってしまった。

死徒となったさすがの力に耐えきれず、剣は碎け散る。

「うち、トレース」

「させないよ！」

「っ！？」

ふたたび、剣を投影しようとする悠二を鎖で拘束するすずか。

しかも、驚くべきことに悠二を縛っている鎖は何もないはずの空間から出でていた。

マープルファンタズム
「空想具現化——ってことは」

「フフフ、やっと、やっと悠二くんが私のものになる」

「——悪いが、僕は誰のものでもないんでね」

「え！？」

すずかの空想の鎖を同じく空想で断ち切る悠二。

「トレース 投影、オン 開始」

「え!？」

——影縛り

投影した黒鍵に魔術加工を瞬時にほどこし、すずかの動きを止める。

「あとでいくらでも謝ろう。だがいまは!」
手に七つ夜を持ち、構える。

——瞬走 六劉

瞬時に間合いを詰め、六発蹴りを叩き込む。最後に上空に蹴り上げる。

——すると

「えっ!？」

「許せ」

——瞬鞘 地牙

——瞬鞘 天牙

二人に分身(したかのようにみえる) した悠二が切り上げと切り下ろしを放つ。

——瞬鞘 時雨

さらに突きを雨あられのごとく放つ。

「きゃあああああ!!」

「——視えたっ!!」

——直死 刹那

本来なら、一ヶ所に十発の突きを放つ技だが、速度をあげた一発で死の点を通つ

「あ、あああ」

「——」

ザシュ

突き刺さした七つ夜を抜き去る。

「あああああ!!」

「うぐあああ!?!」

すずかの体の中からなにかが這い出る。

「——消えろ、魑魅魍魎」

「き、さまかあ!!」

「ふん」

刹那

ザシュ

まだ支配されていたようで、すずかの腕が悠二を貫く。

「が、はあ！」

「は、ハハハハハハ。これで貴様も……」

その思念も消える。

「はあ、はあ」

しかし、こちらは重症だ。

「ゆ、悠二くん!？」

——しかし、そんなときおりわるくすずかが目を醒ましてしまう。

「私のせいで」

——おそらく、憑いていた死徒のせいで反転していたときの記憶はあるのだろう。いまにも泣きそうな表情で悠二を見ている

「大、丈夫だ。」

「嘘つかないで！お腹に穴が空いてるんだよ！！」

そういつている間にも、悠二の腹からは地がドクドクと流れていく。

「やれやれ、ドジっちまった——ぜ」

心配させないためか、強がりか、笑う悠二。

「悠二くん！？」

——しかし、そこで悠二の意識は途絶える。

「——絶対に死なせないからね」

——そのまぎわ、悠二にはそんな声が聞こえた気がした。

二十九話 死徒

「——知らない天井だ」

真祖とかしたすずかを止めた悠二が次に目を覚ますと、そこはベッドの上だった。

「痛っ!？」

身体を動かそうとしたら、激痛が身体を襲う。

「痛てて、しかしまさか僕が油断するとはな」

改めて身体を見ると、身体中に包帯が巻かれていた。

「まったく、やれやれだぜ。同調^{トレース}、開始^{オン}」

——身体 異常確認 軽微と判断

——魔術回路 異常なし

——吸血衝動 抑制に異常なし

目を閉じて身体を解析する。すると、予想外の事態になっていた。

「は？吸血衝動??」

（なんで、吸血衝動なんてあんだ？僕は死徒じゃないぞ）

ガチャ

「あ、悠二くん」

と、さすがが部屋に入ってくる。

「さすがか。っ！お前、目が」

「うん、赤くなっちゃったんだ」

彼女の言つとおり瞳は血のように赤く染まっていた。

「——なら、僕に吸血衝動があるのは……」

「うん、私のせいだよ。私が、悠二くんの血をすったから」

「——」

（だからか）

悠二は納得する。

「——ごめんなさい。わたしのせいで悠二くんまで化け物に」

ビシッ

「きゃ！？」

「まったく、バカなこといつてんじゃないよ」
軽い魔力弾ですずかの頭を小突く。

「殺人鬼が、化け物になっただけのことだ」
「殺人…鬼？」

「いい機会だ。いずれ、みんなに話す気だが、聞いてほしい」

「なにを？」

フツ、と自嘲気味に笑うと

「僕の、水無月悠二の末路さ」

そう言って語りだした。かつて、正義の味方を目指し、現実のうちひしがれ、殺戮するだけの機械になった男の話を

（三十分後）

「そんなの、報われなさ過ぎるよ…」

「――」

すずかは泣いていた。何故なら、悠二の過去はあまりにも、悲しすぎたから

「――こんな男に比べれば、君はまだ化け物なんかじゃない」

「悠二くん…」

「ね？そう思うでしょ？アナタも」

扉に向け、言葉を放つ悠二。

「――バレてたのね」

「お、お姉ちゃん!？」

ばつが悪そうに姿を表す忍と恭也、そして士郎。

「——すまない、立ち聞きするきはなかったんだが…」

「いいですよ。どうせ、みんなには話す気で居たんだ」

「悠二…」

三人とも、表情はくらい。

「——安心してください。あと数年もしたら、僕は消えます」

「「「「っ!？」」」」

「こんな殺人鬼なんて、居ない方がいいに決まっている…」

「そんなことないよ!」

悠二の言葉を遮るようにすすかが叫ぶ。

「悠二くんは、悠二くんだよ。機械なんかじゃないよ!」

「すすか…」

「君は、自分で思ってるほど機械にはなれていないよ

士郎が優しく微笑む

「だって、ほら」

悠二の顔を指差すと

「本当に機械だったら、そんな顔はしないよ」

「え…？」

士郎の指の先、悠二のかおは悲しみを写していた。

「——お前は確かに罪をおかしたのかもしれない。だが、それ以上の人間を救ったんじゃないのか？」

と、恭也

「——」

「だから、お前は化け物や殺人鬼なんかじゃない」

——立派な、正義の味方だよ

（正義の味方…か）

恭也の言葉を受け、考える。

「——わかりません。血に汚れた僕が、罪もない人を殺めた僕が、幸せになってもいいのか」

「悠二……」

「だから、こそ、君は幸せにならなくちゃいけないんだ」

士郎の確信に満ちた一言

「——僕に言えることはそれだけだ」

「——僕は…」

顔を手で覆う悠二。

「いますぐには、答えはでないかもしれない。でも、考えていてほしい」

「——」

「君は、必ず幸せにならなくちゃいけない。君を助けようとした君の友のために」

士郎の言葉は悠二のなかに強く響き渡る。

「悠二」

「っ!？」

バシッ

恭也が悠二に向かい、何かを投げつけ、それを受けとると…

「木刀？」

「こい、体はなおっているんだろ？」

それは刀と同じ長さの木刀だった。

「恭也!？」

「忍は黙っていてくれ。どうだ？」

「——ああ」

ベッドから起き上がると、王の財宝を開き、瞬時にライダージャケツトに着替える。

「場所は？」

「うちの道場だ。いいよね？父さん」

コクッ

士郎は恭也の言葉に静かに頷く。

「——いいだろう、この前は投影憑依を使ったが、今回は完膚無きまでに叩き潰してやろう」

「フッ、言っている」

二人は好戦的に笑うのだった。

二十九話 死徒（後書き）

よければ感想ください。

くるとこないのでは作者のテンションが違うので

三十話 再戦

「さあ、準備はいいか？」

「ああ」

あれから、月村家から高町家に移動した悠二たちは、道場で相対していた。

悠二の獲物は刀と同じ長さの木刀。恭也は以前と同じ小太刀サイズの木刀。

「悠二くん……」

「恭也、どういづつもりよ」

「――」

邪魔しないように、忍たちは端にいた。

「それでは……」

ギリッ

二人とも、木刀を強く握る。

「初め……!」

「「はあああああ……!」」

開始の合図に二人は同時に駆け出す。

「蹴り穿つ!!」

——瞬鞘 六劉

ためらいなく、本気の蹴りを放つ。直撃すれば内蔵破裂すら起こるだろう。

「（くっ、はい）まだまだ!!」

それをなんなく避ける恭也。さらにカウンターすら放つ。

「喰らうかよ! 釣りだ! とつとけ!!」

——瞬鞘 八点斬

「ぐっ!?!」

一瞬の八つの斬撃を見極め、正確に防いでいく。

（くっ、これが悠二の本気か）

後ろに下がり、間合いをとる恭也。

（あのときもそうだが、悠二のアレは暗殺術。しかも）

「考え事か? 余裕だな」

——瞬鞘 十六夜

「ぐっ！？（以前より、技のキレが上がっている！）」

おそいくる十六の規則性のない斬撃を見極め

「だが！！」

——御神流 徹

「ぐっ！？」

衝撃が悠二の体に諸に伝わる。そして、生まれる一瞬の隙

「貰ったあ！！」

——御神流 薙旋

チャンスと、四発の斬撃を放つ。

——しかし

「甘い！」

——瞬鞘 四仙

同じ四つの斬撃で受け止める。

「ついでだ！」

——瞬鞘 四仙六花

「くっ!？」

鋭さをました四つの斬撃をはなち、絞めに乱れ切った。

「くっ」

対応が間に合わず、何発か喰らう恭也。しかし、まだそれほどではない

(速い…。さすが、暗殺術というだけあるか)

「やれやれ、あれだけはなってそれだけか。暗殺術の看板、取り下げなきゃな」

油断なく木刀を構えながらぼやく。

「まあ、いいか!」

ダッ

床を蹴り、加速する。

(くるっ!！)

「突き穿つ!！」

——瞬鞘 刹那

「させるか!！」

——御神流 射抜き

一点に収束された十発の刺突と、連続の突きが衝突する。

「やるな」

「そっちこそ」

ツツー

あまりに速い刺突の応酬により生まれた真空の刃が二人の頬を切る。

（危なかった。ほかの技で迎撃しようものなら、負けてた）

改めて、悠二の強さを再確認する恭也。

「まだまだあ！！」

——瞬鞘 八点斬

「くっ！！」

（速い…だが）

ガキン

「っ！？」

八点斬のモーション中で剣を弾く。

（見切っている！！）

「そこだあ！！」

——御神流 奥技之極 閃

このさきに悠二の起こすアクションすら見通し、斬撃を放つ

——が

タイムアルター
「固有時制御、二倍速」

「なっ！？」

小太刀が悠二に届くことはなかった。

（いまのは…神速！？いや、悠二が使えるわけ）

「はあ、はあ。悪いな、魔術を使わせて貰った。」

「魔術？」

「ああ、お前さんのつかえる高速化、それに良く似たやつをな」

荒い息をつく悠二。

「悪いな、固^{コイツ}有時制御は反動が大きくてな。次で、極めさせてもら
う」

「——ああ」

恭也も頷く。

「——タイムアルター固有時制御、シックスアクセル六倍速——！」

「——はあ！」

——御神流 神速

悠二の捨て身覚悟の六倍固有時制御に神速で向かい打つ恭也。

「「はあああああ——！」」

——それは、一瞬にも満たない。そして、勝利の女神は……

バタッ

「はあ、はあ」

恭也に微笑んだ。

「あゝあ、負けちまった」

道場に大の字で倒れた悠二がケラケラとした様子で言う。

しかし、それだけでは終わらなかった。

「ねえ、悠二くん……」

威圧感をまとったさすがが物凄い良い笑顔で、悠二に詰め寄る。

「な、何ですか？スズカサン」

「今の魔術、説明してくれないかな？」

「え！？ちょ！？」

「いいよね？」

「い、イエスマム！！」

あまりの威圧感に、すっかり気圧された悠二は壊れた人形のように首を縦にふる

「それで、どんな魔術なんだ？」

恭也も気になったらしい。

「——固有時制御と言ってだな。自分の体の中の時間を調整する魔術だ」

「私が言いたいのはその代償のことだよ！！」
「っ！？」

すずかの言葉に凍りつく悠二。

「ど、どういふこと？」

「さっき、悠二くんがしたのは加速、しかも六倍」

「」「っ！？」

一同は驚愕する、

「それだけ、体に無茶をかけてる。だから、悠二くんはさっきから起き上がるうともしない。ううん、できないんじゃない？」

「――」

まったくの正解だった。いまの悠二は固有時制御の反動によって身体中の筋肉は切れ、満足に動くことすらできない。

死徒化した恩恵によって回復しつつあるが、気を抜けば意識が飛びそうなほどの激痛に耐えている。

「それに、今回は悠二くんは体を強化しなかったんじゃない？」

「っ!？」

「その様子だと当たりみたいだね」

「――ああ、今回僕は固有時制御以外、魔術は使用していない。理由は簡単、純粹に恭也と勝負したかった。ま、最後の最後で固有時制御を使っ^{アレ}ちまったんだけどね」

苦笑する悠二

「あと少しで再生が終わるからさ。すこし待っていてくれや」

そう悠二は笑い、二回目の悠二対恭也は恭也の勝利で幕を閉じるのだった

三十一話 決意

あれから小一時間後、悠二は体を動かすには支障がない程度には回復していた。

「——ありがとな、恭也。お前との戦いで吹っ切れたよ」

「そうか、それで？」

「たしかに、僕は人殺しだ。許されないかもしれない。だが、すこしだけ、自分のために生きてみるよ」

「それはよかった」

それを聞けただけでも恭也は満足だった。そして

「なのはを泣かせたら承知しないからな」

「ああ」

だが、シスコンだった。

「あ、居た居た」

「忍さん？」

そこにいくつか箱をもった忍がくる。

「はい、これ」

「これは？」

「君へのプレゼントだよ。すこし物騒だけだね」

パカッ

「っ！？これは…」

開けると、なかには多種多様なさまざまな銃火器

「悠二くんがどんな銃を使うかわからなかったらからね。こっちで最高品質のものを揃えたわ」

「すげえ」

珍しく、悠二が圧倒されていた。

「忍、こんな短い時間で良くこれだけの銃を集められたな」

「家にあつたものを持ってきただけよ。まあ、一部は苦労したけどね」

悠二はよほど驚いているのかさつきからすげえすげえと連呼している。

「——同調、^{トレス}開始。^{オン}って、するまでもなかったな」

解析してまで、精度を確かめる。

「気に入ってくれたかしら？」

「あ、ああ。ありがとな、いやマジで。」

よほど嬉しいのか、敬語も忘れている。

（——まあ、実際は悠二くんのほうが年上だしね）

忍は気にしていない

「しかし、こんなもん、貰っても良いのか？」

「ええ、どうせ使わないし。あ、あとこっちは弾丸よ」

さらにトランクを渡す。

「——ほんとにすまん」

ワイン

ひとまず、貰った銃器をゲートオブバビロンにしまいこむ。

「御返し…とはなんだが、これを渡しておこう」

と、渡したのは酒瓶。

「——これは？」

「僕の宝具、^{ゲートオブバビロン}王の財宝は古代ウルクの王ギルガメッシュの生前蔵に納めた宝物すべてが納められている。その中にあった酒だ、味は保

証する」

「えっ！？そんなものを貰っちゃって良いの！？」

「気にするな、それと恭也にはこれだな」

ウイン

さらに小太刀をふたふり、取り出す。

「銘はないが、一級品の小太刀だ」

「っ！？」

抜いて、恭也は固まる。

「僕からの贈り物だ。強化してあるから、核ミサイルでも撃たれなきゃ折れたりはしないよ」

「ハハハ、すごいな」

それを受け取り、苦笑する恭也

「でも、いいのか？こんな業物」

「いいんだよ、どうせ戦いになったら虎徹とか村雨とか投影するんだから」

「——相変わらず、反則級の魔術ね」

忍の言葉に苦笑する悠二。

（まあ、恭也には渡すのは虎徹とかでもよかったんだよな）

そうしなかったわけは単に知名度だ。知られるとめんどくさいからである

「それに、僕は小太刀は使えないからな」

「悠二くん、僕からひとつ提案があるんだけど、いいかな？」

と、いままで黙っていた士郎が口を開く。

「恭也に、君の技を教えてやってほしい」

「っ！？」

「無論、只とは言わない。僕や恭也、美由希の使う御神流を教えよう。どうだ？」

それは、悠二にとっては願ってもない申し出だった。

——だが

「——ひとつ聞かせてほしい。」

「なにかな？」

「僕のこの技は暗殺術だ。アナタ達はなぜ、それを欲する？」

「――父さん？」

「――僕は、何年も前に死をさまようぐらいの重傷をおった」

――それは、なのはや悠二が六歳の時。御神流の剣士 高町士郎
ら制止をさ迷った。

そのせいで、高町家は家庭崩壊にまで陥った。

「御神流はたしかに強い。だが、無敵ではない。知つての通り、恭
也と忍さんは恋仲だ。月村家のことは知っているだろう？」

「ああ」

「故に、忍さんを狙う輩から彼女を守るため、恭也は戦うだろう。
そうなったとき、恭也には私のようになってほしくはない。」

それは、士郎の願いだった

「――わかった。もし、復讐なんて理由を翳したなら、僕はアナ
タ達の要求を蹴っていただろう。だが……」

士郎、そして恭也を見据えて

「良いだろう。好きなだけ持っていけ」

笑顔で答えた

それから、一週間。悠二は海鳴市に通い、恭也には暗殺術を伝授し
ながら、士郎達から御神流をならっていた。

恭也が覚えたのは、八点衝、七夜、六兎、旋風、瞬鞘では八点斬、刹那などである。

一方、悠二のほうは徹貫閃虎切などである。神速は固有時制御で代用できると習わなかった。

三十二話 限界

「やれやれ」

悠二はリンディからある資料を渡され、目を通していた。

「どう？」

「アホじゃねえのか？まったく…」

「ええ、私から見てもこれはね」

リンディも渋い顔でうなずく。

「まさか、はやてもこんな感じか？」

「それほどじゃないわ。それでも、無茶してることには違いないけど」

それをきいて、悠二は苦虫を噛み潰したような顔になり

「——わかった。なのはには僕の方からいつてみる」

「ごめんなさいね」

「気にするな。僕がやりたいからやるんだ」

（——わかってはいたが、まさかここまでとはな…）

リンディに答え改めて、手にある資料に目を落とす。そこには成人

の局員ですら真っ青な任務記録。

局員名の欄には

——高町なのはと書かれていた。

*

リンディと別れた悠二はなのはのいる部隊に向かった。

「あ、悠二くん」

「よう」

そして、デスクワークに勤しむなのはを見つけた。

（——そうとう、無茶してるな）

解析をかけて、なのはの体を分析した悠二は彼女のからだの現状を見て思う。

「どうしたの？悠二くんがこんなところに来るなんて」

「すこしな」

「？」

疑問顔なのはに悠二は告げる。

「お前さ、しばらく長期休暇でもとって地球に戻れ」

「何でそんなことを言うの？私は大丈夫だよ」

なのははそう言う。

「——本当にか？」

「うん」

躊躇いなく答えるなのは。それをみて、すこし悲しげに表情を揺らす悠二。

だが、なにも言わずにあるきだす。

去り際に

「——忠告はしたからな」

そう言った。

「なんで、そんなこというの。悠二くん」

悠二がいなくなったあと、なのはは一人、呟く。

（私から魔法がなくなったら、フェイトちゃんたちは…）

『マスター、そろそろ時間です』

「あ、うん」

自分の考えに埋没しているとレイジングハートに告げられ、なのはは席をたつのだった。

一方、隊を出た悠二は

『いいんですか？坊っちゃん。なのはさんの体は…』

「ああ、そろそろ限界だろうな」

近くの喫茶店にいた。

『なら…』

「——シャル、僕はあくまで道を示すだけだ。選びとるのはあいつ自身だ」

そういつて、コーヒーを飲む悠二。

『フフフ』

悠二の言葉を聞いてシャルティエは笑う。

「なにが可笑しいんだ？」

『や、坊っちゃんは素直じゃないなと思っただけですよ』

「——なんのことだか」

顔を背け言う

『じゃあ、なんでなのはさんの服に発信器なんて付けたんですか？』

さっき、去り際に悠二が行ったことをシャルティエは見逃さなかった。

「――」

凶星なのか、誤魔化すようにコーヒーを飲む悠二。

（やっぱり、坊っちゃん優しいですね）

そんな主を見て、シャルティエは思っただった。

――そして、しばらくすると

『あ、なのはさんたちが転移したみたいですよ？』

「――」

『行かないんですか？』

ガチャン

溜め息をつく、喫茶店をでた。

「――行くぞ、シャル」

『了解、セットアップ』

ウィン

バリアジャケットに着替えると、転移するのだった。

一方、なのは達は

（悠二くん、なんであんなことを言っただろ…）

悠二より早くに現地に入ったのは飛びながら、そんなことを考えていた。

（魔法がなくなったら、私はまた一人になっちゃうのに…）

——それが、なのはを動かしている想いだった。

原因は、士郎が重傷をおったときに感じた孤独だった。だから、なのは魔法を使って役に立たなきゃ、なのはの周りからみんなが消えていく…そう考えていたからだ

（なんで、わかってくれないの…）

「っ！」

そこに出現したアンノウン。当然、迎撃体勢をとろうとするのはだったが…

（からだが動かない！？なんで！？）

悠二の予想がいま、的中した。

「おい！なのは、どうした！！」

横にいたヴィータが叫ぶが、なのはは反応できない。

（やられちゃう！！）

死さえ覚悟した、そんなとき・

「え？」

しかし、なのはに痛みはない。

「ゆ、悠二くん！？」

「悠二！！」

そこには、なのはをかばいアンノウンの攻撃を黒鍵で防ぐ悠二がいた。

「ucci」

「な、なんで！？」

「アホが、いったじゃねえかよ。投影、^{トレース}開始^{オン}」

開いた左手に刀を投影すると

「僕の友達に手を出したんだ。ただで、すむと思うなよ！！」

——直死 八点斬

直死の魔眼を開き、線という線を切り裂く。なのはを横抱きにして、着地すると

「悠二!!」

ヴィータが駆け寄ってくる。

「ヴィータ。なのはを頼む」

なのはを立たせ、ヴィータに言う。

「あ、ああ。だが!!」

「良いから行け、あとのことは僕に任せる」

「悠二!!」

ウィン

強制的に転移させる。

「やれやれ、世話が焼ける。^{トレース}投影、^{オン}開始」

完全に消えたのを確認すると、手に黄金の杵柄と、呪いの赤槍を投影する。

「^{リンク}互換・・・^{セット}完了」

自分の体・・・正確には魔術回路をバイパスとして、二つの宝具の

能力を共有する。悠二の魔術投影付与をさらに強化したものだ。

「悪竜滅ぼす神なる稲妻！！そんで、貫け！！突き穿つ死翔の槍！
！」
ヴァジユラ
ゲイボルク

放つ。

放たれた鉄槌と赤槍はいくつにも分裂し、神速をもってアンノウンと衝突する。

「ブローケンファンタズム
壊れた幻想」

ドゴオン

さらに爆破する。

「——ふう、世話が焼ける」

残ったのは爆破された残骸と、爆発によって生まれたクレーターだけだった。

三十三話 友達

ミッドに戻り次第、なのはは病院に運ばれた。すぐさま、検査が施され、驚くべき事実がシャルルによって知らされた。

「う、嘘でしょ？」

「冗談、きついで。嘘だっていつてや。シャルル」

それをきいて、動揺するフェイトとはやて。

「…嘘じゃないわ…、なのはちゃんの身体は、今までの無理な訓練や魔法の使用でボロボロなの…。正直、歩けるようになるかも怪しいわ…。最悪歩けるようになって、魔法は使えないかもしれないの…。」

「くそッ！！なんで…、なんで！！」

「落ち着け！！ヴィータ！！」

ヴィータを諫めるシグナム。

「やれやれ、無茶のツケだな」

「っ！？悠二！？傷は！？」

と、そこにふらりと悠二が姿を表す。ダークスーツに来ているため、端から見ると男装の麗人のようなだ

「塞がったよ、言っただろ？僕はもう、人間じゃないんだ」

「人間じゃ…ない？」

ああ、とこたえなのはに歩き寄ると

「——まあ、それはあとで話すとして、なのは、まずはお前だ」

「ビクッ!!」

「——トレース 投影、開始オン」

手にアゾット剣を投影すると、それを床に刺す。

「なにをするんだ？」

「結界だね。悠くんはこれからロストログアに匹敵するものを投影する気だから」

と、横にいたさくらが答える。

「セット Anfang」

ブオン

さくらの言葉通り、病室の周囲に結界が展開される。

「トレース 投影、開始オン」

目を閉じ、手を空中に翳す。すると、目映いばかりに輝き出す。

「眩しい!？」

「なにを出す気だ!」

『マスター、気づいているか?』

「ああ」

一人、いや二人だけ悠二がなにを出そうとしているのかに気付く。

『悠二め、やはりアレを呼び出すのか』

アーチャーがひとり、ぼやく。

「なにを出そうとしているの?」

音姫も、かなり気になるようだ。

「なのはさんを直せるんですか?」

『ああ、それに関しては必ず治るだろうな。傷跡ひとつ残さずに』

「「っ!?!」」

アーチャーの確信した言葉にこのばにいる全員が驚愕する。

『だが、心までは無理だな』

「――^{トレース}投影、^{オフ}完了」

光が、何かの形に収束していく。それは…

「楯か？」

「うっん、鞆みたい」

『鞆だ、しかもただの鞆ではない。かの騎士王の聖剣を収めた鞆だ』

「アーサー王の！？」

「なんやて！？」

アーチャーのカミングアウトにその手の知識に深い二人は驚愕する。

悠二はそれをなのはの体内に埋め込んでいく。

「す、すごい。なのはちゃんの体の異常がなくなってく」

検査したシャルマルが驚愕する。

「ふう、これで大丈夫だな」

額の汗をぬぐい悠二。

「さて、体も回復したところで説教の時間だ」

「――」

「なのは、お前は怖かったんじゃないか？魔法という枷がなくなったら、フェイトやはやて達がいなくなるんじゃないかと」

「っ!？」

「だから、お前はそこまで無茶をしたんじゃないか？」

「…やめて」

まるで、すべてを見透かしているような悠二の言葉。

「独りになるのがいやだから、自分は人の役にたっているという優越感にひたりたいから…」

「やめて!！」

なのはの拒絶が悠二の推論が正しいことを証明する。

「——お前は、そんなにフェイト達が信じられないか？」

「え？」

「そんなに、薄情なやつらだとも思ってたか？」

「なのは…」

「なのはちゃん…」

「——高町なのはに問う。汝、空へと飛び上がる翼を望むや？」

古めかしい言葉で問いを投げ掛ける悠二。すると、なのはは…

「…私は…、私はまた、みんなと…、みんなと空を飛びたい!」

「フツ…」

その言葉に悠二は口角をつり上げると

「なら、頑張ることだな」

「うん!」

「フツ」

悠二は病室を出ると、病室は騒がしくなった。

(やれやれ、相変わらず世話が焼けるよ)

と、病室から少し離れた休憩所を向かうと

スッ

ボツ

「——ふう」

コートから有名な銘柄のタバコを取り出すと、火をつけた。

未成年者の喫煙は禁止だ

「気にするな、僕は人間じゃない」

スッ

目に手をやり、コンタクトのようなものをはずすと、悠二の目は血のように赤く染まっていた。

（——もう、隠すことも簡単じゃなくなったな）

体を感じる倦怠感を感じながら、タバコをふかす。

『坊っちゃん、やはり死徒化の影響が…』

「ああ」

（真祖に近いさすが死徒としての僕の親のためか、吸血衝動はあまりない。だが、この気だるさは如何ともしがたいな）

やはり、死徒。日光は苦手だった。

「あ、悠くん。ダメだよ、タバコなんて吸っちゃ」

「いいんだよ」

と、そこにさくらが来る。

「体はどう？」

「ダルいな、そんだけだ」

タバコを慣れた様子で吹かしつつ答える。魔法で遮断しているため、さくらには煙はいかない

「そう、よかったね」

やがて、煙草を灰皿に捨てると

「やれやれ」

病院をあとにするのだった。

それから、なのはは四年かかるはずのリハビリを二年で終わらせ、復歸したのちに、教導官の資格を取ったのは、ある意味必然と言えるだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4373r/>

壊れた正義の味方はなにを見るのか？

2011年11月18日04時05分発行